
トリリスの娘

ほーらい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリリスの娘

【Nコード】

N7924J

【作者名】

ほーらい

【あらすじ】

霧の深い森の中、三人の魔女の少女は魔術を研究していた。

一番末っ子のおっとり少女アリス、次女のイタズラ少女マリス、長女のしっかり者イリス。

三人はいつも仲良しで、助け合って暮らしていた。

これはそんな三人の少女の物語。

ほーらいのほのぼの系ファンタジーです。

毎週月曜日に連載します。

0 光輝

第零話

少女達の鼻歌が森の中に響く。

濃密な霧をはらんだ森は魔女にとってこの上なく魔術を使うのに適した場所だった。

三人の娘が大きな荷物を持って森の中を歩く。道などありはしない。だが、その中を少女達は迷うことなく歩いてみせる。

「ここらへんがいいかしら？」

「そうだねえー。ここなら誰にも邪魔されることなく研究できるよ
おー」

「魔脈も上々です。風水的にもここはいい場所ですよ」

少女達は開けた広場に出る。そして、そこに大きな布を広げた。
「じゃあいくわよ？」

白銀の少女は歌うように、高らかに精霊との誓いを結ぶ。

“ここにおわします精霊よ、我にわずかばかりの力を貸したまえ。
契るは契約、誓うは誓約。我らに過ごしやすうい家を与えたまえ”

あらかじめ布に刻んであった魔法陣に魔力が流れていく。
すると布が盛り上がり、小さな小屋を形成していく。

「お母様ったら、こんな上級魔術を付与した魔法陣をくださるなんて……まったく、心配性なんだから」

それは魔術によって布に封じ込めてあった小屋だ。あらかじめ作ったものをテントのように簡単に持ち運びのできるようにした簡易住宅である。

金髪の少女は扉に手をかける。ぎいっという軋むような音を立てて扉が開かれる。

外から見たものとは比べ物にならないほど広い部屋が広がっていた。これも高等魔術によって空間を拡張した特殊な部屋だ。

「私はこの部屋がいいー!」

「じゃあ私はここで」

「私はここにします」

三人がそれぞれ三つあった扉を開くと、三人は目を輝かせた。

金髪の少女の部屋にはいくつもの薬品や道具、材料などが棚に並んでいる部屋が。

茶髪の少女の部屋には何百冊もの魔術書が棚に収められ、テーブルの上には水晶玉やドクロ、怪しげな材料が。

白銀の髪の少女の部屋には精霊と契りを交わすのに必要な護符や触媒、そして地脈の力を測ったりする道具がいくつも収められた部屋が用意されていた。

「お母様ったら、私達の部屋を再現するなんて随分手の込んだことをしてくださったのね」

白銀の少女は護符の一枚を手にとってみる。それは自分が手垢が付くまで使い込んだものと全く同じ物だった。

「ああ、お腹空いたあー。ご飯にしようよ」

茶髪の少女が声を上げる。ここまで来るのに長旅だったのだ。お腹が空くのも当然と言える。

「じゃあ、ご飯の準備しますね」

金髪の少女は部屋を出て台所に立つと、あらかじめ用意されていた野菜の類を調理し始める。

「ご飯は何いー?」

「じゃあ、ロールキャベツにしましょう!」

少女はキャベツを剥くと、ひき肉を取り出して丸めて、カタクリ粉などを混ぜこんで、それを一つずつ紐で結んでいき、鍋へ落とすていく。

「私手伝うことあるうー?」

「じゃあ、ご飯をお願いしますね」

「らじゃー!」

茶髪の少女は金髪の少女の隣に並ぶと米を研ぎ始める。

「私は食器の準備をするわね」
白銀の少女は棚に収められた食器の類をテーブルの上に並べていく。

彼女達はトリリスの娘。それぞれ名をアリス・トリリス、マリス・トリリス、イリス・トリリスといった。

金髪のアリスは一番末っ子の魔女見習い。錬金術を学ぶ薬師である。

茶髪のマリスは次女の魔女見習い。世界を面白くするために黒魔術を学んでいる。

銀髪のアリスはしつかり者の長女の魔女見習い。人のためと信じて精霊魔術を学んでいる。

三人は仲良し魔女見習い。いつも一緒に、けれども進む道は違って……。だけれどもいつでも三人は助け合ってきた。

森の奥深くで暮らすことになっても、きっと助け合っていくのだろう。

「できました！」

ロールキャベツをアリスは皿に取り分けていく。

「やっぱりアリスの料理は美味しそうだねえー」

マリスはご飯も出来上がっていないのにもかかわらず、さっそくフォークを伸ばす。

「ダメですよ。まだご飯ができてませんからね」

「ちえー。アリスはそういうところが厳しいんだからあー」

マリスは口を尖らせて不平をこぼす。

「アリスの言う通りよ。全部準備ができてから食べましょ」

やがてご飯の方も準備ができる。マリスはご飯をフライパンに移すと、バターと塩で味付けしながら炒める。

「はい、準備完了あー」

それを皿に取り分けていく。

「もう食べていいよねえー？」

「はいはい、いいわよ」

マリスはさつそく席についてロールキャベツをフォークで口に運ぶ。

「美味しいー！ やっぱアリスの料理は最高だねえー」

「ありがとうございます」

アリスはにっこり微笑む。

「バターライスも程よい塩味だね。マリスは本当に料理が上手なつたのね」

「えへへえー。練習したもんねえー」

イリスはマリスのバターライスを褒める。マリスにはにかむように笑った。

「辛ッ！？ マリス姉さま、なんかこのバターライス凄く辛いんですけど！」

「えへへ、隠し味にアリスの分だけコシヨウたっぷりトウガラシ入れちゃったあー」

「ええ！？ 私だけですか！？」

こうして三人は笑いながら食事を済ませる。

食器の片付けはイリスが行った。

「ふうー。お腹いっぱい」

「トウガラシさえなければよかったですけど……」

バターライスのことを根に持っているのか、アリスはマリスを睨む。

「人生面白おかしくないかねえー」

「私は全然おかしくありません！」

三人はほのぼのしながらお茶の準備をする。

「紅茶は何かいいですか？」

「私カモミールのハーブティーがいいなー」

「じゃあ私もそれをお願い」

アリスはまずお湯を沸かし、ポットとカップを温める。

最高の紅茶を楽しむためにはこの手順が欠かせない。

そして紅茶の入った瓶を開くと、スプーンで紅茶の葉っぱを取り出した。それをポットの中に移し、よく蒸らしてカップに注ぐ。

「はい、どうぞ。こっちにクッキーもありますよ」

「やっぱ紅茶にはクッキーだよねえー」

「ありがとう、アリス」

アリスも二人の隣に座ると、自分のカップを傾けながらクッキーを口に運ぶ。

こうして今日もトリリスの娘達は午後の一時を楽しみながら過ぎていく。

これから彼女を待ち受けるものはなんだろうか。

彼女達を待ち受ける運命がどんなものであるうとも、彼女達の紡ぐ物語をあなたは読み続けることができますか？

これは幻想の中の小さな物語かもしれない。

特別変わったこともなくて、彼女達にとっては当たり前前の日常で、そんな何の変哲もない物語。

そんなお話でも、あなたは読み続けてくれますか？

決心がついたあなたは、彼女達の笑い声を頼りについてきてください。

まだ迷っているあなたは……もう一度だけ考えてみてください。

きつと彼女達も、足跡を辿ってくれる人が多い方が喜ぶでしょう。

これは小さな物語。

きつと物語は続いていく。

いつまでも、どこまでも、ずっとずっと、永遠に……。

0 光輝（後書き）

アリスは錬金術師。

錬金術は薬を作り、人々の役に立つのが主なお仕事。

彼女は作った薬を街へ売りに向かう。

けれども、街の人々は彼女のことなど気にもかけないで……。

1 アリスの午後

第一話

アリスは錬金術師。

錬金術で作った薬を売って生計を立てている。

今日も彼女は街へと薬を売りにやってきた。

「お薬はいかがですか？ 小さな怪我から風邪に肺炎、結核までなんでも取り揃えていますよ」

街角に薬屋を開く彼女はにこにこ笑いながら道行く人に声をかける。

錬金術によって作り出された薬は様々な効果を持つ。いわば魔法の薬だ。並大抵の怪我や病気を治療することができるだろう。

だが、同時に魔女といかがわしい存在であることも確かだ。魔女を騙って色水を売る者中にはいる。そういうことから、彼女の薬は必ずしも売れ行きがいいとは限らなかった。

実演をしようにも、錬金術とはわかりやすい奇跡を起こす魔術ではない。錬金術師が魔女であることを証明することは難しいことだった。

「こほ、こほ、お嬢ちゃん。風邪に効く薬はあるかえ？」

「どんな風邪ですか？」

ふと、彼女の元へ老婆が訪れる。アリスは老婆から症状を聞き出すと、素早く薬を選び出して一本の瓶を差し出した。

「はい、どうぞ。飲めばたちまち良くなりますよ？」

老婆はお金を支払って瓶の中身を飲み干す。

「おお、お嬢ちゃんが魔女というのは本当のようじゃな。体が一気に軽くなったわい」

「それはよかったです」

アリスはにっこり笑って老婆を見送る。

今日の売上は風邪薬だけか、とアリスは残念に思っただけで店終いの支度を始める。そろそろ日が西に傾いてきていた。

「うおお！？」

そのとき、彼女の目の前で少年が派手に転ぶ。両手には体に見合わない大きな荷物があり、そんな状態で走っていれば転ぶのもおかしくはない。

アリスは少年の元へ駆け寄る。

「あいたたた……。はっ！ 商品は！？」

少年は荷物に傷がないか確認する。どうやら運んでいた荷物は無事だったようだ。

「ふう……。よかった。親父にまた怒鳴られるところだったぜ……」

「大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫……。いてて……」

少年は膝に大きな怪我を作っていた。

「畜生……。荷物が無事でもこれじゃあ運べないぜ……」

「あ、ちよつと待ってくださいね」

アリスは思いついたように薬棚を調べる。

「ちよつと染みますよ？」

傷口を水で洗い、そこに綿へ染み込ませた薬を塗り込む。すると、驚くべき速度で傷は治っていく。

「うわお！ 君、魔女！？」

「はい、そうです」

アリスははにかむように笑った。

「このご恩は一生忘れないぜ！ 俺、道具屋見習いのガストって言うんだ。なんかあったときはアトリエ商店まで来てくれよ！」

「ガストさん……。ですか？」

「急ぎの用事だからさ！ ホントはもう少しゆっくり話したかったんだけど、ごめんな！」

そう言うと、ガストは大きな荷物を肩に担いで走り去っていく。

それをぼんやりとしながらアリスは見送っていた。

「そりゃー、薬代請求すべきだよー」

アリスは家に帰ると、二人の姉妹に今日あった出来事を話した。

「まあ、善意で助けたってのもアリなんじゃない？ 魔女ってのは人を幸せにするためにいるんだからさ」

「でも善意は無料じゃないんだなあー。そうじゃないと私達魔女も生計立たないよー」

アリスは夕食の支度をしながら二人の話聞く。

アトリエ商店まで行けば支払いを迫ることもできるだろう。けれども、イリスの言葉もその通りだと思った。

「きつと縁が巡り巡っていいことあるかもしれないわよ？ 情けは人の為ならず、って言うしね」

情けは人の為ならず、情けを人にかけておけば巡り巡って自分に良い報いが来るという意味だ。情けを人にかけてということはその人の為にならない、というのは誤用である。

「にしし、アトリエ商店って言ったらあの街最大規模の商店だよー。そこにコネができればいいかもねえー」

「もう、マリスはそういうことしか考えないんだから
イリスは腰に手を当てる頬を膨らませる。

「まあでも、きつとその子もアリスにお礼がしたいだろうし、明日アトリエ商店に行ってみたら？」

「そうですね……」

アリスはぼんやりと明日はどうか考えながらスープの入った鍋をかき混ぜていた。

「あ、いけない、焦がすところでした！」

アリスは慌てて火を止める。

「にゃははー。アリスに早くもボーイフレンド到来かにゃー？」
「もう、マリスったら」

結局どうするか決めないまま、アリスは街へと足を運んでいた。昨日と同じ場所で店を構える。

店の前を何人もの人々が歩いていった。

だが、彼女の元を訪れる客は一人もいない。

「あー君、ちよつといいかな」

やっと客が訪れたと思って、アリスはぱーっと輝かしい笑顔を浮かべた。

彼女の前に立っていたのは一人の警邏の男だった。

「路上で商売するには許可が必要なんだ。許可証はあるか？」

「えつと……その……」

アリス達はあの森に引越してきてまだ日が浅かった。無論、この街のルールなど知りもしない。

「許可証がないなら店を退けてもらわないといけないな」

「そう……ですか……」

「許可証は一日1ゴールドだ」

「そんなにするんですか……!?!」

1ゴールド、すなわち金貨一枚は100シルバー、銀貨百枚に相当する。そして1シルバーは銅貨百枚、100ブロンズに相当する。

1ゴールドは彼女の一般的な薬十本分だ。一日一本前後しか売れない彼女の店では1ゴールドも支払うなんてことは無理だった。

「許可証は市役所で発行しているからそこに期間と販売目録を提出してくれ。それまでは商売禁止だ」

アリスは仕方なく店を畳める。薬の入った大きな棚を背負うと、

アリスは途方に暮れていた。

「いよ」

ふと、アリスは聞き覚えのある声を聞いた。

「やっぱ無許可だったかー。いやー、見ない顔だからどうしたんかと思っただよ」

アリスが振り返ると、そこには昨日出会った少年が立っていた。

「ガストさん！」

「覚えててくれたんだ。よかったー」

ガストは親しげにアリスの隣に並ぶ。

「昨日はサンキュ、助かったぜ」

「いえ、どういたしまして」

「警邏の連中が昨日、君のことを調べてたからさ。ちょっと気になつて来たんだよ」

「どうしましょう……。私は商売ができないとお金が稼げませんし、かといって1ゴールドなんて金額、毎日なんて払えませんし……」

「だろうと思つたよ。昨日、実は何度もあの店の前を通つてたんだけど、人はほとんどついてなかつたからな」

そこでガストはぴんと指を立てる。

「そ・こ・で、だ。ウチの敷地内で店出さないか？ 親父に昨日聞いてみたんだよ。ウチの親父はアトリ工商店の頭目だからな。そして、ある条件を飲む代わりにウチのところに並べて店を出してもいいってさ」

「ある条件……ですか？」

「それはな……」

「がっはっは！ こんなべっぴんさん連れてくるとはお前もやるなあ」

「うっせ、エロ親父。いいから黙って見てろって」

アリスは渡された材料や器具を使って慎重に調査を行う。

ガストが提示してきた条件とは、彼の父親のリューマチを治す薬を調査することだった。

「最近歳食ってきたせいか体の節々が痛んでなあ」

「親父の場合は重いもの持ちすぎだろ」

「がはは、配達をしない道具屋が繁盛するかつての」

「愉快なお父さんですね」

アリスは二人の談笑を聞きながら薬の調査を進める。

「できました。これで一時的に痛みは収まるはずです」

「お、できたか。どれどれ……」

ガストの父親とガストはアリスが作業していた台を覗きこむ。琥珀色の薬がフラスコの中に入っていた。

「あくまでも一時的なものです。本格的な治療のための薬は家に戻らないと材料が……」

「ああ、構わんよ」

アリスはそーっとそのフラスコをガストの父親に手渡す。

「これを飲めばいいのか？」

「はい、そうです」

父親はぐいっと薬を飲み干す。

「お、おお？」

「どうした親父？」

ガストの父は軽く体を動かしたり、ストレッチをしてみたり、そして満足そうな笑みを浮かべる。

「こんなにすぐ効くのか！？ 今まで地味に医者に通っていたのが馬鹿みたいだな！」

「あ、でも無理はしないでくださいね。本格的な治療には定期的なお薬が必要です、それはあくまでも痛みをごまかすだけのものです。体が治ったわけじゃないので、無理をすると余計体を痛めてしまいます」

「ふむ、そういうものなのか」

「家に帰ったらお薬を調合するので、それまでは無理なお仕事とかはしないでくださいね？」

「ああ、わかった。それと薬の販売の件だが、本店の端の方でいいか？ 結構な客入りがあるからそれなりに客は付くはずだ」

「はい、ありがとうございます」

アリスはにっこりと笑みを浮かべて頷いた。

「情けは人の為ならず、いい实例ね」

イリスはティースプーンで砂糖を紅茶に落としながら言った。

「にははは、だからコネ作るといいって言ったんだよあー」

マリスもクツキーをつまみながらイリスに続いた。

「えへへ、助かつちやいました」

アリスは夕食の後片付けをしながら答えた。

「ガスト、だっけえー？ 恩をきつちり返す……フリして父親のリ

ユーマチ治療を引き受けさせるなんてちゃっかりしてるにやあー」

「まあでも、その代わりにアリスは薬を売る場所が手に入ったんで

しょ？ いいことじゃない」

「一日1ゴールドなんて無理ですよ。それならリユーマチのお薬作

る方が簡単ですからね」

アリスは後片付けを終えるとさっそく薬作りをするために自分の

部屋へと向かった。

1 アリスの午後（後書き）

イリスは黒魔術師。

黒魔術と言っても、いろいろな種類がある。

呪いをかけるのも黒魔術だし、逆に呪いに抵抗するのも黒魔術である。

そういう意味では黒魔術と一口に言っても、白魔術、精霊魔術、錬金術などさまざまな魔術を含む。

そんなマリスの元へ一件の依頼が舞い込んできた。

それは呪いをかけられた娘を救って欲しいというものだった。

次話、2 マリスと夢魔

2 マリスと夢魔

第二話

マリスは黒魔術師。

黒魔術といつても色々ある。

対黒魔術用魔術も黒魔術の範疇である。

更には今では占星術や白魔術などの一部も黒魔術に含まれている。黒魔術、と一口に言ってもその魔術の範囲は広いのである。

アリスが薬を売って生計を立てているように、彼女も自分の研究成果を売って生計を立てている。

「マリス・トリリス様、よくいらっしやいました」

「にはははー、邪魔するよおー」

彼女が通されたのは巨大な邸宅の居間。この街の中でも特に大きな豪邸の一つであるその邸宅に、彼女はどんな用事があって訪れたのだろうか。

「マリス・トリリス殿、黒魔術師としての名声は王都にも届いているな」

「にははは、それほどでもないよおー」

豪華な椅子に座るその男はいやらしそうな笑みを浮かべてマリスの全身を舐めるように見る。

「で、依頼ってのはなあにいー？」

「いやはや、まずはこちらのお食事でもいかがかな？」

男がパチン、と指を弾くと豪華な食事が運ばれてくる。

「まずはエサで釣ろってことかにゃー？」

「まあまあ、まずは食事でも共にしましょう」

二人は昼餐会を始める。

牛肉のワイン煮込み、魚のムニエル、それからフランスパンに高級ワイン。

「それじゃあ遠慮なくいただくよぉー」

黒魔術、などという魔術を研究しているところといった類の依頼はいくらでも舞い込んでくるものだ。

要人の呪殺、運勢の占い、特殊な病の治療……その手の依頼はたくさんある。

「それにしても豪勢だねえー。あまりにも豪勢すぎて手を付ける気すら起こらないよぉー」

「ほう、我が家の昼餐はお気に召さなかったかな？」

「……これはトリカブトのスープかなぁー？ それにこっちはベラドンナのサラダ、このキノコのスTEEキはドクツルタケだねえー。おっと、こっちはフグの肝臓を煮込んだものじゃないのぉー？ 先にそっちが食べる、っていうなら食べてもいいよぉー」

「はははは、さすがかの高名な黒魔術師殿だ。その辺りはよくわかっていらっしやるようだ」

男は相変わらずいやらしい笑みを崩さないまま、もう一度指を鳴らす。

未だ湯気を上げる猛毒料理のフルコースはすぐに下げられる。

「匂いをかぐどころか、見た瞬間にわかるとはさすがトリリスの名は伊達ではないというだけありますな」

「このくらい黒魔術界では常識よぉー」

マリスは得意げに胸を張る。

「さて、本題なのだが……。呪いをかけられた私の娘を助けていただきたい。できることなら、その呪いをかけた相手を逆に呪い殺していたけると助かる」

「呪殺はあたしの専門外なんだよねえー。あたしの研究は対黒魔術用魔術、それから奇術だとかそんなんばっかりだからねえー」

「私としても、一人娘に呪いをかけられて黙っているわけにはいかないのよね。そこをどうにか頼むよ」

男は懇願するように頭を下げる。

マリスはしばらくの間考えいていたが、やがて口を開き

「まあ、善処はするよおー。とりあえず呪いをかけられた子を見せ
てほしいなあー」

「うむ、わかった」

二人は立ち上がると広い邸宅を練り歩く。

しばらくの間廊下をいくつかが曲がると、やがてその部屋が見えてくる。

「ここだ。どうか頼むよ」

「あい、わかったよおー」

マリスは扉に手をかける。

「……サソリの刻印。これは対魔術装甲のつもりかなあー？」

「どこかで魔法にはサソリの刻印が効くと効いたものでね」

「まあ、低級魔術には有効だけどおー、高等魔術には刻印に更に聖
印を施さないとちょっと無理かなあー。魔法なんてもつてのほかだ
にやあー」

マリスは難なく反対魔術を唱えると、サソリの刻印を無視して扉
を開く。

「さすがマリス・トリリス殿は素晴らしい魔女ですな。この前呼ん
だ魔術師はサソリの刻印に触れた途端火傷を負って逃げ帰っていつ
たよ」

マリスが部屋に入ると、そこにはファンシーな飾りつけがなされ
た部屋があった。

「で、この子がその呪いにかかれた子？」

「もう何日も眠っているのです。揺さぶっても一向に起きることは
なく、それどころかうわごとを言って……」

ベッドの上に一人の少女が眠っていた。頬は透き通るように白く、
生気が見られない。

「これは……呪いじゃないよおー。夢魔って知ってる？ 夢を食ら
って生きている魔性の獣だよおー。この子は夢魔に取り憑かれてい

るねえー」

「なんですと……？ それじゃあサソリの刻印も無意味だった……と？」

「そういうことになるねえー。でも、この程度の低級の夢魔ならすぐに抜えるよおー」

「おお！ それは本当ですか！」

男は驚くように声を上げる。

「とりあえず、一晩この部屋にいてもいいかなあー？ 夢魔は夜になると盛んに動き出すんだよねえー」

「娘が助かるならば構いませんとも！」

男は嬉しそうに言った。

マリスは一睡もせず少女の傍に座っていた。

そして、夢魔が具現化するのを待つ。

夢魔とは人の夢を食らう魔性の獣だ。だが、その夢を食らう一瞬だけ姿を現す。そこを叩けばいいだけだった。

「来たねえー」

マリスは立ち上がる。夢魔が現れた。見た目はまるで人のようだが、知性は獣に等しい。夢魔はマリスがいるにも構わず、少女の上に覆い被さるように口を開く。

「いづくよおー」

マリスは夢魔を倒すための魔術を唱える。

夢魔は精神サイドに属する魔物だ。こういった魔物にはその手の魔術が有効だ。

夢魔はマリスの存在に気付くとそちらに意識を向ける。

ライフステール
生命奪取。夢魔の用いる低級魔術だ。起きている人間に対して有効な生命力を奪い取る魔術である。

だが、マリスは即座に抵抗魔術を展開する。ライフステールは即座に無力化され、夢魔はマリスに対する攻撃手段を失う。

「もっと高等な魔術はないかなあー？」

「夢魔は困ったように首を横に振る。マリスは意地悪な笑みを浮かべて」

「お仕事だから、ごめんねえー」

「夢魔を退散させる魔術を発動させる。夢魔は体の端から少しずつ崩れていった。」

「お仕事完了あー」

「マリスは部屋を出ると、真夜中であることなど構わずに主の部屋の扉をノックする。」

「終わったよあー。明日には目を覚ますはずだよあー」

「男はベッドの上で本を読んでいた。やはり娘の安否が気になっていたようで、起きていずにはいられなかったようだ。」

「おお、本当か！」

「うんうん、今夜はきつといい夢見れるよあー」

「ありがとう、ありがとう！」

「男はマリスの手を握ると、ぶんぶんと上下させる。」

「報酬は半額執事に預けてある。娘が無事であることを確認したらもう半分を出そう」

「じゃあまた明日来るよあー。メンドくさいからそのとき全額もらうねえー」

「そう言うと、マリスは男に背を向ける。」

「そうか、わかった」

「じゃ、おやすみい〜」

「マリスはそのまままっすぐ玄関を通って館を後にした。」

「今回のお仕事の報酬ー」

「マリスはどん、とテーブルの上に金貨の入った袋を乗せる。」

「いくら儲けたの？」

「今回の相手は大富豪だったからねえー。結構弾んでくれたよあー」

袋の中にはざつと200ゴールドは入っているだろうか。

「さすがマリスお姉さまは我が家一番の稼ぎ手ですね！」

「いやあー、褒めても何も出ないよあー？」

マリスは笑いながらぼりぼりと頬をかく。

「こうなると、ほとんど稼いでない私がかんだかさもしく感じられるわね」

イリスは苦笑いを浮かべる。

「イリスお姉さまの魔術はお金儲けには向いていませんからね。その上一番の食い扶持となるとまったくもって手に負えませんね」

「う……それを言うか妹よ……」

アリスは邪気のない笑顔でさらっと言うてのける。さすがの長女も言い返す言葉がなくて、苦笑いを浮かべ続けるしかなかった。

「ま、これで当分は凌げるはずだよあー」

「そうね。じゃあ今日は一番の稼ぎ手であるマリスのために腕を振るって何か作ろうかしら」

「いや、イリスお姉さまの料理はやめてください」

二人は声を揃えて言う。それを聞いてイリスは残念そうな表情を浮かべた。

「……なんで？」

「いやあー……イリスお姉さまの料理はやバ……エキセントリックだからねえー」

「それに、お料理は私の仕事ですから！」

アリスはイリスを台所から押し出すと料理の支度を始める。

「えー……せつかく料理を作ろうと思ったのにそれは残念ね……」

「まあまあ、お姉さまはどんと構えて椅子に座ってればOKだよあー」

「今日はお祝いに牛肉のワイン煮にしますね！」

アリスは牛肉をふんだんに使った料理の準備をする。

「む……仕方ないわね。じゃあお言葉に甘えさせてもらおうかしら」
イリスは少し納得のいかないようであったが、けれども椅子に座

って待つことにした。

今日もトリリスの娘達の小屋では賑やかな談笑が響き続けた。

2 マリスと夢魔（後書き）

イリスは精霊魔術師。

精霊魔術とは、その場に満ちる精霊の力を借りて魔術を行使する、もつとも魔法らしい魔術である。

四大元素を主に扱うその魔術は多彩でかつ強力な効果を発揮するのだが……。

イリスは憂いていた　魔術の才能のない自分に。

薬を作ってもダメ、魔術でお金稼ぎをしようとしてもダメ……。

一番の食い扶持である自分の在り方に頭を悩ませていた。

次話、3 イリスの憂鬱。

3 イリスの憂鬱

第三話

イリスは精霊魔術師。

精霊魔術は精霊の力を借りて、小さな魔力で大きな奇跡を引き出す、もつとも魔法らしい魔術。精霊言語で精霊に語りかけ、精霊の御力を借りる奇跡の魔術である。

けれども、その場にいる精霊の力しか借りることができないので、場所によって効果はまちまち。なんとも使い難い魔術でもある。

「姉さまあー？ 頼みごととしてもいいいー？」

マリスはイリスの部屋を訪れる。イリスは本を読んでいるところだった。

「あら、何かしら？」

「姉さまの猛ど……エキセントリック料理を研究したいんだけどお……」

「私の料理を研究？ わかったわ」

イリスは本にしおりを挟むと、ぱたんと閉じる。

そして二人で部屋を出ると、厨房に立った。

「一部始終を記録させてほしいんだなあー」

マリスは手にノートとペンを持っていた。

「何を作ればいいの？」

「じゃあ……とりあえず、カレー辺りかなあ？」

「わかったわ」

そう言つと、イリスは手に包丁を持つ。

マリスはわくわくしながらそんなイリスの姿を眺めていた。

「とまあ、こんな感じかしら？」

大鍋の中には真っ黒なよくわからない物体がぐつぐつと煮えている。マリスはそのニオイを嗅いで思わず吐き気がしてくるのを何とか抑えて記録を行う。

「ありがと姉さまぁー」

マリスは鍋にフタをして封印すると、黒魔術に用いられる封呪のテープで鍋を封じ込めた。

「これはこつちで研究させてもらうから、持って帰るねえー」

「私の料理がマリスの研究の助けになるの……？」

「にしし、姉さまの料理のエキセントリックさはある意味黒魔術の薬品精製にも匹敵するよぉ」

そこであえてマリスは毒薬とは言わないでおく。

イリスは不思議そうな表情を浮かべながら

「そんなに私の料理、変わってる？」

「にひひ、まあ姉さまの料理は色々とスゴイからねえー」

マリスは必死に言葉を濁す。イリスは相変わらず疑問を浮かべた表情をしていたが、やがて小さくため息をついた。

「まあいいわ。そのカレー、研究した後は美味しく食べてね」

「わかったよぉー」

もちろん、マリスにそのカレーを食べる勇気などありはしない。

それなら先日の猛毒料理のフルコースを食べる方がまだマシだとさえ思っていた。

「私の料理、そんなに変わかしら……」

イリスは一人厨房に残されてその言葉を反芻する。だが、その問いかけに答えてくれる者は誰一人としていなかった。

「うーん……私にも薬を調合する技術があればなぁー」

イリスはテーブルの上に並ぶ失敗作を眺める。どれもこれもが黒

ずんだ塊となっており、とても薬と呼べるようなものではない。

そもそも精霊魔術において、薬の精製は完全に門外だ。もともと、彼女の場合はそれ以前の問題であるが。

彼女は調合や料理というスキルにおいて致命的ともいえる欠陥を持っていた。彼女の作った薬や料理はどれもこれも必ず失敗する。ある種、才能にも近いモノだった。

「そうすれば食い扶持だとか、金食い虫だとか言われなくて済むのに……」

ぶつぶつと言いながらイリスはテーブル上の失敗した薬品の数々を片付ける。

現実には彼女が一番よく食べ、飲む。それでいて、彼女の魔術はお金を生み出すことはない。この家庭でもっとも彼女が一番お金がかかっているのは事実だ。

もともと、数週間に一度大金を稼ぎ出すマリスや、地道にこつこつと少額ながらも稼ぐアリスのおかげで、この家の収支は黒字となっているが。

「あー、もうなんかいい方法ないかなあ……」

イリスは本棚から手当たり次第本を引っ張り出し、同時に何冊も開く。彼女は同時に複数の本を読むという特異な技を持っていた。

だが、その技をもつてしても彼女の持つ本はお金稼ぎに役立ちそうな知識を彼女に与えてくれはしない。

「なんで私、精霊魔術なんて専攻したんだろう……」

過去のことを思い返す。思えば、彼女には明確な意思というものが存在しなかった。

幼い頃から悪戯好きのマリスや、天然ボケのアリスの面倒を見ていて、自分の遊びということをしたことがなかった。

妹達が次々と個性を発揮して様々な魔術に明け暮れる中、彼女は一人自分だけの魔術を決めることができなかった。

そんな中、母から勧められたのが精霊魔術だった。

彼女の母は複数の魔術を扱うことができたが、その中でも最も重

点的に学んでいたのが精霊魔術だった。母は優秀な精霊魔術師であった。

その精霊魔術を直々に教えてもらったのだから、伸びるのは当然といえる。

つまり、今の彼女の实力は才能ではないのだ。

イリスはテーブルに頭を伏せる。

「私は……所詮魔女の血を引いているだけの子に過ぎないのね……」
薬を作るのに使った薬包紙を握り潰す。くしゃり、という音を立てて紙はくしゃくしゃになった。

イリスは夕食時になっても気分が晴れなかった。

アリスが厨房に立っていて、マリスはアリスの稼いできたお金を数えている。

「しめて6ゴールドと70シルバあり。初日と比べて倍増どころじゃないねえー。アトリエ商店って立地条件は最高だねえー」

「そうですね。おかげで助かっちゃいましたあ」

「リユーマチの薬は作ったのぉー？」

「はい、もうしばらく薬を飲み続ければ治ると思います」

ことごとと音を立ててスープを煮立てる音が聞こえてくる。そんな中、イリスはぼーっと天井を見上げながら一人考えにふけっていた。

私はしよせん、凡才な魔女見習いに過ぎない。妹達のようにお金を稼ぐ能もない、研究の成果は一向に伸びない、新たな魔術は創造できない、そう彼女は考える。彼女は母から譲られた魔術の他に彼女は何か一つ扱うことができなかった。

「はい、今日は安売りしていた鶏肉のスープと、レヴァンディッシュのサラダですよ」

ことり、と音を立ててイリスの前にスープが入ったお椀が置かれる。そして、スプーンとフォークが並べられた。

それは妹達が稼いだお金で買ってきたものだ。イリスはそれを食べるべきではないと思った。

「私、いらない……」

「どったの姉さまあー？ 具合でも悪いのおー？」

「だって……これはあなた達が稼いだお金で買ったものでしょ？ 私が手を付ける権利なんて……ないじゃない」

アリスとマリスは顔を見合わせる。そして、二人はにっこりと笑みを浮かべた。

「何を言ってるんですか、お姉さま。これは皆のお金で買ったものですよ」

「にしし、姉さまが手を付けるのは当たり前だよあー」

だが、妹達にそう言われてもイリスはスプーンやフォークを持つ気にはなれなかった。

「でも……私は1ブロンズも稼いでいないのよ？ 私は……必要な存在だよ」

「私達にはイリスお姉さまが必要なんですよ。イリスお姉さまがいるから薬だって調合できますし、イリスお姉さまの助言があったからアトリエ商店でだって開店できたんです」

「にひひ、お昼にカレーだってご馳走になったしねえー。あれのおかげでまた研究がはかどったんだよあー？ 魔術のアイデアだって姉さまからどれだけでももらったと思ってるのおー？」

「アリス……マリス……」

二人はにっこり笑ったまま

「イリスお姉さまはどっしり構えていればいいんですよ」

「姉さまはこの家の家長だもんねえー」

「ごめんなさい、めそめそしちゃって……」

イリスは二人の優しさに触れて目許の涙を拭う。

「さ、いつも通りの夕食会を始めましょう？」

「はい！」

「おっけえー」

今日もトリリスの娘達の小屋では楽しい晩餐会が行われた。

イリスも一度は思い詰めはしたものの、妹達に助けられて再び笑顔を取り戻すことになる。

まだまだトリリスの娘達の小屋は平和な空気に包まれていそうだった。

3 イリスの憂鬱（後書き）

アリスは普段通りアトリエ商店へと薬を売りにやってきていた。そんな道中、彼女が見かけたのは宝飾店のショーウィンドウだった。美しいスタールビーのネックレス。値札には100ゴールドの文字。それを見てアリスは小さなため息をつく。自分の儲けでは何週間も稼がなければ届かないだろう。アリスは強引にショーウィンドウの前から離れると、いつも通りのアトリエ商店へと向かった。

次話、4 アリスと宝石

4 アリスと宝石

第四話

アリスは普段通りアトリエ商店本店に薬を売りに街へやってきていた。

背中には重そうな薬棚が背負われ、だが彼女はそんなことなどお構いなしにスキップを踏みながら街を進んでいく。

そのとき、ふとアリスは立ち止まる。そして、思わずその店のシヨウインドウを覗いてしまった。

そこには綺麗なネックレスが下げられていた。

大きなスタールビーを中心に、プラチナ細工が散りばめられた美しいネックレスだった。

アリスは店の看板を見上げる。看板にはクロック宝飾店と書かれてあった。

「綺麗……」

アリスは自分の胸元を見つめる。そこには飾り気のない質素な白のリボンが結ばれてあるだけだった。

「いくらするんでしょうか……」

彼女は値札を見てうつむく。100ゴールド、とそこには書かれてあった。一番の稼ぎ手であるマリスの仕事の報酬の半分だ。とても彼女の手の届く品ではない。

「はぁ……」

アリスは小さなため息をつく。昔から質素な暮らししかしたことのない彼女にとって、お洒落をすることは憧れだった。

いつも白いブラウスに青のスカート、そして白のエプロンドレスを着ているアリスは、いつか綺麗なワンピースのドレスを着てみたいと思っていた。

そして、首には美しいネックレス。指にはダイヤの指輪。ヒール

の高い靴を履いて、少しだけお化粧をして……。

そんな自分になるのが彼女の夢の一つであった。

「そろそろ行かないといけません……」

アリスはショーウィンドウから離れるのは辛かったが、後ろ髪を引かれる思いで店から離れていった。

アリスは大きなアトリ工商店の隅っこに店を構える。

アトリ工商店はとても大きな店だ。客足が途絶えることはないし、アリスの店にもたくさんの客が訪れていた。

「お嬢ちゃん、腰痛に効く薬はないかえ？」

「お姉ちゃん風邪薬ちょうだい！」

ただし、時には困ったお客も訪れる。

「あの……その、惚れ薬つてありませんか……？」

「ちよつとシメたい奴がいるんだけど、ちよびつといい感じに効く毒薬ない？」

「あの、当店では人に呪いをかけたり、心を奪ったり、苦しめたりする薬は扱っていないんです……」

彼女は純粹に人のためになる薬しか作らなかった。だから、人を陥れるような薬を作ったことがなかった。もちろん、彼女の實力と才能ならばそれくらいわからないだろう。だが、アリスは強い信念をもつて人を助けるための薬しか調合しないと決めていた。

「おーい、嬢ちゃん。そろそろリユーマチの薬もらってもいいかい？」

「あ、はい、ちよつと待つてくださいね」

薬棚から琥珀色のビンを取り出すと、アリスは薬棚から離れる。魔術のかけられた薬棚で、アリスしか開けることはできないし、アリスしか持ち運ぶことができない仕組みになっているので離れても問題なかった。

「今日の分はこれです。あと一カ月ほど定期的にお薬を飲んでいれ

ばよくなると思います」

「おお、そうか！」

アトリエ商店店主は大きな声で笑う。

「これであと十年はこの店も安泰だな。がっはっは！」

店主はアリスの小柄な体をバンバンと叩く。

「セクハラしてんじゃねーよ、エロ親父」

「てめえもいつちよ前に言うようになったな？　ちゃんと配達は終わってるんだろ？」

「つたりめーだろ？　三丁目のクロック宝飾店に測量器届けてきたぜ」

そう言っただけでガストは小袋に入ったお金を父親に渡す。

「あ、そうそう、アリス。仕事もらってきてやったぜ？」

「お仕事……ですか？」

「クロック宝飾店の店主なんだけどよ。最近目が霞んで時計の修理ができないんだってさ。いい薬師がいるって紹介したらぜひとも薬を調合してくれだつてよ」

「わかりました。宝飾店さんに行っている間、お店を空けてもいいですか？」

「おう、構わねーぜ」

アリスは薬棚のところへ戻ると、薬棚を背負った。

そして混雑しているアトリエ商店を出ると、クロック商店へと向かった。

クロック宝飾店に到着してまず目に入ったのはあのネックレスだった。

「はあ……やっぱり綺麗です……」

視線がついいってしまいがなんとか振り払うと、アリスは店の扉を押し開いた。

店の中にはきらびやかな宝石が施された時計やネックレス、指輪

などが所狭しと並べられていた。

「凄い……」

「おやおや、お客さんかな？」

店の奥から老人がやってくる。狭いケースの間を薬棚をケースにぶつけないようにアリスは進む。

「えっと、アトリエ商店の紹介で来た薬師です」

「おお、名うての魔女だと噂の子か！」

アリスはにっこり笑う。クロック商店店主は椅子を用意した。

「最近目が霞むようになってのう。やっぱり歳には勝てんわい」

「大丈夫ですよ。私がちょちょいと治しちゃいますからね」

アリスは老店主から症状を聞き出す。いつ頃からか、どんな症状か、他に何か症状がないか……。

彼女は一つ一つ頷きながら話を聞いて手帳にメモしていく。

「ずばり、これは病気ですね。まだまだ歳のせいじゃないですよ！」

「おお！ じゃあ治るのかい？」

「ちょっと貴重な材料が必要ですね……。今すぐは調合できませんが、家に帰ればまだストックがあったはずなので大丈夫です。ただ、かなりお値段の張る材料なのですが……50ゴールドくらいかかりますね」

「ああ、構わんよ。目が治るなら安いもんじゃ」

アリスは頭の中で老店主の病気を治すための薬の調合方法を考える。

今回の調査は高級素材と高級魔術を用いたかなりレベルの高い調査になる。失敗すれば材料は全て無駄になってしまう。失敗は許されなかった。

「じゃあ、また明日薬を調合したら来ますね」

アリスはまた狭いケースの間の道を歩き難そうに歩いていく。

店を出ると、またあのネックレスが目映った。

「欲しいけど……マリス姉さまに頼んでみようかしら……」

一度はそんな思いがよぎったが、アリスは首を横に振る。

「ダメです……。ウチにそんな余裕はありませんね……」
アリスはしょんぼりとしながらアトリエ商店へと戻っていった。

その夜、アリスは薬の調査の準備をしていた。

高級な素材を複数扱う高等な調査だ。準備は慎重に行わなければならない。

「アーリースー。今大丈夫うー？」

「ああ、マリスお姉さま。どんなご要件でしょうか？」

部屋の入り口にマリスが立っていた。アリスは一度薬の調査の準備を止めてマリスの方に向き直る。

「ちよつと黒魔術の実験にマナの結晶が欲しいんだけど、余ってるうー？ 急ぎじゃないからなければどっかで買って来るからいいんだけどさあー」

「ああ、それなら……」

今まさに彼女が使おうとしていた高級素材だった。だが、もう余りは無い。今回の調査でちよつどなくなるところだった

だが、そこでアリスは考える。

マナの結晶を出す代わりにあのネックレスを買ってもらうのはどうだろうか、と。

マナの結晶は採取するのが難しい素材だ。市場に出回れば数十ゴールドは下らない。それに出回る数が少ないので、入手するのも難しい。きつとまた入手できるようになるのは数カ月後になるだろう。そんな貴重な材料なのだから、対価を出してもらうのは当然だ。多少釣り合わないが、あのネックレスを買ってもらうのを引き換えに頼んだらどうだろうか。

だがそのとき、悲しそうな老店主の顔がアリスのまぶたの裏に浮かんだ。

「すみません、これから調査に使うところなんです」

「ああ、それならいいよおー。趣味の実験だからねえー」

そう言ってマリスは背中を向ける。これでよかったのだ、とアリスは思った。

アリスは再び薬の調合へと戻ることにした。

「はい、どうぞ。これを目にさしてもらえばすぐ治りますよ」

「おお、本当か！」

老店主は嬉しそうに薬を手取る。

「毎日一回、一週間続けければ綺麗さっぱり治ります」

彼は嬉しそうな笑顔を浮かべた。

老店主のそんな笑顔を見ることができて、アリスは本当に良かったと思った。

もし昨日、マリスにマナの結晶を渡してネックレスを買うよう頼んでいたら、きっと後悔しただろう。きっと彼の悲しそうな表情を見ることになるに違いない。

「おおお……もやが晴れるようだ……」

老店主はあまりの効果に驚く。

「たしか50ゴールドだったかな？」

老店主は懐から金貨がずっしりと入った袋を取り出す。

「お買い上げ、ありがとうございます」

「それと、これはお嬢ちゃんに似合うと思って用意したんじゃ。餞別代わりに受け取ってもらえないかのう？」

そう言っただけが差し出してきたのは……オパールネックレスだった。

それは中くらい大きさのオパールに銀細工が施された、あの店頭にある物に比べれば貧相なものだったが、きっと普通に買えばそこそこの値の張るものに違いない。

アリスはオパールのネックレスにゆっくり指を伸ばす。

冷たい感触が少し気持ちいいくらいだった。

「本当にいいんですか……？」

「感謝の気持ちじゃよ。持っていつてくれんかの？」

アリスはゆっくりとネックレスを首に付ける。質素な服装をしている分、店頭の派手なネックレスと比べてそのネックレスの方が彼女には似合っているように感じられた。

「ぴったりじゃな」

「あ、ありがとうございます！」

アリスは深々と頭を下げる。

店を出て、アトリエ商店へと戻る彼女の足は、昨日よりも軽いステップを踏んでいた。

4 アリスと宝石（後書き）

ある日、マリスの元へと依頼が舞い込んできた。

それはとある人形の鑑定及び、呪いの解呪だった。

マリスはゆっくりと人形を調べ、そして首を振る。

「んー、呪い、とはまた違うねえー」

マリスは一同に説明を始めた。その人形に宿る高位の精霊の話…
…。

次話、5 マリスと人形

5 マリスと人形

第五話

深い霧に包まれた森の奥深く、そこに黒魔術師、魔女マリス・トリリスの居があった。

今日も彼女は世界を面白おかしくするための研究を日夜続けている。

そんな暗い森を一人の少年が駆ける。

彼は時折不安そうな表情を浮かべながら、森の中を走る。魔術を行う者にとって最良の場所であるこの森も、彼の目には鬱蒼と生い茂る不気味な森としか映らなかった。

「ここかな……」

そんな森が突如開ける。

まるで木々がそこを避けて生えているかのようにして広場になっていた。

そこに彼女達の家はある。

「ごめんくださーい」

少年は控えめに小屋の扉を叩く。しばしの間があつて

「はい、今行きますねー」

と、中から声が聞こえてくる。その声が彼にとってよく知ったものであることに彼は安堵した。

「あ、ガストさん、こんなところまでよくいらっしやいました」

「いよ！ それにしてもこの森は不気味だよな……。よくこんなところに住んでられるもんだぜ」

「えへへ、魔女は暗い森に住むものって昔から相場は決まっていますからね。せっかくいらしたんですし、あがつていつてくください」

アリスは少年　ガストを小屋の中に招き入れる。

「そうさせてもらうかな。この森はホント空気が冷たくてかなわな

いぜ」

二人は部屋に入ると、ダイニングへと向かった。アリスが台所に立ってお茶を用意する。

「今日はどういったご用件ですか？」

「ほれ、この前アリスが俺んとこに持ってきた話あるだろ」

アリスが毎日のようにアトリ工商店に通っている間、彼女はガスト達に姉妹のことをよく話した。アリスは家に帰ってから姉達にその報告をする毎日を送っていた。

そんなある日、アリスはマリスから一つの提案をされる。アトリ工商店に依頼の斡旋を頼めないだろうか、と。

その話をアトリ工商店に持っていくと、二つ返事でOKをもらうことができた。

さっそく店内の掲示板にマリスのことを書いた紙を掲示した。その依頼がついに来たのだ。

「マリスさん、だっけ？ あの人に仕事頼みたいって人がいてさ。

お礼金はそんなに支払えないけど、それでも構わないかってよ」

「ちよつと待つてくださいね、マリスお姉さまを呼んできます」

アリスは素早くお茶を煎れると、ダイニングを離れてマリスの部屋へと向かった。

「こちらがマリスお姉さまで、こちらがイリスお姉さまです」

「おおー、この子がアリスのボーイフレンドかにやー？」

「はじめまして、アリスの姉のイリスよ」

「ははは、ボーイフレンドってのは言いすぎだぜ……」

二人は舐めるようにガストを観察する。そんな様子にガストは乾いた笑いを浮かべていたが、思っていたような“いわゆる魔女”ではないことに安心して、アリスの煎れたお茶を飲んでいた。

「それにしてもなんで姉さままで出てくるのかにやー？」

「いいじゃない、アリスのお友達ってのがどんな人か一目見てみた

かったのよ」

「でも、姉さまが出てくると話がややこしくなるにゃー」

マリスは長い茶髪をかき上げながら言った。

「せっかく来てくれたんだし、会っておくのが礼儀ってものよ？」

「そうですね、いつかは会わせたいと思ってましたし……」

それを聞いてガストはドキツとする。

アリスは服こそ質素だが、容姿は見事なものだ。長い金髪は輝くように、青い瞳は海のように深い。

そんなアリスから思わせぶりなことを言われれば、お年頃の少年ならばドキドキするのも当然だった。

「だって……私の唯一のお友達ですから」

お友達、と言われてガストは少しガツカリする。

「にゃはは、ガスト少年、お友達だってよぉー」

「マリスさん、そこはつつつかないでほしいぜ……」

状況が飲み込めないアリスと、意味がわかってそんな彼らの様子を微笑ましいと思うイリス、そして状況を楽しんでいるマリスの様子が対照的だった。

「で、そろそろ本件を話してもらおうかにゃー」

「そ、そうっすね」

ガストは懐から一枚の紙を取り出す。

「依頼主は魔具研究家の魔術師、クローリー氏。なんでも一風変わった魔具を手に入れたけれども、扱いに困っているらしい。なんでも強力な呪いかけられているとか……。それで、その呪いをどうにかしてほしいんだとよ」

「ふむふむ、じゃあ直接伺った方がいいかにゃー？」

「いや、ブツは預かってきた。こいつの呪いを解いて、返して欲しいんだってよ」

そう言っただけは幾重にも布で包まれた人形をテーブルの上に置いた。

「わあ、可愛いですね」

「綺麗な人形ね」

それは長い黒髪に、和服を着た小さな人形だった。

「東洋人形……かにゃー？」

「俺も詳しくは知らねえが、この辺じゃ珍しいものであることには変わりないぜ」

マリスはその人形をひよいと手に取ってみる。

「おい！ 呪いとかかかってんじゃないのか！？」

「んー、呪い、とはまた違うねえー。これは付喪神だにゃー」

「つくも……がみ……？」

「呪いと付喪神も区別できないのが魔術師を名乗っているとは嘆かわしい世の中になったものだねえー……」

マリスは三人に説明を始める。

付喪神とは物を長いこと使っている間に、意思が取り憑いてしまったモノ及び、その意思を指す。

多くの場合、下級精霊や獣の死霊などが取り憑いている場合が多いが、高位のモノとなるとまさにその名の通り神にも匹敵するモノとなることがある。

「除霊したら一発で終わりだけどおー、そしたらきつと依頼主怒るよねえー」

「いや、説明普通にわからないんすけど……」

「魔具つてのはあ、意図的に魔力を込めたり、魔術を仕込んだ道具のことを指すんであって、こういう付喪神のことは魔具つて言わないのよおー。大方そのクローリーって人は構造調べようと分解でもしようとしたんじゃないのぉー？ 普通、君が知らない人にいきなり解剖されそうになったらどうするうー？」

「いや、普通に逃げるっすけど……」

「同じ話だよおー。この子はバラされるのが嫌で必死に抵抗した結果が呪いってわけえー」

マリスは愛しむように人形の髪をくしですいてやる。

「こつやって大事に扱えば付喪神は所持者を守ってくれるんだよお

「ふむふむ、なかなか高位の霊が取り憑いているみたいだねえー。これはどっちかって言うと姉さまの分野じゃないかやー？」
「え、私？」

イリスは突然指名されたことに驚きを表す。

「えええわわ私なんて無理無理、交感具もなければ精霊の意思も聞けないダメダメ魔女だし、霊との交渉なんてもつてのほか！」

「と、我らが家長たる精霊魔術師、イリス姉さまは申しておりますー」

ガストは乾いた笑いを浮かべる。

「なんで除霊しちやいけないんですか？」

アリスがふとマリスに尋ねる。

「おそらくクローリーって人はこの付喪神としての価値を買ってこの子を手に入れたんだろうけどおー、あたしが除霊しちやったらその価値がなくなっちゃうわけでしょう？ 錬金術にたとえると、薬の副作用をなくしてください、って頼んで薬の効能までなくしちゃう感じかなあー？」

「そうたとえられるとなんとなくわかります……」

アリスはふむふむ、と頷く。

「となると、クローリーさんが何やりたいか知らないけど、この子を自由に扱える状態にもってけってことでしょう？ それは無理ってやつだねえー」

「さっき言ってた交渉ってのは何なんすか？」

「交渉するのは霊と交渉をして、自分の好きなようにこの子を扱える状態にすることおー。高位の精霊魔術師くらいしかできないけどおー、姉さまはできないって言うしねえー……」

「じゃ、どうするんだよ？ 八方塞がりだぜ」

「んー、精霊魔術は完全に仕事の範囲外なんだけどねえー。ま、やるだけやってみるよおー。この子一日借りておつけえー？」

「ああ、大丈夫だって言ってたぜ」

「じゃ、しばらく借りるよおー。今晚徹夜だから、アリス夜食作っ

「といてえー」

「そう言ってマリスは人形を持って席を立つ。」

「あ、はい、わかりました」

「じゃー、ばいびー」

マリスは部屋に籠って護符や札、魔法陣などを用いて人形に取り憑いた霊へと呼び掛けていた。

「ここにおわします精霊よ、我にその御名を教えたまえ。契るは契約、誓うは誓約。我と語る機会をここに設けたまえ」

魔法陣が明るく発光する。そして、人形も同調するように光った。

「我は雛女^{ひなめ}。汝は何者か？」

「我は黒魔術師、マリス。汝に」

「魔術師！ 我は魔術師が嫌いじゃ！ あの男は我を壊そうとした！ 魔術師なぞ信じられぬ！」

「……ごほん、汝に問う。汝の望みは何ぞ？」

マリスは真剣な表情で雛女に尋ねる。

「我は何も望まぬ！ ただ、平穩に暮らしたいだけじゃ！ 我を愛でる人間と、平和で安穩とした日々を過ごしたいだけじゃ！」

雛女は大きな声を上げてマリスに言った。マリスはその言葉を一つ一つ聞いて、相槌を打つ。

マリスは一呼吸置いて、ゆっくりと息を吐き出した。

「ならば我が下僕となるがよい。我は先の男のように無碍に扱ったりはしない」

「魔術師は信じられぬ！ 汝が我を無体に扱わぬ確信がどこにあるうか！」

「ならば、我は汝と血の契約を結ぼう」

血の契約、という言葉聞いて雛女の様子が一変する。

「本当か……？ 汝は我と血の契約を結ぼうというのか……？」

「我は嘘は申さぬ。汝の躰に仮初の命を与えよう。我が黒魔術には

それが可能ぞ」

“命！ 汝は我に命を与えようというのか！”

「血の契約によってそれを保証しよう」

“ならば、我は汝を信じよう”

マリスは一枚の紙とナイフ、それから筆ペンを取り出すと、自分の指をナイフで切った。

ぼたり、ぼたりと血がこぼれる。それを皿の上に落としていく。

その間、マリスは黒のインクで誓約文を書き上げる。

「我、マリス・トリリスは、汝、雛女に仮初の命を授けることをここに誓う」

最後の名前の部分だけ、血の文字でサインする。そして、親指に血をこすりつけると、それで朱印を押した。

“我、雛女は、汝、魔女マリス・トリリスを主として認めることをここに誓う”

ぼんやりとにじむように染みが紙の上に浮かび上がると、文字へと変わる。それは精霊達が用いる精霊文字。専門外ではあるが、知識を持っているマリスにはそれが雛女、と読むことができた。

「これにて交渉を終了とする」

“これにて交渉を終了とする”

二人がそう言うのと、光り輝いていた魔法陣や人形が徐々に光を失っていく。

後にはぐつたりとしたマリスと、物言わぬ黒髪の東洋人形だけが残された。

「ふう……交渉終了だにやあー……」

マリスは椅子にくつたりと座り込んだ。交渉は非常に大量の魔力を用いる。交渉を行った直後はこのようになるのが普通だった。

「命……創らなきや……」

だが、マリスは再び立ち上がる。ふらふらとして頼りない足つきだったが、テーブルの上に置いてあった小瓶を一気に飲み干す。

「ふうー！ 魔力回復！」

それはマリスがあらかじめアリスに頼んで作ってもらったマナ・ポーションである。一時的に魔力を回復する効果があった。

「仮初の命、かあ……。何年ぶりかによあー……」

マリスは棚からたくさん薬や材料、本をまとめてテーブルの上へ下すと“命”の創造を始めた。

深い霧に満ちた森に朝日が射し込む。

今日も森に朝がやってきた。動物達は目を覚まし、小鳥達はさえずり始める。

「お姉さま、おはようございます」

アリスがマリスの部屋を訪れると、マリスは机につつ伏したまま眠っていた。彼女の手にあるフラスコの中には七色に輝く物体がある。

「まあ、綺麗ですね！　これが姉さまの研究成果……。は、いけないいけない。マリスお姉さまの邪魔をしてはいけませんね」

アリスはベッドにかけてあった毛布を手にとると、眠っているマリスにかけてやった。

「今日の朝ご飯は少し遅めに作ることにしましょうね」

アリスは静かに部屋を出ると、台所へと向かっていった。

「おはよあー」

マリスが起きてきたのは昼に近い時刻だった。

アリスはあらかじめマリスのために残しておいたスープを温めると、パンをスライスする。

「マリス様！　お召物をきちんと着なさってください！」

「え……？」

「は……？」

アリスとイリスの動きが止まる。

二人は目を疑った。昨日まで微動だにしなかった件の東洋人形がふわふわとマリスの後を漂いながらついてきているではないか。それも喋りながら。

「あの、マリスお姉さま。その子は……」

「ああ、この子雛女っていうのぉー。私の新しい使い魔みたいなものかなぁー？」

「え、だって、それって依頼の人形じゃないの……？」

「あはは、昨日交渉してるうちに意気投合しちゃってさぁー。だから今日からあたしの使い魔になったのぉー」

「いいの？ 依頼主はお金を積んでまで手に入れて、さらにお金を積んであなたに依頼したんじゃないの……？」

「にははは、ま、依頼主にはきっちり渡すモノは渡すよぉー」

そのとき、ちょうど小屋のドアがノックされる。

「はい、今きますね」

アリスは素早くマリスの朝食の準備を済ませると、ドアを開いた。「いよ！」

そこに立っていたのはガストだった。

「どうぞどうぞ、上がってください」

「おう、邪魔するぜ」

ガストとアリスはまっすぐダイニングへと向かう。

「あ、マリスさん朝飯？ 悪いね、そんなときに来ちゃって……」

「にはははー、昨日徹夜だったからねえー」

「あれ、その人形、いつから空飛べるようになったんすか？」

「にはははー、まあ細かいことは気にしにゃーい」

ふわふわと漂っていた人形はテーブルの上に着地すると、びしりとガストを指差す。

「人間！ マリス様にそんな口聞いていると、その口縫い閉じるよー！」

「うお、喋った!?!」

「あははー、色々と複雑な事情があってねえー……」

マリスは事の子細を説明する。交渉中に雛女が依頼主の元へ戻りたくないと思願したこと、そしてマリスの使い魔になってしまったこと……。

「あちゃー……依頼主カンカンだろうなあ……」

「にははは、代わりと行ってなんだけど、コレ持ってたってよあー」
そう言っただけでマリスは黒い紙に包まれた物体をテーブルの上に置いた。

「魔具コレクターなら喉から手が出るほどほしいはずだよあー」

「なんすかこれ……?」

「禁書、って言われてる魔具の一つかやー。つっても模造品だからモノホンほどの力は秘めてないけどねえー……」

「こんなんで納得してくれるかな……」

「ゴールド換算すると2000ゴールドはくだらないんじゃないかやー?」

「2000!?」

その場にいた全員が凍りつく。

「レアモノだよあー。ま、モノホンの禁書だったら世界滅ぼせちゃうからねえー。模造品であっても相当の魔力を秘めてるはずだからダイジョブダイジョブー。コレクターならこれ一つ手に入れるのに人生賭けてる人もいるくらいだからねえー」

ま、付喪神と呪いの区別もつかない魔術師如きに使いこなせるようなものではないが、とは付け加えないでおいた。

「マリスさんはいいんすか? こんなレアアイテム出しちゃって……」

「いいのいいのあー。私、もう二個持ってるからあー」

「嘘オ!? マリスさん、実はセレブなんすね……」

「にはははー、これでも蒐集家だからねえー。まあそれなりのアイテムは持つてるよあー。それに蒐集品は三つ集める主義だから問題ナッシングうー。禁書模造品をはじめとして、グリモワール、賢者の石模造品、宝剣や宝具などの魔具や神器も多数集めてるからねえ

「。魔術・魔法蒐集家、マリス・トリリスといえは少しは名の通つてると思つただけだなー」

「まったく知らなかつたっす……」

「お姉さま……いつの間にそんなにたくさん集めたんですか……」

「にしし、黒魔術で商売してるとその手のいかがわしい道具の類を献上してくるお金持ちサマは山ほどいるんだよあー。あ、とりあえずその禁書持つてっついていーよ。あ、とりあえず布にくるんでねえー。そのまま触れると理性を失うよあー」

そう言つと、マリスはひょいと禁書模造品を取り上げて、懐から取り出した布に包み込む。そして、封呪のテープで嚴重に封印する。

「はい、これでおつけえー」

「あの……マリスさんは今素手で触つてなかつたっすか……?」

「にははは、気にしない、気にしない」

ガストは慎重に禁書模造品をくるんだ布をカバンの中にしまいこむ。

「じゃ、あたしは朝ご飯の続き食べてるからー」

「じゃ、じゃあ、そろそろ失礼するっす」

ガストは一礼すると小屋を後にした。

その数日後、マリスの元へ感謝感激雨アラレの手紙が届いたことは言つまでもないことである。

5 マリスと人形（後書き）

イリスは焦っていた。

自分をよりも遥かに高位の精霊魔術を扱ってしまったことが、彼女を余計焦らせる要因となっていた。

失意に沈んだ彼女は街へと向かった。特にあてもなく街を歩く。

そんな彼女が見つけたのは一枚のチラシだった。

「どんな人でもすぐに魔法が使えるようになります。魔法が使いたいあなたはすぐにこちらへ。通信教育シールト魔法学校……？」

彼女はチラシの謳い文句を読み上げる。

イリスは賭けることにした。ここに行けば魔術の実力を一気に上げられるかもしれない。

そう思うと、彼女はまっすぐに指定された場所へと向かうことにした。

次話、6 イリスの魔法

6 イリスの魔法

第六話

イリスは正直焦っていた。

高等な精霊魔術師でさえ大変だと感じる高等魔術、交渉を専門外のハズの妹がこなしてしまったこと、そしてそればかりか使い魔まで手に入れてみせたことが驚きだった。

精霊魔術師ならば、使い魔を従えているのはよくあることだ。だが、彼女には交渉はもちろん、降霊すらこなせるか怪しいものだった。

「私、ホントにダメだな……。マリスに精霊魔術、抜かれちゃった……」

イリスはぼそりと呟く。だが、彼女のそんな声を聞いてくれる者は誰もいなかった。

イリスは立ち上がり、外套を羽織ると部屋を出る。そして誰に言うでもなく、小さな小屋の外に出た。

イリスはぶらぶらと街を歩いていた。

特に目的もなく、目指す場所もない。

持っていたカバンの中にはわずかばかりのお金が入っている。だが、これも妹達が稼いできたお金だ。

イリスにはマリスの持っているような高価な魔具も、アリスのように薬を精製する技術もない。どこにでもいる、ただの魔女だった。「私、ダメね。出来損ないのダメ魔女ね」

そのとき、きゅーと彼女のお腹が鳴る。時間はほぼ正午、そろそろお昼時だった。

「どうしよう……。マリスには何も言わないで出てきちゃったし、か

とってアリスのところに行くのも……」

今ならばアリスが街に薬を売りに来ているはずだった。だが、アトリエ商店へ向かう気にはなれなかった。

「これは……？」

ふと、イリスは一枚の紙を見つける。それは極彩色で目立っていて、道に落ちていてもすぐに目を引くものだった。

イリスはその紙を拾い上げる。

「どんな人でもすぐに魔法が使えるようになります。魔法が使いたいあなたはすぐにこちらへ。通信教育シールト魔法学校……？」

それは怪しげな学校のチラシだった。その紙そのものには魔法はかかっていないが、不思議と魅力があった。

「これに通えば私も魔術……いや、魔法が使えるようになるのかしら……？」

連絡先を見てみる。コーヒーショップ、ナルビクの海の店主に連絡せよ、と書いてあった。

イリスはチラシを胸に抱き、力強く歩き始めた。

ナルビクの海は裏通りにあるコーヒーショップだった。

裏通りにはいかかわしい店がいくつも並んでいる。危険な薬品の材料や、正規ルートでは出せない闇商品などだ。

「そこのおねーさん、ちよっと寄っていかない？」

怪しげな背の低い男が声をかけてくる。

「いえ、先を急いでいるので……」

イリスは小走りで通りを駆け抜ける。

「あつた！」

小汚い看板にナルビクの海、と書かれた看板を見つけてようやくほっとする。

イリスは黒くすすけたドアに手をかける。

「こんにちは……」

店の中は陰鬱とした空気に包まれていた。黒ずんだローブを羽織った男や女が何やらぶつぶつと話している。

「嬢ちゃん、ここはあんたが来るような店じゃないよ」

「その、通信教育シールート魔法学校のチラシを見たんだけど……」
「嬢ちゃん魔法の血を引いてるのか？ それとも魔術師か？」

「ま、魔女よ！」

「……かけな」

店主は窓際の空いている椅子を指差す。イリスはそこに腰かけた。「ちよつと待ってる。今“先生”を呼んでくるからな……」
そう言つて店主は店の奥に消えていく。

「あんな小娘が魔女……？」

「妬ましいいつたらありゃしない……」

周囲からイリスを侮蔑する言葉が呟かれる。

魔法の血はそれだけで魔術を使いこなせる、という特典がついている。普通の人間が魔術師になるのはとても難しいことなのだ。

イリスは逃げ出したい気持ちをこらえて、店主が戻ってくるのを待つ。

「二、三十分で来るそうだ。何か注文するか？」

「あ、じゃあフレンチトーストとコーヒーを……」

「……」

店主は店の奥に消えていく。

しばらく待っていると、やがてフレンチトーストとコーヒーが現れる。

「“先生”のお客さんだろ？ タダにしてやんよ」

「え、いいの……？」

「いいから黙って食って待ってる」

店主はすぐにカウンターに戻ると、グラス磨きをはじめ。

イリスはそつとフレンチトーストへと目をやった。

パンの端が少しカビているのが目につく。

イリスはその部分をちぎって皿の端に置くと、トーストをかじっ

た。

(う、不味い……)

くちゃ、くちゃと何度か噛んで、パンを飲み込む。

イリスには一口が限度だった。諦めてトーストを皿の上に置くと、コーヒーを口にする。

そちらはなんとか飲みそうで、少しずつコーヒーを口に含む。

そうして待つこと四十分、ようやくその男は現れた。

「いやあ、お待たせして申し訳ない」

びしり、とした背広を着込んだその男は重そうなトランクケースを持って現れた。一目見た感じでは、悪そうな男ではなかった。

「魔法を学びたいんだってね？ いやあ、君ツイてるよ。なんせ私に出会えたのだからね」

トランクケースを開くと、重そうな本を何冊も取り出す。

「私に任せれば魔術師どころか、魔法使いまで一気にステップアップだよ」

「その、ダメな魔女見習いでも大丈夫……かしら……？」

男は一瞬ポカンとしたが、やがて大きな声で笑い始める。

「はははは、そういう人のために私がいるんですよ」

彼は平積みした本の一冊を開く。

「これは魔術概論。体系化された魔術を紐解くのに必須の魔術書だよ」

「そ、そうなの？」

彼女や妹達、母の本棚でも見かけたことのない本だった。イリスはそーっと指を伸ばし、ぺらぺらとめくる。

「それからこっちは基礎魔術概論。基礎的な魔術について学べる本だよ」

またしても見たことのない本が現れる。そこにはイリスの知識とはかけ離れた魔術についての知識が書き記されていた。

「この辺のテキストを完璧にこなしたら……いよいよ魔法さ。これは魔法読本。魔法についての解説書だよ」

「これが……魔法……」

やはり彼女の全く知らない知識で本のページが埋め尽くされていた。書いてあることはほとんど理解できなかったが、おそらくここまでのレッスンをこなせば理解できるようになるのだろうとイリスは納得した。

「さあさあ、これで全部合わせて120ゴールド！ 安いもんだよ！」

そう言われてイリスはハツとする。そう、彼女にはお金がない。とてもじゃないが、こんなたくさんの本を買うことができるわけがなかった。

「ごめんなさい……、私、お金を少ししか持ってないの……」

「ノンノン、心配ご無用。そんなアナタのために教育ローン！ 低金利、長期返済も可のステキなローン！」

「ローン……って、借金ですか？」

「大丈夫、大丈夫、これらの魔法を完璧に学べばお金儲けなんてし放題、一瞬で返済できること間違いなし！ あ、こっちが契約書ね。はい、インクとペン」

そう言って男は二枚の契約書を取り出す。片方はローンの、もう片方は通信教育の契約書だった。

イリスはごくりと生唾を飲み込む。これにサインすれば魔術はあるか、魔法すらも操れるようになる。彼女はそう信じていた。

筆ペンを取り、インクに浸す。そして、そーっと契約書に「させないです！」

その瞬間、黒い何かが彼女の手につつきり、インクボトルをひっくり返した。インクが契約書に広がり、真っ黒に染めていく。

「誰ですか！ 邪魔したのは！」

男はすくつと立ち上がり、辺りを見回す。

「黙って聞いてればインチキ魔術書ばかり並べて、更には魔法うー？ 寝言は寝て言っしてほしいなあー」

隣の席に座っていた茶髪の少女が立ち上がる。

「え………?」

「ふうー……。危険探知機コーションスコープが壊れたから、何かと思えばこんな詐欺に引っ掛かるなんてえー……。姉さまもまだまだ未熟だねえー」

「マリス!? どうしてここに!?!」

マリスはぱちんと指を鳴らす。すると、雛女が袋をひっくり返した。中から砕けた水晶が落ちてきて、テーブルの上に転がった。

「これは……」

「危険探知機。姉さまに危機が迫ったとき、砕けるように魔術をかけておいたものだよおー。あ、こっちはアリスの分ー」

そういつて、革の袋を指先からぶら下げる。

「誰だか知らないけど、商売の邪魔をしないでほしいですね」

「こつちこそ誰だか知らないけど、姉さまを誘惑しないでほしいねえー」

男は手を翻す。すると、店の影からおびただしい数の大きな人形が現れた。

「魔法の力、見せてやる!」

人形達の額に魔法陣が浮かび上がる。その瞬間、人形達は手に様々な凶器を持ち上げた。

「人形操り(マリオネット)かあー。一昔前の流行だねえー」

人形操りは高位の魔術師ともなれば同時に複数体の人形を操ることができる強力な魔術だ。簡単に兵を作り出し、術者の実力次第では一個小隊にも届きかねない人数の兵を作り出す。強力なその魔術は乱用され、盗賊まがいのことをして金を稼ぐものまで現れるほどだった。

「けれども甘いねえー……」

ぱん、とマリスは手を叩く。その瞬間、彼女の足元から大きな魔法陣が広がった。

「人形操りは決定的な弱点があるんだよねえー」

乱用された魔術は国によって鎮圧の対象となる。王立魔術研究所が研究に研究を重ね、この強力な魔術を封じ込めることに成功した。

「な……ッ！」

マリスは呪文を唱える。ルーンが紡がれる度に人形は糸が切れた操り人形のように崩れていく。

「ば、馬鹿な……！」

これこそが王立魔術研究所の出した答えだった。糸切り（ワイヤーカット）。人形操りを無力化する専用魔術である。

「にしし、チミが魔法使いならあたしは大魔法使いだねえー。さて、ウチの姉さまにパチモン売りつけようとした代償、どう払ってもらおうかねえー」

マリスは凶悪な笑みを浮かべながら印を切る。そしてルーンを紡ぎ、魔術を組み立てていった。

「同じ魔術で攻撃されるのはどんな気分かなあー？」

「ひ、ひい！？」

崩れ落ちていた人形達が再び立ち上がる。しかし、今度の人形達の視線は男へと集まっていた。

人形達はわつと男を取り囲む。それぞれ恐ろしげな凶器を持って男を威嚇する。

「コレに懲りたら二度と詐欺なんて働くんじゃないよあー？」

「す、すみませんでしたッ！」

男は素早くトランクケースへ本を片付けると、一目散に店を飛び出していく。

マリスがきちんと指を鳴らすと、人形はサササ、と店の影へと消えていく。

「姉さま、こんな詐欺に引っ掛かっちゃダメだよあー？」

イリスは茫然としていたが、その言葉を聞いて手を思い切り握りしめる。

「……マリスはズルいよ。いつも私より先に行っちゃって……。この前の人形の時だって、今回の詐欺だって……。！ 才能のあるあなたはいいじゃない！ こうやって人を守ることができるし、お金だって稼げるし……。！ それにそれに……。！？」

マリスはそつとイリスの体を抱きしめた。イリスのふわふわの銀髪に指を通し、そして愛しそつに髪をすく。

「姉さまだつてズルいよおー。こんなにふわふわで綺麗な髪の毛持つててえー……。顔だつてとつても綺麗なだしい、声なんて鈴みたいだよおー？」

「でも、そんなのちつとも役に立たないじゃない！」

「あたし、姉さまとアリスが羨しかったのおー。アリスもぴかぴかの金髪だし、姉さまも輝くような銀髪だし……。どうしてあたしだけこんなまつ茶つ茶なのつていつも泣いてたんだよおー？ 魔術で髪を染めることはできるけど、そんなの意味ないしねえー。持たざる者、持っている者は人によつて千差万別。問題はそのためになつて努力するかつてことなんだよおー？」

「努力……？」

マリスは抱擁を解いてイリスの目許に溜まつている涙を拭う。

「アリスもあたしも、努力したから魔術があるんだよおー？ そりゃ、才能も大事かもしれないけどさあ……。アリスがあれだけの薬の知識を身に付けるのにどれだけの本を読んだか、姉さまだつて知つてるでしょおー？」

「私は……。努力が足りないつてこと？」

「なんでもやる前から諦めるのは姉さまの悪い癖だよお？ そして近道しようとするのもねえー。まつすぐな道しかないんだよおー。じゃなきゃ、今頃世界は秀才で溢れかえつているよおー」

「でも、私にはあんなものしか頼るものが……」

マリスはそつと目を瞑り、イリスの手を優しく包み込む。

「あたし達がいるでしょおー？ 姉さまがわからないなら、皆で考えようよおー。三人寄れば文殊の知恵、姉さまの魔術だつてきつと進歩するよおー」

「そうよね……。あなた達に相談しない私が馬鹿だつたわ」

イリスは服の袖でごしごしと目許を拭いた。

「マリス、私に魔術を教えてちょうだい！ 私、頑張るから！」

「それでいいんだよおー」

マリスはにつこりと笑った。

「これにて一軒落着ですね！」

雛女もそんな中睦まじい姉妹の姿を見て、嬉しそうに言う。

「まー、ダメダメ魔女はたとえマリス様が師についても、ダメなのは変わらないでしょうけど」

「な、雛女あんたねえ！」

雛女はきゃはは、と笑いながら狭い店の中を逃げまどぐ。それをイリスが必死に追いかけていた。

そんな姉の様子を見て、マリスはふーっと息を吐いた。

「さ、これにて一軒落着、かなあー？」

マリスはぱんぱんと服の埃を払うと、服の内側から金貨を数枚取り出した。

「これ、迷惑料としてもらっておいてよおー」

「……」

店主は黙って金貨を受け取る。

「じゃ、またねえ〜」

マリスはぶらぶらと手を振ると、相変わらず駆け回っている二人の元へと向かっていった。

6 イリスの魔法（後書き）

アリスはいつも通り薬を売りに街へやってきていた。

だが、今日の彼女の様子は少しおかしい。

「おいアリス、大丈夫か？ 顔赤いぞ？」

「えへへ、これくらい大丈夫ですよ……」

そうは言っていたが、店を広げた直後、すぐに彼女は目を回して倒れてしまった。

次話、7 アリスと虚脱

7 アリスと虚脱

第七話

今日もアリスは薬を売りに街へとやってきていた。

だが、今日はいつもと彼女の様子が少し違った。

彼女自身も気付いているのだろうが、無理を押しして来たようだった。

「おいアリス、大丈夫か？ 顔赤いぞ？」

「えへへ、これくらい大丈夫ですよ……」

なんとか店を広げたが、通りがかったガストに心配されるほど、彼女の容態はおかしかった。

息は乱れ、頬は赤い。アリスは薬棚からいくつかの薬を取り出すと、それを一気飲みする。

「これで……大丈夫な……は……ず……」

だが、彼女の視線は定まらなかつた。頭はくらくらして、体は重い。あの霧の深い森をここまでやって来れたのが奇跡だったといえよう。

「おい、アリス！ おい！」

そのままアリスは自分の体が傾くのを感じた。ガストの声が徐々に遠くなっていくのを感じる。

（私、どうしちゃったんでしょうか……）

そんな疑問さえ白濁した波に飲まれて消えていく。やがて彼女の意識も波に飲み込まれ、消えていった。

その部屋にはマリスとイリスと雛女、そしてガストとガストの父親が集まっていた。そして、ベッドには頬を赤らめて息を荒げるアリス。

「今日来てからこんななんだよ。なんか心当たりないか？」

「おかしいわね……。家出る前はこんなじゃなかったのに……。マリス、呪いとかそういうの類は？」

「うーん……。見た感じはそういうのはないけどねえ……。むしろ虚脱の状態の方が近いかもねえー」

「虚脱って何だ？」

ガストが聞き慣れない言葉にマリスへ尋ねた。

「虚脱ってのはねえー、魔力を自分のキャパシティ以上に使いすぎたときに起きる、一種の発作みたいなものかなあー？ 普通、魔力をたくさん使くと疲労みたいな状態になって倒れちゃうんだけどおー、虚脱の状態に陥るほど魔力を使うと正常に眠ることすらできなくなるのあー。そうなると魔力を補給するために体が強制的に休ませてえーってなってえー、こんな状態になるんだよあー」

「でも、虚脱の状態に陥るほど魔力を使うって何をしたのかしら……？ 普通の薬を調合する程度じゃこんな状態になるとは考えられないけど……」

一同はうなづいて考える。

「たとえばあー、ここに来る途中、何か必要があつて大規模な魔術を使ったとかあー？」

「大規模な魔術って……アリスは錬金術師よ？ あなたのようになんでも屋さんってわけじゃないのよ？ 錬金術にそんなたくさん魔術を消耗するものなんて聞いたことないわ」

「んー……考えられるのは賢者の石の精製くらいかなあー」

「その、賢者の石ってなんだ？」

またしてもガストが質問する。

「賢者の石ってのは別名、哲学者の石とも呼ばれる錬金術の結晶だよあー。卑金属の病を治し、貴金属へと変える奇跡の物質であり、人間に生命の水を与える霊薬であるともいえるのあー。生命の水ってのは早い話が不老不死の薬かなあー？ ま、それは伝説上での話であつて、再現されたモノはそんな便利なものじゃないんだけどね

えー」

「あれ、そういえばこの前禁書模造品を預かったとき、持っていると
か言っただけだったか？」

「うん、持ってるよおー。でも、私が持ってるのは賢者の石模造品
だからねえー。卑金属を黄金に“似た”物質へと変え、病氣の人を
健康に“似た”状態に持っていく、気休めにしかならないモノなん
だよおー」

「“似た”状態……？」

「そ、実際には病氣は治ってないから、元気に過ごしてたと思っ
たらある日突然ポツクリ。ま、詐欺に使われるのがせいぜいだねえ
ー。でも、もし本物の賢者の石を精製するとしたら……虚脱に陥い
るところの魔力じゃ済まないだろうけどねえー」

「でも、アリスは賢者の石は作らない、って言ってたじゃない」

「それもそうだよねえー」

「え、そんな便利な薬なら作るべきじゃないのか？」

「そんなこともわからないんですか、このアホ人間は？」

雛女が口を挟む。

「あ、アホ人間とはなんだ、このバカ人形！」

「ふふん、今からアリス様が説明してくださるわ」

アリスはごほん、と咳払いしてから語り始める。

賢者の石、それは人間が一度は夢見る理想の結晶。

苦しみに喜びを、戦に勝利を、暗黒に光明を、死人に命を与える

奇跡の物質。

全ての錬金術師がその理想を目指して突き進んだ。

究極の万能薬の精製、それは不完全な存在である人間を完全な存
在へと昇華させる手段の模索でもあった。

そして、一人の魔術師が賢者の石の精製に成功する。

彼は賢者の石を使って自己の神化をもくろんだ。

だが、神に近付きすぎた人間は翼をもがれて地へと落ちる。彼が作り出した賢者の石は完全な存在を生み出すどころか、彼の魔術師としての生涯に終止符を打つ結果となった。彼は地獄に住まうという魔王へと変化した。

異常なまでの魔力を持つその物質に、人間の体は耐えることができないのだ。

多くの魔術師や戦士によって彼は倒され、この史実は歴史の闇へと葬り去られた。

それ以降も伝説上の賢者の石を作り出そうという模索は続いたが、その史実を知る数少ない魔術師や魔女によってそれは防がれ続けている、といわれている。

「と、いうわけで賢者の石は危険な物質なんだよおー。普通の魔術師や魔女にはとても扱えない……私が仮に本物に出会ったとしたら、破壊することを選ぶねえー」

呟くように語るマリスの声は冷たかった。

「トリリス家は数少ない史実を知る家系。この家で錬金術を学ぶ者は必ずこの伝承を聞かされるわ」

イリスも畏敬の念を込めて言う。それほどまでに彼女達は賢者の石を恐れているのだろう。

「錬金術を学んでいない私達でさえそんなんだからあー、錬金術を学んでいるアリスは絶対作らないよおー」

「そうね。でも、なんでアリスは虚脱に陥ったのかしら……」

「家出る前はそんな素振りもなかったからあー、家出てから街までの間だよねえー……。錬金術で大容量の魔力を消費する魔術って他にあつたっけえー？」

「すぐに思いつくのはマナ・ポーションの精製かしら？ あれは魔力を大量に使ってアリスが言ってたから……」

「マナ・ポーションくらいだったら、アリスの場合、百本は作らな

いと虚脱には陥らないよおー。アリスはトリリス家の娘だよおー？
魔力量はそんじゃそこらの魔術師じゃ比べモノにならないくらいあるからねえー。姉さまも魔力だけは他の魔術師よりも抜きん出るからねえー」

「ま、魔術の方はからつきしダメですけど」

「雛女、あんたには言われたくないわ、このオンボロ人形！」

「ふん、私はマリス様に召喚された高位の精霊ですよ？ 魔術の腕に関してはおなたよりも上だと思いますが」

雛女はそう偉そうに言った。それを聞いてイリスは思わず構える。

「なんならここで勝負付けようじゃない」

「望むところです」

二人はにらみ合って魔術を行使 しようとしたが、マリスの分厚い本の角によって鎮圧される。

「うう……マリス様、痛いです」

「マリスう……何するのよ……？」

マリスはやれやれ、と呆れたようにため息をつく。

「アリスがこんな状態なんだからあー、ふざけてる場合じゃないよおー？」

「それもそうだったわね……」

「ごめんなさい、マリス様……」

二人はシヨボくれた様子でうつむく。

マリスはしばらくの間、持ってきていたカバンの中身を探っていたが、ようやく目当てのモノを見つけてそれを高々と掲げる。

「虚脱にはコレだよねえー」

それは空のフラスコにチューブがついたものだった。

「それは……？」

「魔力蓄積アイテムの一つ、魔力の倉庫番だよおー。これに私達の魔力を注入して、それをアリスに移せば虚脱からも即座に回復できるねえー」

「ああ、なるほど、そういう方法があったわね。私はてっきりマナ・

ポーションでも精製するのかと思ったわ」

「にしし、作ってもアリスがこんな状態じゃあ飲めないだろうしねえー」

フラスコから伸びるチューブをマリスはくわえると、ふーっと息を吹き込んだ。すると、フラスコの中にぼうつと光がこぼれる。

「姉さまのやつてくれるうー？ あたし一人じゃ限界あるからねえー」

「わかったわ」

イリスはマリスと同じようにチューブをくわえると、思いつきり息を吹き込んだ。その瞬間、フラスコが強く輝く。

「おおーう、さっすが姉さま、魔力量だけは一流だねえー」

「ま、魔力だけあっても魔術を行使できる実力がなければ宝の持ち腐れ、ってヤツですけどねえー」

マリスとイリスは交代で息を吹き込む作業を続ける。その度にフラスコの中に光が溜まっていき、徐々に輝きを増していく。

その作業をどれだけ続けたらだろうか。三十分ほど経過した頃、ついにマリスが膝をつく。

「ね、姉さまあ……あたしもうリタイアあ……」

「え、もう？」

汗を額に浮かべながら苦しそうに息をするマリスに対して、イリスはけるつとした表情で尋ねる。

「イリス姉さまは本当に魔力はたくさんあるんだねえー。こりゃ、将来化けるよおー？」

「魔力だけあっても魔術の才能がからつきしじゃあ意味ないですよ。その後はイリスが一人で息を吹き込む。フラスコの中身は今やまばゆいほどに光が満ちていた。

「おっけーおっけーストロップ！ これ以上やったら魔力を蓄えきれなくて割れちゃうよおー。これ結構上級の魔具なんだけどなあー。二人がかりとはいえ、限界まで魔力を溜めこめるとは思わなかったよおー」

相変わらずイリスはなんでもないような表情をしている。マリスは額に汗を浮かべながら、チューブの先にマスクを取り付ける。それをアリスの顔にかけてやると、フラスコのコックを回した。

「一気に魔力を突っ込んだら魔力中毒になるからねえー。こうやって呼吸に合わせて少しずつ魔力を入れていくんだよおー」

「なるほどね。……って、じゃあマナ・ポーションと違って危険なんじゃない？」

「そうだねえー。マナ・ポーションは便利だけどおー、魔力中毒の副作用があるからホントはよくないんだよねえー」

「で、でもマリス様！ マリス様が私の命を人形に定着するとき、一気飲みしてたような……」

「にしし、見られてたのかあー、恥ずかしいなあー」
マリスは照れ笑いを浮かべる。

「マリス様ったら私のことをそんなに想って……」

雛女は頬を赤く染めながら、キヤー恥ずかしいなどのたうちまわっている。

「この主人至上主義のバカ人形は……」

そんな様子を冷静に見つめるイリス。

「ま、ともかく後はアリスが目覚ますのを待つだけかなあー……。マズイ、魔力使ったら眠くなって……きた……」

「とと、マリス様、こちらの椅子へ……」

雛女はマリスの手を取ると、椅子に座らせる。すると、マリスはまるで糸が切れた人形のようにこんこんと眠り始める。

「あの、イリスさんは平気なんか？ さっきマリスさんが言ったけど、魔力をあのでフラスコに詰めるのって相当疲れるんじゃない……」

「私？ 全然大丈夫よ？」

ぐるんぐるんと腕を振るってみせる。

「あのダメ魔女……魔力量だけは常人離れしてるんですから……」

そうしてしばらく時間が経過した。

相変わらず静かに光り輝くフラスコは、時折明滅しながら少しずつ魔力をアリスへ供給している。

ガストと彼の父親は仕事のできたので部屋を出て行ってしまった。部屋には魔力を使い果たして眠るマリスと、マリスの膝枕をしているイリス、暇そうに辺りを漂っている雛女、そして頬を上気させながらベッドに横たわるアリスだけが残されている。

イリスは膝の上で眠るマリスの頭を撫でながら、アリスが虚脱に陥った原因を考えていた。

アリスは街に来るまでの間に、どこで魔力を消耗したのだろうか。虚脱に陥るほどの魔力の消耗量だ。並大抵の魔術を行使した程度ならばこんな状態にはならない。

ガストに呼び出されて、イリス達がアリスの元へ駆け付ける間、森では特に変わった様子はなかった。アリスが魔術を使うような場面が見当たらない。

ならば街だろうか。優しいアリスのことだから、人助けのために魔術を行使した可能性はある。だが、それでも自分の身を省みないような馬鹿な子ではない。

「ん……………」

ふと、アリスはベッドからアリスの声が聞こえたので顔を上げる。アリスはうつすらと目を開いていた。

「アリス！ 意識が戻ったの!？」

「ここは…………？ 私は…………どうしちゃったんですか…………？ なんてお姉さま達がいるんですか…………？」

イリスは慌てて立ち上がる。その瞬間、マリスの頭が床へと落ち、派手な音を立てて床とぶつかる。

「あいたあ…………。何、何があったのぉー？」

マリスは両目に涙を溜めながら起き上がる。

「あ、ごめん、マリス。アリス起きたからびっくりして立ち上がっちゃった……………」

「いたたあ……。アリス起きたのぉー？」

マリスはアリスにそのままにしているように言う。虚脱から抜け
たとしても、体が圧倒的な魔力不足状態にあることに変わりない。

「あの、私、どうしちゃったんでしよう……？」

「それはこつちが聞きたいわ。いきなりガストからアリスが倒れた
って連絡が入ったし、行ってみれば虚脱状態になってるし……」

「で、あたしと姉さまの魔力を魔力の倉庫番でアリスに供給してた
わけー」

「そうですね……。私、虚脱状態になっちゃってたんですね……」

アリスはマスクを付けたまま、ぼんやりと視線を泳がせる。

「アリス、何があったの？」

「大丈夫、なんでもありませんよ」

アリスは精いっぱいにつこりと笑おうとする。だが、明らかに表
情は疲弊していて、大丈夫には見えない。

「あたしとアリスの仲でしょぉー？ 何かあったら話すのが姉妹っ
てもものだよぉー？」

「ホントに……。なんでもありません」

だが、アリスは黙して語らない。マリスとイリスは追及すること
を諦める。こうなったときのアリスは強情だ。

「ふう……。なんでもないんなら仕方ないねえー……」

「そうね。仕方ないわ」

アリスはただ困ったような微笑みを浮かべたまま、ベッドの上で
困り果てた姉達を見つめていた。

7 アリスと虚脱（後書き）

翌日、イリスとマリスはアリスの後をつけて歩いていた。

気付かれないよう、少しずつ、少しずつ、魔具を使って気配を悟られないように見守る。

彼女は森の奥にある洞窟へと向かっていた。

そこで、アリスは何を作っているのだろうか。

次話、8 アリスの秘密

8 アリスの秘密

第八話

翌日、アリスとイリスはこっそりとアリスの後を追いかけていた。アリスはおそらく気付いていない。鼻歌を歌いながら重そうな薬棚を難なく背負って歩きにくい森を歩いていく。

「あ、アリス速いー……」

「あの子、どこまで行くのかしら……?」

アリスが向かう先は街とは少し違う方向だった。

突然ごつごつした岩肌が見えてくる。森の奥の山の入り口までたどり着いてしまったようだ。

「これは……洞窟?」

アリスは山の洞窟の中へと足を踏み入れていく。

「困ったわ。洞窟の中じゃ、音が反響して気付かれるわ……」

「そんなときに便利なのが……」

アリスは「サイレンサー」とカバンの中を探る。

「じゃーん、消音灯! これを灯けると周囲の音を消してくれるんだよー」

「便利な道具ね」

さっそくアリスは魔術でランプに火をつける。すると、すうーつと音が消えていった。

「それでいて、会話はしつかりこなせる便利な道具なんだよー」

「足音だけ消せるなんて随分便利ね」

「もともと夫の浮気現場を押さえるために開発された魔具だからねえー。会話が聞こえないという意味ないでしょー?」

二人は近付きすぎないよう、かといって離れすぎないようにアリスの後を追いかける。ひんやりとした空気が肌に触れて、少し寒いぐらいだった。

「どこまで行くのかしら……」

そうやって長い洞窟をゆっくり進んでいく。

ようやく最深部にたどり着いたのか、アリスは足を止めた。

彼女はしばらく辺りを見回していたが、近くに誰もいないことを確認すると、懐からスタツフを取り出した。

そして素早く呪文を唱え、そこに置いてあつた何かをぼんぼんとスタツフで叩く。

「昨日はちよつとやりすぎちゃいましたけど、今日は少しセーブしましょう」

アリスは小さく囁くように言うと、魔力を少しずつそこへ移していく。

「何してるのかしら？」

「ちよつとここからじゃわからないねえー……」

「マリス様、何かいい方法でもあるんですか？」

マリスは再びカバンを漁ると、一枚のビロードのような布を取り出した。

「隠れマント（ハイドマント）！ これを被ると姿が消えちゃうんだよおー」

マリスは早速イリスと雛女、そして自分の体を包み込む。

そして、ゆつくりとアリスの方へ近付いていく。

アリスの手元には自然にお碗の形になった石があつて、そこに魔力が渦巻いていた。

「自然の石窯……？」

「そうみたいだねえー……」

アリスは慎重に魔力をコントロールしながらお碗へと落とすしていく。そして、時折スタツフでかき混ぜながら呪文を唱え続ける。

「ふう……。今日はこのくらいにしておきましょう」

アリスはうつすらと汗を額に浮かべていた。床に置いておいた薬棚を背負うと、危なっかしい足取りで洞窟を後にする。

後にはマリス達が残された。

「これ、何？」

石窯の中には緑色に輝く薬が残されていた。

「さあ……。私にもわからないな」

かといって、下手に手を出すわけにもいかない。これがたとえば貴重な霊薬の類だったとしたら、アリスにとつて申し訳ないことになる。

「ここは下手に手出しせず、アリスの気が済むまでやらせるしかないねえ……」

イリスはいまいち釈然としなかったが、諦めてそこを立ち去ることに決めた。

明くる日もアリスは洞窟へと足を運んでいた。

その日もマリス達は彼女の後を尾行する。

「マリス、なんか調べたりした？」

「一応ねえ……。でも、あんな風に魔力を直接混ぜ込むような薬なんて見たことないねえ……」

「まさか……賢者の石？」

「賢者の石は燃えるような赤だつて聞いてるよあー。それにあれは液状。とても石には見えないねえ……」

今日もアリスは魔力をお碗に落としながら混ぜていく。時折ぼつと緑色の粒子が近くを飛んでいたが、そんなことには構わずアリスは魔力を練り続ける。

しばらくの間そうしていたが、突然彼女は薬棚を開いて中から小瓶を取り出す。それでゆつくりと液状になった魔力をすくい上げると、栓をして棚に戻した。

そしてすくりと立ち上がって洞窟を出ていく。

そんな日が何日続いただろうか。

アリスは毎日のように洞窟に通い、魔力をお碗に移しては小瓶ですくい取り、それを毎日持ち帰っていった。

「あれは魔力濃縮だろうねえ……。小瓶ですくってるのは残りカス、かなあ……」

「何作ってるかはわからないの？」

「そうだねえ……。錬金術は専門外だからよくわからないけど、何か高級霊薬の類かもしれないねえ……」

だが、あんなものを直接飲めばタダでは済まないだろう。それほどまでにあの液体は魔力が凝縮されている。それこそ神器に匹敵するほどまでに……。

ここ数日で彼女は何本ステッキを新調しているだろうか。それほどまでにあの薬は魔力が強力だ。混ぜているステッキもすぐに限界が来て使えなくなってしまう。

そんな日々もついに終わりがやってきた。

「これでよし！」

アリスはそう言うと、大きなビーカーでお碗の中の薬を綺麗にくく。

「ついに完成したのかしら……？」

「みたいだねえ……」

アリスはビーカーの中身をフラスコに移しかえると、栓をした。

そして、慎重にそれを薬棚へとしまう。

彼女は鼻歌を歌いながらマリス達のそばを通り抜ける。

マリス達は隠れマントを脱ぐと、アリスの使っていた石窯を覗き込む。

「これは……精霊石？」

今まで薬が満ちていて気付かなかったが、その石窯の底は精霊石という、魔力を秘めた石で覆われていた。

おそらく、普通の石では魔力に耐え切れなくて砕けてしまうのだろう。アリスが強力な魔力に耐えられるように精霊石で底をコーティングしたに違いない。

「とりあえず、少しもらっておこうかなあ」

マリスは駒込めピペットで窯の底に残っていた薬を吸い取ると、クリスタル製の試験管に落として栓をする。

「これだけの魔力が凝縮されていれば、何かに使えるかもしれないしねえ」

それをカバンにしまいこむ。そしてマリスは目を瞑った。

「あーあー、雛女え？ アリス今どこお？」

『今森から出るところです』

自分の使い魔とは五感を共有することができる。そして、遠く離れた場所でも話をすることも可能だ。

「おっけえー。じゃあ姉さま、行くよおー」

「ええ、わかったわ」

アリスはいつもと同じようにアトリエ商店を訪れていた。そして、店の端の方で薬を売っている。

そんな様子をイリスとマリス、そして雛女は柱の影からこっそり見守っていた。

「んー、今のところ動きはないねえ……」

「今日はあれでおしまいなんじゃないかしら？」

「そうかなあ……」

今日は薬の中に混ぜ込んだ魔力が少なかったのか、アリスはとても元気だった。

「とりあえず家に帰るまで見守ってみようかあー」

そうして刻々と時間が経過していく。

やがて夕方になり、彼女が帰る支度を始めた。

台を片付け、並べていた薬を薬棚にしまい、ガスト達に一度礼を言ってから店を出ていく。その後をマリス達はゆっくり追いかける。

「どこに行くのかしら……？」

アリスは森に入りこそしたものの、いつもとは違う道を歩いてい

く。

霧も濃くなり、アリスを見失いそうになってきた。

マリスは消音灯と隠れマントを使うと、もっとアリスの傍へ近寄る。

森の霧は深まる一方で、けれどもアリスは迷うことなく道を進んでいく。

しばらくそうして歩くと、やがて森が途切れて山へと変化する。荒々しい岩肌を覗かせる山道を上っていくと、開けた広場へと出た。中央には大きな泉がこんこんと湧き出ている。

アリスは薬棚を下すと、中から例の薬が入ったフラスコを取り出した。

そしてその栓を抜くと、ためらいもせず泉へと注いだ。

ぼう、と泉が緑色に輝く。アリスはにっこりと笑みを浮かべて、小さな声で呪文を唱えた。

そして、遠慮することなく泉へと足を踏み入れる。

「ええ!？」

イリスは驚いた。なぜなら、アリスが水の上をゆっくりと歩いてきたからだ。足はわずかたりとも沈まず、そのまますすぐ泉の中心を指して歩いていく。

「あれは池渡り(パドルクロッシング)。水の精霊の力を借りて水の上を歩く精霊魔術だねえ……」

「え、あれ精霊魔術!？」

イリスは自分の知らない精霊魔術を使いこなす妹に驚く。

「ってか姉さま、精霊魔術師なら池渡りくらい知っておこつよお……」

「え、だって私、使える精霊魔術っていったら火起こし(イグナイト)とか、水湧かし(スプリング)みたいな低級魔術だけだし……」
「池渡りも低級魔術だよお……」

マリスは小さくため息をつく。こんなしょうもない姉に魔術を教えていけるか不安に感じていた。

アリスは池の中央まで歩くと、再び呪文を唱えた。
すると、丸い池の上に魔法陣が現れた。

青い光を放ちながら、緑の池は力強く輝く。

「驚きだねえー……。アリスも結構勉強してるんだなあ……。…」

「マリス、アリスは何をしているの……。…」

ウンディーネ・コンタクト

「水精接触。水の精霊との交渉の際に使われる降霊術だよー。さつき泉にまいた薬は……。霊媒の役目を果たしているのかなあ？ おそらくアリスがやろうとしていることは……。精霊との交渉だろうねえ」

「え、だってアリスは錬金術師じゃ……。…」

「あたしが予想するに……。…」

そのとき、強い風が吹いた。

泉の水が盛り上がる。それは人型を成すと、アリスの前に立った。

“ 汝は何者ぞ？ ”

「私の名前はアリス、錬金術師アリス・トリリス。水の精霊様にお願いがあつて参りました」

“ ほう……。我に願いだと？ ”

「水の精霊様の“ウンディーネの涙”を分けていただきたいのです。凜と響くその声はマリス達の元へも届いた。

「ウンディーネの……。涙？」

「交渉つてのはあたしみたいに精霊を従えさせるだけじゃなくてえ、精霊の持つ貴重な品をもらうときにも使われるんだよー」

しばらくの間、水精はふわふわとアリスの前を漂っていたが、やがて口を開いて

「お礼に大量の魔力を泉に注がせていただきました」

“ 久しぶりに魔女の魔力を食らわせてもらった。汝は大層質の良い魔力を持っているようだな。我は満足した ”

「じゃあ！ 」

“ だが、これだけでは足りぬ。いや、魔力はもういらぬ。だが、汝が我が体の細片を受け取るに足る人物か確かめさせてもらおう ”

ぶわり、と水が膨れ上がる。

水精は大きく膨れ上がった水の頂点に立つ。

“ 出よ我が下僕 ”

水精の立つ水の柱から大きな塊がちぎれる。それはしばらくの間アメーバのように動きながら漂っていたが、やがて形を作っていく。

「ひゃー……。ありや厳しいなあー……」

「何よ……。あれ……」

水の塊はぐにやぐにやと粘土のように動き、やがて一匹の巨大な烏賊に変化した。

「ッ！」

アリスは大きく息を飲む。

「クラーケンとはやつかいなモノを召喚してくれたねえ……」

クラーケンとは本来海に住む水の化け物だ。体は小屋一つほどの大きさに匹敵し、津波を操り、数多くの船を沈没させてきて、船乗り達に恐れられている。本来こんな山奥の泉などに住んでる妖ではない。おそらく水の精霊が召喚したのだろう。

「助立ちしましょう！ アリス一人であんな化け物は無理よ！」

「ダメだよお。これは水の精霊がアリスに課した試練。これをアリス一人で乗り越えないと……水の精霊はアリスに“ウンディーネの涙”を分けてはくれないだろうねえ……」

クラーケンは耳をつんざくような大声を上げる。ビリビリと岩の間に反響する。

アリスは腰に差していたスタッフを抜くと、素早く呪文を唱える。

「P e S t n e E n n ! (石の針よ、貫け!)」

魔力がぐりぐりと練られ、石の針が何本も現れる。それは素早く飛翔するとクラーケンの外甲に突き刺さった。

「やった！」

「いや、まだだねえ……」

しかし、石の針は分厚い装甲に阻まれ、あと一押し足りなかったようだ。クラーケンは二本の触手を高く掲げる。

「あれは……大津波の予兆だよ……！ あたし達もどうにかしないとヤバイかもねえ……」

「こんなに離れた私が危ないなら、アリスはどうなるのよ！」

マリスは素早く呪文を唱える。彼女達の周囲を空気の泡が包み込む。

「これでこっちは一安心……。だけどアリスは……」

「Wr Bu Me！（空気の泡よ、我を包み込め！）」

アリスの周囲もまた空気の泡が包み込んだ。

「Wr Roar Me！（岩の盾よ、我を守れ！）」

さらに周囲の岩山から岩が集まってきて、彼女の姿を包み込んだ。

「アリスも大丈夫そうね」

クラーケンの周囲の水が巻き上がり、巨大な大波と化す。

メールストローム
大津波。

クラーケンの用いる水の妖術である。

アリスの岩の鎧を削るようになりがりとは水は襲いかかる。竜巻のように渦巻く波の嵐に岩は少しずつ削られていった。

「嘘……」

「あちゃー……。ヤバイかもねえ……」

止まることを知らない渦巻は頑強な岩を削ぎ落とす。

「ッ！」

ついに鎧の一部が剥がれる。そこを狙うかのように水はそのわずかな隙間を狙って飛び込んでいく。

「アリス！」

「ごめんなさい、水の精霊様。少し、手加減ができないかもしれませんが……」

アリスの声が聞こえる。それは遠く離れた二人の耳にもしっかりと届いた。

空気が震える。

水はまるで何かに押されるようにアリスの岩の間からこぼれ出てきていた。相変わらず竜巻はアリスの周囲を襲っているが、その岩の隙間から中に入ることができず、押し出されていた。

「E I E I T h s t R e F i ! (雷の嵐よ、吹き荒れる！)」

空气中に光がきらめく。

それは少しずつ数を増やし、幾つもの雷の柱を生み出した。

雷は泉へと降り注ぐと、容赦なくクラーケンを襲う。

「！」

クラーケンも強力な電撃には耐えられないのか、恐ろしい悲鳴を上げる。それと同時に、水の精霊の立つ水の柱へも電流は駆け上っていく。

悲鳴こそ上げなかったが、水の精霊は確かに苦痛の表情を浮かべた。

クラーケンは強力な電撃を受けたためか、水の塊に戻って泉へと還っていく。

巻き上がっていた水が雨のように降り注いだ。アリスは腰にスタツフを戻す。岩の鎧も崩れて、泉へと落ちていった。

「私の力、認めていただけたでしょうか？」

「素晴らしい。汝の力は確かなものだ。我も直接味わったが、見事な力だ。我は汝を認めよう」

水の柱が斜めに傾き、水の精霊も降りてくる。そして、ゆっくりと手を差し出した。

アリスは懐からフラスコを取り出す。そして、水の精霊の体から分かれ落ちる“ウンディーネの涙”を受け取った。

「ありがとうございます」

アリスはペコリと礼をする。

“また我が力が欲しくばマナを持って立ち寄れ。力になるう”

水の精霊はごぼごぼと音を立てながら泉に沈んでいく。

そんな水の精霊をアリスは手を振って見送った。

8 アリスの秘密（後書き）

何事もなかったかのように、日が明ける。

アリスはいつも通り朝食を済ませると、薬を売りに行ってしまった。マリスはアリスが行ってしまっただのを確認すると、イリスが止めるのも聞かずにアリスの部屋へと入っていく。

マリスはやがて、作業台の上に薬が調合されて、置きっぱなしになっているのに気付いた。

それを見て、マリスは一つのことを思い出す。

「そういえば今日はアレだったけなあ……」

思い当たる節があるのか、マリスはイリスを置いて部屋に籠ってしまっただ。

イリスは除け者にされた気分で、がっかりしながら自分の部屋へと向かった。

次話、9 アリスと祝事

9 アリスと祝事

第九話

翌日、何の変わりもない魔女達の朝餉が始まる。

昨日あんな大きな戦いなどなかったかのようにアリスは鼻歌を歌いながら朝食の支度をしていた。

「ねえマリス、アリスは結局あの“ウンディーネの涙”を何に使ったのかしら？」

「んー……“アレ”は色々用途があるからねえー……」

“ウンディーネの涙”とは強力な水の魔術が込められた秘薬だ。

涙とは喩えであって、水の精霊の体から分離した魔力の結晶であると言ってもそれほど語弊はない。

「解毒剤、惚れ薬、死者操り（ネクロマンシー）……高等な水の魔術を用いるには必須の材料だし、錬金術の深奥に挑むために必要なかもしれないねえ……」

「はい、お姉さま！」

ほかほかと湯気の上がるスープの入った鍋がテーブルの上に登場する。

「おー、こりゃ美味しそうだねえー」

「はい、私特製のコーンスープですよ！」

アリスはお玉でそれぞれの皿にスープを盛っていく。ことりと音を立ててスープが配膳された。

「こっちは菜っ葉のサラダですよ。ドレッシングをかけて召し上げれ」

テーブルの中央に大きなサラダの入った皿が置かれる。

「そしてトーストエッグです！」

カリッと芳ばしく焼いたトーストの上にとろりと半熟の目玉焼きが乗せられる。

「まさかこの料理の中に混ぜてる、なんてことは……」

「ありえないねえー……。第一、あんな強力な秘薬が混ぜてれば魔力で気付くよおー」

「どうしたんですか、お姉さま？」

アリスは屈託のない表情で二人に尋ねる。

マリスとイリスは顔を見合わせて笑うと、スープをすすずすとすすった。

朝食を終えると、アリスは薬を売りに街へ出かけてしまった。

そんな午前をマリスとイリスはのんびりと過ごす。

「今日は尾行しなくていいの？」

「雛女を行かせたよおー。あっちは雛女に任せるとして、こっちはこつちでやることあるからねえー」

マリスはそう言うと、遠慮なくアリスの部屋の扉を開いた。

「ちょ、ちよつとマリス！」

「お邪魔しまーす」

マリスは特に気にした風でもなく部屋の中へ入っていく。その後をイリスが追いかけた。

「ちよつと！ いくら姉妹でも勝手に部屋に入るのは……」

「ふふーん、細かいことは気にしなーい」

他人の部屋が物珍しいのか、マリスは棚に並べられた薬の材料を覗き込んだり、本棚に収められた書物のタイトルに目を走らせたりしながら作業台へと向かう。

「それに、アリスがそんな貴重な材料を放置してるわけが……」

「あつたよおー！」

「ええッ！？」

マリスは作業台の上に置かれたフラスコを指差す。

「強力な水の魔力を感じるよおー。姉さまも感じるでしょう？」

「ええ……。間違いなくこれだと思うけど……」

二人はフラスコを覗き込む。昨日見たときは透明な水のような液体だったが、今は薄い透き通るような青の液体へと変わっている。

「マリス、何の薬かわかる……?」

「これはねえ……。なるほどねえ……。そういえば今日はアレだっただけなあ……」

マリスはしばらく薬と睨めっこしていたが、やがて顔を上げる。

「わかんない」

「今、なるほどねって言わなかった?」

「知らにゃーい」

マリスは鼻歌を歌いながら部屋を後にする。

「ま、アリスが帰ってくればわかるんじゃない?」

「本当にわからないの?」

「にしし、わからないものはわからないんだよおー」

わからない割にはやけに上機嫌なマリスにイリスは疑問を覚えたが、イリスにはその薬の正体がわからない。マリスもわからないと言っている以上、追及しても無駄だと思った。

「ったく、しょうがないわね……」

「にしし、すっかり忘れてたなあ……。アリスはマメでいい子だなあ……」

「?」

マリスは後ろ手を組みながら部屋を後にする。

「姉さま、あたししばらく部屋に籠るよおー。覗いちゃダメだよおー?」

「いきなりどうしたのよ?」

「ヒ・ミ・ツウー」

マリスは部屋に入ると鍵をかけてしまった。イリスはため息をついた。自分だけ除け者にされているような気分で、イリスはがっかりした。

「ま、しょうがないわね……。あー、なんかやな気分」

イリスは大きく伸びをすると、自分の部屋へと向かった。

夕方になり、アリスは葉売りを終えて店仕舞のしたくをしていた。
「妹！ 妹！ マリス様からの言伝です！」

そんなアリスの元へと雛女は飛んでいく。

「あら雛女さん。どうしたんですか？」

「実はですね……」

雛女はアリスに言伝の内容を伝える。

「もちろんわかってますよ！ これから帰りにパン屋さんに寄って
いこうと思つてたところなんです」

「これ、マリス様から預かってきました」

そういうと、ずっしりとした袋をアリスに渡す。

「まあ、マリスお姉さまつたら、もう！」

「せつかくだから派手にしろ、とのことです」

「わかりました。雛女さんもお手伝いしてもらつていいですか？」

雛女は渋るような表情を浮かべていたが、やがて首を縦に振る。

「マリス様からの命令ですから……」

「あはは、お願いしますね！」

やがて日は西に沈み、月と星が空を支配する時間となった。

アリスはなかなか帰つてこない。マリスは部屋に籠りっぱなし。

イリスは食糧係がいなくてお腹が空いた。彼女はじたばたしながら
缶のクッキーをかじって妹達が戻ってくるのを待っていた。

「ただいまですー！」

「飯いーッ！」

アリスが帰ってきてイリスの第一声がそれだった。

「マリスつたら朝からずっと部屋に籠りっぱなしだし！ 仕方ない
からお昼にポトフを作ったらちよつと失敗して真っ黒になるし！
だからずっとクッキーしか食べてなくてお腹空いたのよ！」

「あはは……。大変でしたね」

アリスは乾いた笑いを浮かべる。確かに彼女だけでは昼食もまともにとれないだろう。

「ところで……。その大荷物、何？」

「え、これですか？」

アリスは両手に布袋パンパンに詰め込んだ荷物を持っていた。後ろについてきていた雛女も一つ袋を持たされている。

「えへへ、秘密です。ささ、姉さまはもう少しだけ部屋で待っていてくださいな。すぐに美味しい料理を作りますから！」

「えー、まだかかるの？ 簡単なものでいいからパパとできるものにしてよ」

「そういうわけにはいきません！ 今日特別ですから！」

そう言うときアリスはイリスを部屋に追いやる。

「言っとくけど、私三十分しか待たないから」

「もう少し待ってもらえると助かります……」

イリスは不満な表情を浮かべて自室に入った。

「あー、お腹空いたあ！」

彼女はベッドにどさりと倒れこむ。

「お腹が空いたときは寝てごまかすのが一番ね」

そう決め込むときイリスは目を瞑った。

お腹が空いてたまらなかったが、すぐに眠気はやってきた。

イリスは眠りの波に意識を飲まれていった。

「イリスお姉さま！ 準備できましたよ！」

「にははは、お昼はごめんねえ……。つい夢中になっちゃってさあー」

イリスは部屋の外が騒がしいので目が覚めた。時計を見ると、彼女が部屋に入ってからきつちり三十分しか経っていない。本当にアリスは三十分で仕上げたのだろうか。

「やっとご飯にありつける……」

イリスはフラフラしながらドアノブに手をかけ、扉を押した。

「お姉さま、おめでとうございますー！」

「にははは、おめでとぉー！」

「……え？」

ダイニングはちょっとしたパーティ会場となっていた。

魔力のこめられたロウソクが部屋のあちこちを様々な色で飾っており、色とりどりな紙のテープが天井を駆けめぐっている。

「これ……何？」

「何言ってるんですか！ 主賓はどーんと構えてくださいよー！」

「にははは、もしかして姉さま、忘れてる？」

アリスとマリスに手を引かれて、イリスはテーブルへと連れていかれる。

「え、え？」

マリスとアリスはクラッカーを手に持つと、紐を引いた。

パンと小気味のいい音とともに紙テープと紙片が飛び出す。

「お誕生日おめでとうございますー！」

「にははは……あたしもアリスが“アレ”を作ってるのを見るまで忘れてたよぉー……」

「え……誕生日？」

仔牛のロース、トマトのクリームスープ、魚介類のサラダ、それからグリーンピースのハム炒めと様々な料理が狭いテーブルに並べられている。

「あ、そういえばそんなもんもあつたかしら」

「にははは、姉さま自身が忘れてちゃ世話ないよぉー」

アリスはヴェルモットのボトルを取り出すと、グラスに三人分注ぐ。

「さ、座ってくださいー！」

アリスはイリスを椅子に座らせると、自分も椅子に座った。続いてマリスも席につく。

「それではあー、不肖ながらわたくしマリスが乾杯の音頭をとらせていただきますーす」

マリスはグラスを高く掲げる。アリスもにっこり笑ってグラスを掲げた。

「それじゃあ……」

イリスもグラスを掲げる。

「お姉さま、お誕生日おめでとーございませう！ かんぱーい！」

「かんぱーいです！」

「え、えつと……とりあえず、かんぱーい！」

三人は食前酒を胃に流し込むと、魚介類のサラダを皿に取り分ける。

「わ、これ美味しい！」

「マリスお姉さまったら奮発して私に50ゴールドも持ってきたんですよ！ だから、ちよつと今日は贅沢して美味しいお店で材料を揃えちゃいました！」

三人は次々皿を空にしていく。どれもこれも美味しい料理ばかりで、三人の手は止まらなかつた。

「ふう……美味しかったわ」

「まだまだこれで終わりじゃないですよ？」

そう言つてアリスが取り出したのは大きなケーキ。白い生クリームと赤いイチゴで彩られたデコレーションケーキだ。

「じゃあマリス姉さま、ランプ消してもらえますか？」

「おっけー！」

マリスは口早に呪文を唱える。すると、部屋を明るく照らしていたランプが全て消え、部屋の中は小さなろうそくだけが灯っていた。マリスはろうそくをケーキに立てると火を灯した。

「じゃあ私が思いを込めて歌います！」

アリスは大きく息を吸い込むと、美しい声音で歌い始める。

「This is a bonanza year This

is a bonanza year I will work

for the welfare of my sister
This is happy birthday Let me
wish you a happy birthday

その後をマリスが継いで歌う。

This is a pleasant year This
is a pleasant year I wish you
a happy birthday This is h
appy birthday Let me wish you
a happy birthday

そして二人の声が重なり合う。

「Let me wish you a happy birt
hday Let me wish you a happy
birthday Happy birthday to yo
u」

「二人とも……ありがとう！」

イリスは大きく息を吸い込んでケーキの上に並ぶろうソクの火を
吹き消した。

ぱちぱちとマリスとアリスが手を叩く。

「お姉さま、お誕生日おめでとーございます！」

「姉さま、誕生日おめでとー！」

マリスがぱちんと指を鳴らすと、再びランプが部屋を明るく照ら
す。

「さ、ケーキ取り分けましょうか！」

アリスはケーキを六等分すると、一番大きいケーキをイリスの皿
によそった。

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

三人にケーキが分けられると、彼女達はケーキを食べ始める。

「んー、いいねえこのケーキ。どこで買ったのぉ？」

「パン屋さんのシャトレーズ商店のところで焼いてもらったケーキで

す。特注品ですよ！」

「あー、シャトレーズ商店のケーキは美味しいよ。あそこは一級品だねえー」

「これは……イチゴとモモ？」

「当たり前です！」

三人は残りのケーキも平らげるとひとまず紅茶を淹れる。

「さーで、それじゃあプレゼント贈呈といきましょうかあ！」

マリスは一度部屋に戻ると、一本の棒を持って戻ってきた。

「じゃーん！ 姉さま用に微調整したスタッフだよおー。姉さまの魔力の質に合わせて高出力魔術も余裕で耐える高耐久、そして強力な魔力をさらに増幅できる高出力仕様のスペシャルバージョンだよおー！ ちなみに材はとねりこ製で、芯にフェニックスの尾羽を入れた超高級品！ 大事に使ってねえー」

そう言つてマリスはスタッフをイリスに手渡す。

「ありがと！ でも私そんなに魔術使わないしな……」

「それはこれからびしばし教えていくから覚悟してねー！」

そして続いてアリスの番である。

「マリスお姉さまのプレゼントに比べたらちよつと地味ですけど……私はこれです」

そう言つて彼女が差し出したのは今朝アリスの部屋の作業台の上に置いてあつた青い薬の入ったフラスコだった。

「これは……？」

「“ウンディーネの涙” っていう貴重な秘薬を使って作った靈薬で、^{エリクシル}神髓つていうお薬です」

「神髓……？」

「効果は飲んでみればわかると思います」

アリスはフラスコをテーブルの上に置く。

「ささ、姉さま。ぐぐつといつちやつてえー！」

「え、ええ……」

イリスは半信半疑だったが、その薬の栓を抜くと、一気に飲み干

した。

「こ、これは……?」

「ふふふ、あたしのプレゼントもこれで生きるといふモノだよー」
マリスはニヤニヤとした笑みを浮かべる。アリスは少し不安そうな表情を浮かべてイリスを見つめる。

「ちゃんと……効いてますか?」

「えっと……何か変なのはわかるんだけど、何が変なのかわからないわ……」

「にしし、姉さま、火起こし（イグナイト）でこの紙燃やしてみたいー」

そう言うと、マリスは一枚の紙を指で挟んでぴらぴらさせる。

「え、でも……危くない? だって私の火起こしじゃマリスの指まで燃やしちゃうかも……」

「大丈夫だから、ねえ?」

「……わかったわ」

イリスはさっそくもらったスタッフを手に持って構えると呪文を唱える。

「えい!」

紙から一筋の火が立ち上る。だが、それは紙の先端だけを焦がし続け、マリスの持つている部分には少しも燃え広がらない。

「え、ええ!?!」

「姉さま、意識を集中してねえ? 持つてるこっちもちよっと怖いんだよお?」

「わ、わかったわ!」

イリスは燃え上がる火に意識を集中させる。

マリスの指を燃やさないように、そして火が消えないように維持させる。今までこんなに器用な調整ができなかったのに、イリスは見事炎を操ってみせた。

やがて火は紙を燃やし尽くして消えてしまう。だが、マリスの持つていた部分はわずかたりとも燃えていない。

「え、ちょ、これってどういうこと！？ あんなこと、私できなかったのに……」

「神髄はですね、服用者の魔力コントロール精度を高める効果があるんです」

「つまり、魔術を細かく操る精度を高める効果があるってわけえー。あたしやアリスが飲んでもそんなに効果はないと思うけどお、魔力はたっぷりあっても魔術を上手く使いこなせない姉さまにはぴったりの薬なんだよおー」

「私……魔術が上手になったの……？」

「ま、早い話がそういうことだねえー。薬が効いてる間に練習して魔力を上手く扱えるようになればおっけーってことだよおー」

「高級な材料を使うだけあって、効果時間はとても長いです。ゆっくりで構いませんから、魔力コントロール技術を身に付けてくださいね」

「私の……魔術上達のため……？」

アリスとマリスはにっこり笑った。

「明日からびしばし鍛えるよおー！」

「イリスお姉さま、頑張ってくださいいね！」

イリスはスタッフをぎゅっと握りしめる。

「二人とも……ありがとう！」

こうして、ちょっと特別な一日は幕を閉じた。

イリスはちよつとしたワクワクを胸に秘めながら、マリスからもらったスタッフを壁に掲げる。

「私が魔術……かあ……！」

ドキドキでイリスはなかなか寝付けなかったが、ベッドの上で横になって目を瞑っているうちに自然と眠気がやってきた。

彼女の見た夢は、様々な魔術を見事に使いこなす、そんな魔法らしい自分が活躍する夢だった。

9 アリスと祝事（後書き）

とある祝日の昼頃、その少女は彼女らの元を訪れた。

いかにも魔女というような服装、そして胸元に輝く金色の太陽と銀色の月が交差する紋章を象ったバッチ。

そんな彼女が平和な昼下がりに少しの騒乱をもたらすことになるとは、誰も思いはしなかっただろう。

次話、10 マリスと来客

10 マリスと来客

第十話

「ここがああの黒魔術師、マリス・トリリスの根城ね……」
黒いローブ、黒のトンがり帽子、そして帽子のつばから覗かせる
ツインテールの金髪。ローブの襟には金色の太陽と銀色の月が交差
する紋章が輝いている。

霧の漂う深い森にその少女は一人たたずんでいた。
彼女の前にはこじんまりとした小屋がある。名声の割に小さな小
屋に住んでいるな、と彼女は思った。

「ああ、油断しちゃダメよ！ ここは気を引き締めていかないと！
ぱしん、と彼女は自分の頬を叩いた。
腰からワンドを抜き、その先端でその扉を力強く叩いた。

「たのもー！」

なんでもない祝日の昼頃、その来訪者はあつた。

今日は薬屋もアトリエ商店も店を閉じている。アリスは久しぶりの
休日に羽を伸ばしていたところだった。

「あら、誰かしら？」

イリスが顔を覗かせる。こんな森の奥までやってくる者はほとん
どいない、と言っても等しかった。

「私、出ますね」

アリスはぱたぱたと慌てながら扉の方へと向かった。

「はい、どちら様ですか？」

彼女は力のかけ具合を間違えて、ドアを思い切り強く開けてしま
った。扉の向こう側で何かに激しくぶつかるような音が響き、声に
ならない悲鳴が聞こえてくる。

「ッ！ さすが悪名高いマリス・トリリス。先制攻撃を仕掛けてくるなんて……油断してたわ」

「あの、大丈夫ですか？」

「ひッ！？ あ、えつと、あなたがマリス・トリリス？」

扉の向こうには黒装束を身にまとった小さな少女が立っていた。小さな体とは対照的に背の高い黒のトンがり帽子、漆黒のローブ、そして襟元に輝く太陽と月が交差した紋章。手には一本のワンドを持ってのことから、彼女が魔術師であることがうかがえた。

歳はこの家で最年少のアリスよりも年下だろうか。まだ幼さの残る顔つきをした少女は眉間に皺を寄せながらアリスを見上げる。

「あ、えつと、ぶつけちゃってごめんなさい。私はアリス・トリリスです。マリス・トリリスは私の姉ですが……」

「あ、アタシは“三星の魔女”、リースドール・プラネタリア、王宮魔術師よ。三星の魔女といえばあなたも知っているで」

「ごめんなさい、私、あんまり王都の方には行かないので、王都で有名な魔女さんの名前とか知らないんです……」

「ッ！ これだから田舎モノは困るわ！ まったく、王都からここまで来るのにどれだけ時間がかかったと思っているのよ！」

「は、はあ……」

いきなり初対面のリースドールに怒鳴られて、アリスは少し恐縮する。とはいっても、相手は小さな女の子だ。そこまで怖くはない。「田舎には客をいつまでも玄関口に立たせてるっていう風習でもあるのー？」

「あ、すみません……。それじゃあ、ひとまず中に入ってお茶でもどうぞ……」

どんと足を踏み鳴らしながらリースドールは中に入る。

「あら、可愛いお客さんね」

「ッ！？ あなたがマリス・トリリス！？」

「いいえ、私はアリス・トリリス。マリスの姉よ」

「はあ……。いきなりびっくりさせないで……。まったく油断した

あ……」

リースドールは勝手に椅子に座ると、どんとワンドをテーブルに叩きつける。

「紅茶！ アールグレイで角砂糖三つとミルク二つ！」

「あ、はい、ただいまお持ちします！」

アリスは台所へと駆け込んでいく。イリスはリースドールの正面に座ると、にこにことした笑顔を浮かべながらリースドールに話し掛ける。

「あなた、お名前は？」

「リースドール・プラネタリア！ 史上最年少、齢八歳で王宮魔術師の資格を得て、“三星の魔女”の二つ名を持つ天才魔女といえばアタシのことよ！ これ、見える！？ 王宮魔術師の証の太陽と月の交差する紋章のバッチ！」

びしりとリースドールはローブの襟を引っ張ってそのバッチを見せつける。だが、イリスは首を傾げて

「ごめんね、リースちゃん。私達、田舎の出身だから王都で有名な魔女のこととかあまりよく知らないの」

「ッ！ まったくどうしてこうも揃って皆無知なのかしら！ 王都ではあんなに有名なのに！ それにリースちゃんって何よ！ 馴れ馴れしく呼ばないで！」

「リースちゃん、紅茶できましたよ。角砂糖三つとミルク二つでしただね」

「だからなんでここの姉妹は揃って私をちゃん付けで、しかも許可なく愛称で呼ぶのかしらッ！」

アリスはにっこり笑ってティーカップと受け皿、そしてティースプーンを置いた。そして角砂糖を三つ積み上げ、ミルクポーションを二つ添える。

リースドールは角砂糖とミルクポーションを乱暴にカップの中に入れてぶちまけると、かちゃかちゃと音を立ててカップの中をかき混ぜ、カップを口に運ぶ。

「ッ!? 熱過ぎ! 火傷しちゃうじゃない!」

「あ、ごめんなさい……。紅茶は98度以上じゃないと茶葉が開かないので……」

アリスは自分よりも小さな彼女にペコペコと謝る。

「なんか騒がしいねえー。誰か来たのぉー?」

すると、マリスがあまりの騒がしさに自室から出てきた。

「あなたは……いえ、ちょっと待ちなさい。“ア”リス、“イ”リス、と来たからあなたは……“ウ”リス・トリリスね!」

「マリス・トリリスだよ……。誰、この子?」

その名を聞いてリースドールは顔が青白くなった。

「ええ!? いかにもこのやる気のなさそうな女が!? こんなちんちくりんがああマリス・トリリス!」

「そうだけども……人に名を尋ねるときは自分から名乗るのが礼儀つてもんじゃない?」

「そうね……。幾度となく王宮から依頼を受けたあなたならアタシのことを知っているわよね?」

「……?」

リースドールはどん、と椅子の上に立ち上がるとワンドを腰に差し、声高に名を告げた。

「アタシの名はリースドール・プラネタリア! 王都でも有名な三星の魔女とはこの私のことよ」

「リースドール……リス……ああ、思い出したぁー」

「ふっ……。私の名声も、こんな田舎にまで届くように……」

「コレが史上“最小”王宮魔術師として名高いあのリースドールかぁー」

「史上“最年少”よっ!」

「クソ生意気で、泣き虫で、ちょっとおバカで、そのくせ片意地だけは張ってて、プライドだけは異常に高くて、けれども二つ名を拝命するときにもっとカッコいいのにしてくれて泣いて駄々をこねたって有名なあのリースドールでしょぉー?」

「い、いちいちうるさいわねッ！ 何よ！ 文句あるの!？」

「く、くくく……。まさか本物を見られる機会があるとはなあー」

マリスは腹を抱えて笑い転げる。

「で、黒魔術師に自分の本名をうつかり教えちゃったおバカなりー
スちゃんはこんなド田舎までなんのご要件でえー？」

「ッ！ 油断したわ！ そうだった……。こいつ黒魔術師だったあ
ッ！」

黒魔術師に本名をバラすことは餌食にしてください、と頼みに行
っているようなものである。黒魔術の中には相手の名前を媒介に発
動する魔術も存在するからだ。

「にはは、まあ私は呪いかけるとかは専門外だからねえー。そ
の点に関しては安心していいよおー」

「それよ！ それがアタシは気に入らないの！ 黒魔術師でありな
がら、人に呪いをかける依頼をことごとく断るその態度！ 魔術師
は自らの本分を全うするべきよ！」

「いやあー、あたし世の中を面白くするのが目的で黒魔術を学んで
るからさあー。ぶっちゃけ、呪いなんかかけても愉快にならないし
いー、それどころか悲しい気分になっちゃうでしょおー？ だから
そういう依頼は全部断ってるんだよねえー」

「そのハチャメチャな魔術を学ぶ態度！ 同じ魔女の血を引く者と
して情けなくなるわ！」

「んー、トリリス家の魔女は皆そんなモンだからねえー。興味ある
分野を学ぶべし、人を傷付ける魔術を学ばな。この二つが我が家の
信条だからねえー」

「こんなのがいるから……。この、恥辱の血を引いた泥まみれの魔
女」が！

ダン！ という似合わない音が小屋の中に響く。彼女の言葉を聞
いて、マリスは思い切り壁に拳を叩きつけていた。

「今、なんだった？」

それは普段の彼女からは想像もできないほど冷たい口調。リース

ドールはそんな彼女の様子を見て、冷や汗を浮かべる。

「え、えつと……“ 恥辱の血を引いた……泥まみれの……魔女……”？」

だが、強情な彼女も引くわけにはいかなかった。なんとか先ほどと同じ言葉を繰り返す。

「……トリリス家への侮辱は私が許さないよ？」

「あちゃー……。地雷踏んじやったわね……」

イリスはやれやれ、というような表情を浮かべる。

アリスもそんな静かに怒る姉の様子に恐れをなしたのか、恐怖を表情に浮かべて一步下がる。

「ふ、ふん！ そんな腑抜けた家訓を掲げているのが悪いのよ！」

リースドールは強気に言い放った。それを聞いて、マリスは舌を打つ。

「子供だからって容赦しないよ？」

「の、望むところじゃない！」

リースドールは腰からワンドを引き抜いてマリスに突き付ける。

「三星の魔女の力、見せてあげようじゃない！」

「……ここで暴れるわけにはいかないね。場所を変えるよ」

何の変哲もない、平和なはずだった祝日は珍妙な来客者のおかげでぶち壊しになってしまった。

そんなこんなで、まだまだこのお話はしばらく続くことになる。

10 マリスと来客（後書き）

マリス達は山の開けた広場へと向かう。

リースドールはマリスに向けて宣戦布告を宣言した。
対するマリスもスタッフを構える。

二人の戦いが始まった。

次話、11 マリスと決闘

11 マリスと決闘

第十一話

高く日が上っている。

空は青く晴れ渡り、雲一つない青空がどこまでも広がっていた。そんな快晴の空の下、マリスとリースドールは対峙していた。

ここは森の更に奥にある山間の荒地。辺りには人もなく、動物も数少ない。この山は化け物が出るということもあって、近づく人はほとんどいなかった。

そんな山間の広場に二人の少女が向き合う。少し離れたところにはアリスとイリスが心配そうな表情を浮かべて立っていた。

「戦いのルールはどちらかが気絶するまで徹底的にボコること！手段は何でもアリ！これでどう？」

「問題ないね」

リースドールは腰からワンドを抜き放つ。

「よいい……どん！」

マリスは素早く腰からスタッフを抜くと、一気に距離を詰める。

「え……？」

そして、大きく振りかぶるとまっすぐにリースドールめがけて叩き下した。

「ちょ、ちよつと！？ あんたホントに魔術師！？ 魔術を使いな

さいよ！」

「手段は何でもアリ、なんでしょ？」

そのまま距離を離さずに続けざまにマリスはスタッフをふる。それをギリギリのところまで避けながらリースドールは荒地を駆ける。

「ッ！ このバカ魔女！ 少しは離れな……さいッ！」

リースドールは懐から札を出すと、それをマリスめがけて投げつけた。

「ふん、こんなもの……」

マリスは常人には聞き取れないほどの速度で呪文を詠唱すると、スタッフを前に突き出した。

見えない壁にぶつかって札の動きが止まる。札は壁に阻まれて爆発した。

「もつと骨のあるのを出してきなよ」

「ッ！ これならどう!？」

リースドールは両手を合わせる。

「陽よ！ 我に力を貸したま」

しかし、呪文を唱えるリースドールへと横殴りにマリスはスタッフを振るった。

「ごぶっ!」

そのままリースドールは横に吹き飛んでいく。

「低速型の詠唱形式なんか使つなよ。そんなんじゃあたしには勝てないよ?」

「し、仕方ないじゃない！ 大容量の魔力を扱うには低速型じゃないといけないんだか」

再びマリスがスタッフを振り下す。リースドールはごろごろと地面を転がって危うく回避した。

「人が話してる最中に攻撃するなバカーッ!」

「油断してる方が悪い」

続けてスタッフを思い切り叩きつける。それをすんでのところでリースドールは回避する。

「ああなったら……マリスは止められないわね……。っと、アリス、大丈夫?」

「幼い頃のトラウマを思い出しまして……ちょっとめまいが……」

「ああ、アレか。アレは確かにトラウマになるかもね……」

イリスは昔のことを思い出す。まだアリスやマリスが幼かった頃、アリスがマリスの大切にしていたおもちゃを壊してしまった。そのことにマリスは怒り、アリスを巨大なクリスタルケージに閉じ込め

てしまったことがあった。

両親が慌てて出てきてケージを外から割ってもらってアリスは助けられたが、アリスにとってはかなりの恐怖だったろう。なぜならそのケージの中には薬の材料用のムカデやらサソリやらが飼育されていたからだ。

「はいアリス、水」

「あ、ありがとうございます……」

アリスは震える手で水の入ったボトルを受け取る。そして喉を鳴らして水を飲む。

「今のアリスはあの子に何するかわからないけど……いざってときは止める準備しないとね」

アリスは相変わらず接近戦に持ち込み、スタッフを振っていた。それをリースドールはギリギリのところまで避け続け、ときには打たれながら逃げていた。

「こ、このお！」

リースドールは四枚の札を自分の周囲に配置する。札が強く輝き、陣が形成される。

「簡易守護結界……」

「ふん！ これで暴力女からの攻撃は届かないわ！」

「ふーん……」

アリスはスタッフで結界に触れる。バチバチという音がして、結界に阻まれる。

「今のうちに……！」

リースドールは高らかに口語の呪文を唱え始める。

「こんなもので私の攻撃を防げるとも？」

対するアリスはスタッフを構えて高速で呪文を詠唱する。守護結界を破壊するための反対呪文。それはわずか数秒で唱え終わり、四枚の札が炎を上げて燃えた。

「三星の一、太陽の力！ 門戸を開きて降臨せよ！ 天星術、

キングスフレア
“王の息吹”！」

リースドールの足元から魔法陣が広がる。それは真つ赤に光り、強力な熱を持っていた。

「天星術……!?!」

二人を包み込むように炎が舞い上がる。太陽の力を借りたその炎は、精霊魔術の火など比類にもならないほどに強力である。リースドールは炎の燃え盛る音にかき消されないよう大きな声で叫んだ。

「ふん！ 三星の魔女の名が冠する通り、アタシの術はその三星すなわち太陽、月、星の力を借りる天星術よ！ たかが黒魔術師にこれが防げるの。」

「ふん。三星の魔女の実力はこんなもんか」

そう、マリスは冷たい声で言い放つ。その声の太陽をかき消すほどの冷たさにリースドールの表情が青くなる。

「ま、負け惜しみなら聞かないわよ!」

「それはどうか、おチビちゃん?」

「ッ！ 太陽の炎よ！ この魔女を食らいつくしなさい!」

灼熱の炎が舞い上がり、マリスの姿を包み込む。

「お姉さま!」

「マリス!」

二人の姉妹も思わず前に出た。物凄い熱量の炎が彼女の体を包み込んだ瞬間、マリスが負けた……いや、死んだとさえ思った。

天星術、それは太陽と月、星の力を借りる強大な魔術だ。天体は精霊など比べ物にならないほどの力を持っており、威力を考えれば最高クラスの魔術であると言える。

「ふん、もう骨も残っていないでしょうね」

そう、リースドールは憐れむような声で言った。彼女が手を振ると、炎は少しずつ勢いを失い消えていく。

炎の中心にはもはや何も残っていなかった。

「マリスお姉さま!」

アリスが飛び出そうとするのを見て、それをイリスが止める。

「アリス! まだあそこは炎のと真ん中よ! 飛び出したらあなた

も焼け死ぬわ！」

「だ、だってマリスお姉さまが！」

「にははは、びっくりさせてごめんよアリス」

その場にいた全員が驚く。さつき確実に彼女は燃え盛る炎の中心にいたはずだった。

「こつちこつち、皆どこ見てるの？」

その広場の一角の巨大な岩の上に彼女は座っていた。

「な……！」

「あんな威力だけのバカ魔術なんて逃げれば一発だよねえ」

そこからマリスは飛び降りる。優雅に着地し、スタッフを掲げた。

「なんであんだ、“王の息吹”から逃げられたの！？」

「にははは……。……誰が教えるか、チビすけ」

マリスはそう冷たく言い切る。

「今のが本気？ あんな魔法程度じゃあたしの本気を出すわけにはいかないね」

「ッ！ その言葉、言ったことを後悔するよ！」

「待っててやるよ。早く本気出しな」

「……アタシの奥義を見せてあげるわ」

リースドールは両の手を合わせる。

「太陽よ！ 月よ！ 星よ！ 我に全ての力を貸したまえ！」

彼女はワンドで自分の周囲に円を描く。そこを中心に三つの円が分離する。

「陽は太陽、陰は月、中立は星！ 攻撃は太陽、防御は月、中立は星！ 能動は太陽、受動は月、中立は星！ 三星の力全てここに降臨し、天の全ての力よここに集まれ！ 天星術が奥義、“日と月の
ロイヤルダイヤモンドリング
邂逅”！」

辺りが暗くなる。太陽が月に覆われる。

「まさか……日食を無理やり作り出したっていつの！？」

イリスは空を見上げて驚く。

空には星が瞬き、そして太陽からはわずかな明かりだけが漏れる。

月と太陽の距離が近いとき、月は完全には太陽の姿を覆いつくさず、ほんのわずかだけ光が漏れることがある。それを人はダイヤモンドリングと呼んだ。

「空に三星全てが揃う日……すなわち新月の日の昼しか使えない術だけれども、威力はあなたの黒魔術なんか比にならないわ！ それに、この術は私以外辺り一帯全てが対象！ どこに逃げようと無駄よ！」

「誰があたしは黒魔術しか使えない、なんて言った？」
「え……？」

彼女の周囲に四本の水晶の柱が浮かび上がる。色はそれぞれ赤、青、緑、黄。それはマリスの周りを漂いながらくると回る。

「何よ、それ。黒魔術でそんな魔術、聞いたことないわよ……！」
「当たり前でしょ？ これ、黒魔術じゃないんだから」

「ッ！ それが何か知らないけど、発動する前に倒せばいいだけのこと！ ダイヤモンドリングよ！ この魔女を今度こそ撃ち貫け！」

空に瞬く星から幾筋もの光が放たれる。それと同時にダイヤモンドリングからも特に太い光の柱が降り落ちた。

何百何千の光はマリスはおろか、この山全域を飲み込むように降り落ちる。

「見境もない、つてのはよくないねえ。何より、この山は私達にとつては大切なものだからねえ。攻撃させないよあ！」

マリスが手を振る。その瞬間、全ての光の柱が向きを変える。それは全てを飲むこむハズだった光が、マリスへと向かっていった。

「な、あんた死ぬ気!？」

「もともと殺す気で使ったんだよね？ それともまさか本気じゃない、とでも？」

「ッ！ 本気よ本気！ あんたなんか粉微塵にしてやるんだから！」

「ぶ、やれるものならやってほしいね」

マリスはスタッフを高く掲げる。すると、不思議なことに光の柱は四筋に分かれると、彼女の周囲に浮かぶ水晶へと吸い込まれていった。

「な……！？」

「なかなかの魔力だねえ。ま、この程度であたしを倒そうってのは甘いけどね」

三星全てから放たれた光は水晶へと吸収されていく。それはわずかもブレることなく、ぐんぐん吸い込まれていく。

「何よ……この魔術は！」

「お母さま直伝の精霊魔術だよお。精霊魔術奥義、“大エリクシルストーン・オブ・ファイロソフイの結晶”。あらゆる魔力を吸収し、四大種へと変換、あたしの魔力へと変える反撃魔術だよ」

徐々に月と太陽がズれていく。やがて空はもとの快晴へと戻り、星もダイヤモンドリングも消失する。

だが、それでもなお四つの水晶は彼女の周りで砕けることもなく回り続ける。

「バカ……な……！ アタシの全力が……すべて吸い込まれた……！？」

「さーて、反撃といこうかねえ」

徐々に回転する速度が早まっていく。それは吸い込んだ魔力を四つの属性へと変換し、解き放つ。

赤い柱からは炎の蛇が、青い柱からは水の一角獣が、緑の柱からは風の龍が、黄の柱からは土の死神が具現化する。それはそれぞれ属性を具象化したエネルギー体。精霊といってもほとんど差支えないだろう。

「さて、これでもまだ抵抗を続けるならそれもよし、降参するなら泣いて詫び……」

「う……ぐすつ……！ ひっく……！ う……うわあああああ
あん！」

突然泣き始めたリースドールにマリスも少し驚く。

「うづう……ごめんなさい、ごめんなさい！ アタシが……アタシが悪かったよぉー……。お願いだからもう……。もうやだぁぁぁ！」
「それくらいにしてあげたら？」

戦いに終止符が打たれたことを確認してか、イリスが前に出て二人の間に入る。

「もう彼女だつて負けを認めたわけだし、それにちゃんと泣いて謝ってるでしょ？ もうそれでいいじゃない」

「……そうだねえ……。ま、これくらいで勘弁してやるかなあー……」

マリスはぱちんと指を鳴らす。四本の柱は砕け散り、四体の化け物も塵となって消えていく。

「そういえばこの子、どうしてわざわざウチまで来たのかしら？」

「そうですね……。とりあえず、ウチに戻ってお茶にしませんか？」

アリスが提案する。それにマリスとイリスも頷いた。

「リースちゃん、戻りましょ」

「……うん」

リースドールはぐずぐずと泣きながら立ち上がる。

マリスはやれやれと肩をすくめる。

「これにて一件落着、かにかぁー？」

11 マリスと決闘（後書き）

さて、部品第三部と同じようにこちらにも内容に関する簡単な説明なんかを書いてみましょうかね。

気付いている方も多いと思いますが、今回登場した天星術は東方のパツチエさんの魔法が元ネタです。

日符「ロイヤルフレア」と、日&月符「ロイヤルダイヤモンドリング」です。

前者は微妙に名前を変えましたが、後者はまんまそのままですね。

ついでに白状すると、大エリクシルの結晶もとある東方同人小説に登場する火水木金土符「賢者の石」を弄ったモノです。

・・・パクリはいかんですね！

東方はステキです。

スペルの名前だけでいろいろと想像をかき立てられますもの。

今後もしいろいろ参考にさせてもらいますね！

・・・別に商用の作品じゃないし、いいよね？

ちなみにリースドールはほーらいのお気に入りです（何

即興で考えた割にいいキャラをしているので、今後も登場しますよ！

・・・本当はアリスとのいろいろ絡みがある予定だったけど、全然登場しない上に全然アリスと絡ませてもらえないガスト君が可哀想です、ハイ。

さて、次回予告ですよ！

戦いを終えた一行はトリリスの小屋へと戻ってきた。

大声でわめくように泣くことはなくなっただが、相変わらずリースドールはめそめそと泣き続けている。
いろいろと試してみるトリリスの娘達だったが、何一つとして効果のあるモノはなかった。

次話、 12 マリスと天才

12 マリスと天才

第十二話

一同はひとまず森の小屋まで戻ってきた。

大声でわめくように泣くことはなくなったが、相変わらずリースドールはメソメソと泣いている。

「ほら、美味しいクッキーあるよ?」

「うん……ぐすつ……」

「あ、リンゴジュース出しましょう!」

「うん……ぐずぐず……」

「あ……特別にあたしのためのおきのケーキ出すよあー」

「うん……ひつく……」

三人はため息をつく。さっきからずっとこんな様子でまったく話を聞くことができなかった。

「ごめんよあー。あたしもちょっとカッとなってやりすぎたよあ……」

……。泣いてばかりじゃあたしも困るからさあー。ね、ほら泣きやんでえー……」

「うん……えつく……」

マリスは再びため息をつく。どれもこれも効果がなかった。

「リース、これを見てご覧ー」

マリスは一本のガラスの瓶と金貨を一枚取り出した。

リースはゆつくり顔を上げる。

「この金貨、どう考えたってこの小さいガラス瓶の口から入らないでしょあー? でもね……えい!」

マリスが金貨をボトルの口に押し込み、そのまま力を込める。すると、高い音が響いて金貨がガラス瓶の中に入った。

「ほら、入っちゃったよあー。すごいでしょー?」

「そんな……そんな子供騙し……ひつく……」

「ちなみにこれ、本物の金貨だよお？」

「ええ！？ ちょっともつたいたないじゃない！」

そこでイリスが反応する。リースドールは相変わらず泣きじゃくるだけ。マリスは三度目の特大のため息をついた。

「姉さまが釣れても……ねえー……」

マリスはガラス瓶をひっくり返してぽんぽん、と瓶の底を叩く。

すると、今度は口から金貨が転がり出てきた。

「ええ！？ 今どうやったの!？」

イリスはマリスから金貨をひつたくとガラス瓶の口に押し当てる。しかし、まったく入る様子がない。

「だから姉さまが引つかかっても意味ないんだけどおー」

マリスは三度目のため息をつく。

「はい、リンゴジュースですよ」

透明なグラスになみなみと満たされた黄金色のリンゴジュースが出される。

「それって黄金畑のリンゴジュース!？」

「そうですよ。本当はお祝い用なんですけどね。この際だから出し

ちゃいました」

「いいないいな！ それ美味しいんだよね！」

「私達もせっかくのお客様が来たことですし、カルバドスを出しちゃいます！」

アリスはグラスを三つ用意し、カルバドスのボトルを出す。

「お客さんがいるのにお酒なんか飲んじゃっていいのおー？」

「お祝いは皆で分け合いますよー！」

「それ……お酒？」

ふと、リースドールがカルバドスに興味を示したのか、顔を上げる。

「はい、高級シードルを数回蒸留して、更に樽で数カ月熟成させた上物ですよ」

リースドールはグラスのリンゴジュースを一気に飲み干した。そ

して、がんとグラスをテーブルに叩きつける。

「アタシにもちようだい」

「え、でもこれ、お酒ですよ……？ 子供にはまだ……」

「アタシだってお酒くらい……飲めるんだから……」

ぶすつとした表情でリースドールは言った。

「注いであげなよー。飲むって言うてるんでしょー？」

「え、でも……」

「いいからいいからー」

マリスはスタツフてこんこん、とカルバドスのボトルを叩く。アリスも諦めたのか、カルバドスのボトルを傾ける。

「はい、どうぞ」

金色の透き通った液体が注がれる。アリスはそれを他の三人のグラスにも注いだ。

「それじゃあ、リースの来訪を祝って」

「「かんぱーい」」

リースドールも少しだけグラスを掲げる。そして四人はグラスを煽った。

「え、これって……」

「アリスこれ……」

マリスはアリスとイリスにめくばせをする。黙ってる、という意味味らしい。

「……美味しい」

リースドールがぼそりと呟くように言った。

「もっと飲みますか？」

リースドールはこくこくと頷く。

アリスは上機嫌でグラスにボトルの中身を注いだ。

金色の液体でグラスが満たされ、その様子にリースドールはうつとりする。

「まだたくさんありますからね。はい、クッキーもどうぞ」

そう言ってアリスはクッキーの入った缶を差し出す。リースドール

ルはそこからいくつかつまんで口に運んだ。

「美味しいですか？」

リースドールは頷いた。その様子にアリスは満足したのか、にっこり笑う。

「ところでリースはどうしてこんなトコまでやってきたわけえー？」

「マリス・トリリスに……勝ちたかったから」

「あたしに？」

リースドールは頷く。

「アタシ、王都でいくつかの仕事を受けたの。でも、どれもことごとく失敗して……その度に、同じ天才でもマリス・トリリスとは違う、って言われたわ。アタシはマリス・トリリスに比べられるのが悔しかったの。だから、マリス・トリリスに……勝ちたかった」

その日々を三人は想像してみる。行く先行く先全てで拒絶される彼女の生活。そしてその度に比較される名前しか知らない別の天才。きつと悔しかったのだろう。名前しか知らない魔女と比較されることが、天才としてのプライドを傷付けられたことが……。

「でも、戦ってみてわかった。マリス・トリリスは……本物の天才よ。アタシなんか比べ物にならない……本物の実力を持った天才」

「そんなことないよおー。リースだって十分天才だねえー。天星術なんて大魔術、あたしには使えないもん」

「でも、あんたはアタシの最大奥義を返してみせた。それだけでアタシの負けは確定よ……」

「んー、わかってないなあー」

マリスはぴんと指を立てる。

「アレの前に既に“王の息吹”を使ってるでしょおー？ 連続で撃つたら魔力だつてすっごい減るだろうしいー、私にはあんな芸当とても無理だねえー」

「その“王の息吹”だって難なく避けて見せたじゃない」

「ああ、あれはハツタリハツタリ。“ダミードール模擬人形”っていう初歩的な騙し魔術。黒魔術の初歩の初歩だよおー」

それを聞いてリースドールはハツとする。“模擬人形”といえば、術者の身代わりを作り出す初歩的な黒魔術である。

「そんな初歩的な魔術に騙されてたんだ、アタシ……」

「にやはは、自分で言うのもアレだけど、あたし“模擬人形”は大の得意だからねえー。“分析”^{ディテクト}でもされない限り偽物だってバレないよおー」

「あはは……アタシ、その“分析”だってマシにこなせるか……」
そのとき、イリスがリースドールの背中をばんばんと叩いた。

「自信持ちなさいよ。ここにもっと初歩の魔術しか使えないおバカな魔女がいるのよ？ あなたなんて十分凄じやない。私十人足してもリースちゃんには勝てないわよ？」

「トリリスの……家系の魔女なの？」

トリリス家といえば王都でもそこそこ名の通っている家系だ。強力な高級魔術を操り、かといってそれに慢心せず、再三の王都からの誘いも断り続け、静かに森で暮らしている由緒ある魔女の家系だ。
「ま、トリリスの娘でもこんな出来損ないが生まれることだってあるんだからさ。ましてやそういう家系の出じやないのに、リースちゃんトリリスの家に勝てるほどの実力を持つているのよ？ マリスみたいな規格外の化け物に勝とうとか、自分の苦手な依頼をこなそうだとか、無茶しすぎ。もっと自分の実力にあったことをしましようね？」

「人のことを規格外だとか化け物だとかヒドイなあー……」

「だって事実でしょ？ こんなに何十種類もの魔術に精通して、なおかつ下手な専門家以上の実力を持つてる魔女や魔術師なんて王都でも何人いるか……。マリスはどう考えてルール違反よ」

「それを言ったら姉さまもルール違反だよおー。トリリスの娘であるにもかかわらず、まともな魔術が何一つ使えないなんてありえないよおー！」

「それ言うな妹よ……」

がっくりとイリスは膝をつく。

「ま、並の天才ならアリスとの勝負がいいとこじゃないかなあー？
あたしはその……化けも……規格外らしいからあ……」
言い直す。化け物は許せなくても、規格外ならギリギリ許容範囲
らしかった。

「え、え！？ 私なんてそんな……」

「アリスも意外と強いよあー？ 専門は錬金術だけど、扱っ精霊魔
術のレパトリーはなかなかのモノ。水の精霊でさえ屈服させられ
る実力の持ち主だからねえー」

「な、なんでそれを知ってるんですか！？」

「にやははー、秘密うー」

二人は狭い小屋の中を駆け回る。

リースドールは思った。最初から比較すること自体が間違ってい
るのだ、と。この魔女は自分の遙か上をいつている。たとえ、“王
の息吹”を使っていなくても、全力の魔力を投入して倒しきれたか
どうか。威力において最上を誇るはずの天星術をもってしても倒せ
ない相手。これは……才能だけの差ではないはずだ。

そう思うとマリスが遠すぎる存在ではないように感じられるよう
になる。途方もない努力を積み重ねてきたマリス。天星術以外はど
うせダメだと諦めて何もしなかったリースドール。リースドールも
努力をすれば、彼女のようになれるのだろうか。

「アタシ、頑張ってみる」

「ほよ？」

「頑張つて、努力を積み重ねて、いつかあんたを追い抜いてやるん
だから！」

マリスはそれを聞いてにっこり笑う。

「若者はそれくらい勢いがある方がいいんだよあー」

「やだ、マリスったらババくさい」

「ふっふっふー。もうあたしは十分歳だよあー」

「ふん、負けないんだから！」

そう言っリースドールはワンドをマリスへ突き付けた。

リースドールが帰っていったから、イリスはこっそりマリスに尋ねた。

「あのカルバドス、何をしたの？」

「にははは、アルコールを抜いて、ちよつと元気の出る魔術をかけただけだよー。やつぱりまだ幼い子供にアルコールは毒だからねえー。成長を阻害するよお。あの子にはもっと大きくなってもらわないとねえー」

イリスは笑いを浮かべ

「ふふ、やつぱりマリスも子供扱いしてたのね」

「まあねえー。でも、あれくらいの子供のためには障害物を取り除いてやるのも大人の仕事だよー」

「ふふふ、大人ってまだあなた二十歳にもなっていないじゃない」

「にははは、まあ細かいことは気にしにゃーい」

一波乱あったものの、今日もおおむね平和なトリリス家の午後であつた。

12 マリスと天才（後書き）

こんばんは、ほーらいです。

最近どうもトリリスを書いてません・・・。

まだ書き溜めはあるのでしばらくは大丈夫ですが、このままだとヤバイですね・・・。

最近はどうもSE大賞に出そうとしてた作品の方に手がいつてしまつて・・・。

早くトリリスも書いてあげないとなあ・・・。

本編の話ですが、やっぱりリリースは楽しそうにはしゃぐ姿が一番似合ってますね。

でも、めそめそしてる姿も可愛・・・ゲフンゲフン。

それにしても老成した少女ってなんかいいと思いませんか！

・・・ババアって言ったヤツ、表出る！

次回予告

アリスはいつも通り薬を売りに街へとやってきていた。

街の通りを歩いているとき、彼女は一人の少女に呼び止められる。

「占い、って興味ないです？」

そんな彼女の一言がまさかこれほどの大事に繋がっているとは誰も予想することができなかった。

次話、13 イリスと占い

13 イリスと占い

第十三話

長い金髪、青いドレスを身にまとい、胸にはオパール宝石の輝くその少女は今日も街へ菓を売りにやってきていた。

「るんるん、と鼻歌を歌いながら軽快なステップを踏む。今日もきつと楽しいことが待っているのだろう。彼女は楽しげな様子で街中を歩いていた。」

「あの……そのあなた」

ふと、アリスは見知らぬ少女に呼び止められた。アリスはくるりと振り向き、その少女と向かい合う。

カールした黒髪を肩まで伸ばし、濃紺のローブに身を包むその少女は、おとなしそうな顔つきをしていた。歳はアリスとそんなに変わらないだろう。

「占い、って興味ないですか？」

「占い……ですか？」

少女はどこか落ち着かない様子で辺りをきよるきよるする。

「私、占い師なんです。でも、本当はここで商売しちゃいけないんです」

「例の許可証……ですか？」

「そうですね……。でも、占いをしてお金を稼がないと生計が成り立たないです。そこであなた、お客さんになってほしいです」

「えっと……私、そんなにお金持ってないんですけど……」

少女はにっこり笑った。

「お金は少しでいいです。私の占いを聞いて、それにお金を払う価値があると思っただらお金をくれればいいです。お客さんになってくれますか？」

アリスは手に持っていた財布の中身を確認する。仮に銀貨一枚支

払っても、まだお昼ご飯を買うお金は残りそうだった。

「じゃあ……お願いします」

「わかりましたです。えっと、生年月日を教えてもらえますか？」

「えーと……王暦1827年7月の12日生まれです」

「ちよつと待つてほしいです……」

彼女は懐から水晶玉を取り出した。その中にふわりと魔法陣が浮かび上がる。

「んー、んんー……今日の運勢です。頭上に注意です。それから商売はあまりうまくいきません。薬を売るときは一人一人のお客さんを大事にするです」

「ええ！？　なんで私がお薬を売っているってわかったんですか？」

少女は微笑みを浮かべる。

「本物の占い師はなんでも見通せるです。ほら、危ないです」

少女はアリスの体をぽんと押した。アリスは少女に押されて数歩下がる。重い薬棚を背負っているのだから、突然押されれば非常に危ない。

「あ、危ないじゃな」

そのとき、上から何かが降ってきて、地面に当たって粉々に砕けた。それは土や花の入った植木鉢だった。

「大丈夫ー！？　怪我しなかった！？」

頭上の二階の窓からおばさんが手を振って大声を出しているのが見える。

もし、少女がアリスの体を押ししていなければ、植木鉢は彼女の頭を砕いたか、もしくは体に当たって大怪我をさせていただろう。

「命一つ儲けたです」

アリスは口をぱくぱくとさせながら少女を見つめる。

「それじゃあお代はいかほどです？」

アリスは財布を開くと、金色に光る金貨を一枚取り出した。

「毎度あり、です」

「あ、ありがとうございます……」

アリスは真つ青な表情で礼を言う。

「それじゃあ、またご縁があったらお会いしましょうです」

黒髪の少女はぱたぱたと足音を響かせながら去っていく。

後には命が助かってほつとしてしているアリスだけが残された。

「で、商売はどうだったの？」

アリスはその占い師の少女の話を姉達に語って聞かせた。

「その子の占い通り、商売はあんまりうまくいきませんでしたね…

…」

マリスはアリスの話を聞いて唸りながら答える。

「んー、生年月日を聞いてくるってことは占星術かなあー。それだけ正確に予知してみせるってことは相当の使い手だよあー。それだけの実力があればきつと王宮とかに行けばお抱えの占い師として雇ってもらえるだろうねえー」

「でも、あの子は決まった場所にお店を出すこともできないくらいですし……」

「そこんとこちよつと引つ掛かるなあー。何か理由でもあるのか、それともペテンかあー……」

「でも、私が薬を売っていることを当ててみせましたし、頭上に注意、だって……」

マリスはぴんと指をアリスへ突き付ける。

「可能性として考えられるのは二つうー。本物の占い師か、おばちやんと組んでペテンをしたか、かなあー。薬を売ってることはアトリエ商店に行ったことがあればわかるからねえー」

「でも……嘘をつくような子じゃなかったですよ……？」

「アリスのそついうところを見抜く目は確かだからね。案外本物の占い師かもよ？」

イリスが口を挟む。確かにアリスは抜けているところがあるが、人を見る目は確かである。

「その子の名前は聞いたあー？」

アリスはうーん、と唸って考える。

「そういえば名前、聞いてないですね……」

「あたしもちよっと占ってもらおうかなあー。実際に見れば本物かわかるしいー」

マリスは立ち上がったって部屋の中を行ったり来たりする。

「どうやって会うんですか？」

「アリスが会った場所らへんをうろついて探すしかないかなあー」

ま、とりあえず明日行ってみるよあー」

イリスは紅茶のカップを傾けて

「ま、ほどほどにね。またこの前みたいに逆にやつつけて泣かせないようにね」

「む、姉さま人聞きの悪いー。まるであたしがペテンを暴きに行くみたいじゃない」

「どうせそのつもりだったんでしょ？ ま、私は止めないけどさ」

イリスは紅茶の香りを楽しみながらカップを傾ける。

「ま、ともかく行くだけ行ってみるさあー」

翌日、アリスとマリスは昨日少女と出会ったバロック通りの近くをうろついていた。少女がこの辺りで商売をしているのならば、またここに来ている可能性があるからだ。

「あ、いましたよー！」

アリスが指を差す。そこには昨日出会った黒髪の少女がいた。

「こんにちはー」

「あ、昨日のお客さんです」

黒髪の少女はすぐにアリスの呼びかけに気付き、アリスの方へとやってきた。

「昨日はありがとうございます」

「いえいえです。私の仕事は人を幸せにすることです」

少女はにこつと可愛らしく笑った。

「そのついでにもう一人幸せにしてほしい人がいるんだけどおー」
マリスは二人の間に入る。

「私はこの子　アリスの姉のマリス。私も占ってほしいんだよねえー」

「お客さんです?」

「うんうん、今度請け負う仕事の成否なんだけど、頼めるかなあー?」

「お任せくださいです。生年月日を教えてください」

「あたしの生年月日はねえ……王暦1826年5月の10日だよお

ー」

「はい、あいわかったなのです」

少女は水晶玉を取り出し、小さな声で呪文を唱えた。すると、魔法陣が浮かび上がってくる。

「んー、んんー……そのお仕事は成功しますです。さすが天才魔女、マリス・トリリスです」

「おおーう、教えてないファミリーネームまで当てられちゃったねえー」

「本物の占い師には見通せないことはないのです」

マリスは驚きを表情に浮かべながら

「じゃ、本物の占い師に出会えたついでにお名前を拝見してもいいかなあー?」

彼女はくすりと笑う。

「黒魔術師にみだりに名前を教えちゃいけないって母に言われたです。だから、名前は秘密です」

「うーん……ガードが固いねえー。じゃ、これお代に取っておいて
そう言つとマリスは五枚の金貨を取り出した。それを見た途端、
少女は慌てるように言った。

「こ、こんなにもらえないです!」

「まあまあ、こっちは看板が賭かっている勝負を占ってもらっちゃっ

たからねえー。それにいいモノが見れたっていう見物料も含めてかなあー。ま、お近付きの印だと思って受け取ってよあー」

そう言っつてマリスは強引に少女の手に金貨を握らせる。

「それじゃあばいびいー」

「あ、ありがとうございます！」

アリスはペコペコと頭を下げると、先に行つてしまったマリスの元へと追いつく。

二人は完全に彼女の見えないところまで行くと口を開く。

「どうですか？」

「こりゃー一本取られたねえー……。あの子は本物の占い師だよあー。術構築も呪文詠唱もモノホンの占星術。しかも未来を読み取る技術も超一流。こりゃ来月の仕事は期待できそうだねえー」

マリスはニヤニヤと笑いながら雑踏の中を歩く。

「じゃ、あたしは戻るからお仕事頑張つてねえー」

「あ、はい！ お姉さまもお疲れ様でした！」

アリスは大きく手を振つてマリスを見送る。マリスの姿はすぐに雑踏へと消えていった。

13 イリスと占い（後書き）

どうもこんばんは、ほーらいです。

今回は占星術が登場しました。

と、いつても占星術ってあんまりゲームに登場しませんよね。

僕が知ってる作品だと・・・FFTのオーラン様くらいですかね。

まあ、この作品に登場する占星術は割とアレに近いところがありますが。

それにしてもオーラン様の星天停止は強すぎますよね。

敵全体にストップ+ドムブ+ドンアクとか・・・鬼過ぎます。

プレイヤーキャラクターになっただらどれだけ心強かったことやら・・・。

まあ、それはさておき今後もいろいろな魔術がこの作品には登場します。

中には僕が勝手に作った魔術（たとえばリースドールの天星術だとか）なども登場しますので、あまり細かいところは突っ込まないように。

では、次回予告ですよ！

アリスは街で購入した新聞を持って自宅へと帰宅していた。

「石化する人々！ 街全域で流行する謎の呪い！ 大黒魔術師の仕業か？」

マリスは新聞の見出しを声高に読み上げる。

「マリス……ダメじゃない。街の人々に呪いなんかかけちゃ……。

何の実験か知らないけど、迷惑かけちゃいけないのがトリリスの流儀でしょ？」

それを聞いて、イリスは呆れるようにマリスに言った。

マリスはその言葉を大慌てで否定する。

そんなとき、アリスは町長から一通の手紙を預かってきていたことを思い出した。

マリスが封筒を破いて中を読んでもみると、それは案の定、石化に関する依頼の手紙だった……。

次話、14 イリスと石化

14 イリスと石化

第十四話

「お姉さま、新聞持って帰りましたよ」

アリスはアトリエ商店から戻って、街で買った新聞をマリスに渡す。こんな森の奥深くまで届けてくれる人はいないので、自分の手で持ってこなければならぬ。

「ありがと、アリス。さーて、今日のニュースは……？」

マリスはがさがさと新聞を広げる。

「石化する人々！ 街全域で流行する謎の呪い！ 大黒魔術師の仕業か？」

彼女は新聞の一面のタイトルを読み上げる。イリスも横から覗きこみ、記事を読む。

「マリス……ダメじゃない。街の人々に呪いなんかかけちゃ……。何の実験か知らないけど、迷惑かけちゃいけないのがトリリスの流儀でしょ？」

「いやいやいやー、姉さま、コレ、あたしの仕業だと思ってるのぉー？」

「え、だって街全体規模の大魔術なんてあなたくらいしか扱えないんじゃない？」

マリスはぶんぶんと首を横に振る。

「さすがのあたしでもこんなことしないよぉー……」

「あ、そういえば町長さんからマリスお姉さま宛てのお手紙を預かっていたんです」

アリスは懐のカバンから一枚の封筒を取り出す。

「そういう大事なことは最初に言うもんだよぉー」

マリスはびりびりと封筒を破いて中から手紙を取り出す。

「どれどれ……ふーん……」

彼女はうんうんと頷きながら手紙を読む。

「何て書いてあったの？」

「さっそくこの石化の件で依頼だよー。この石化を治し、石化の呪いをかけている首謀者を暴き出して欲しい、だってさー」

マリスは手紙をテーブルの上に放り投げた。

「どんなもんか見ないとわかんないけどお、今回は皆に協力してもらおうかなー。街規模の大魔術となると相手がデカそうだしー」

「任せてくださいー！」

「私なんかで役に立つなら手伝うけど……」

アリスは自信たっぷり、対照的にイリスは自信なさげに言う。

「姉さまは自信持ってほしいねえー。このマリス・トリリスが直々に魔術を教えているんだものー。以前より大幅に魔術の腕だっ得上がっているよー」

イリスはこの前の誕生日の日にスタッフを新調してから、マリスの仕事がない日は彼女から毎日魔術の訓練を受けていた。

「腕の見せどころですね！」

「んー……それでも不安ね……」

「ダイジョブダイジョブー。ま、とりあえず明日実際に患者の元を尋ねてみようかー」

トリリスの三姉妹は翌日、石化した患者の元を訪ねていた。

町長が把握しているだけでも二十二。潜在的な患者も考慮に入れると、それ以上だろう。

ひとまずそのうちの一人の家を訪れてみる。

「二、三日前でしょうか。夫はアトリエ商店に買い物に出かける、と言って出て行ったきり帰らないから、探しに行ってみれば街中で突然倒れたという話を聞きました……。病院へと向かうとすでにこの状態でした……」

男はベッドの上に横たわっていた。マリスは遠慮もせず男の体

に触れてみる。男の体は石のように堅くなっていた。

マリスは腰に差したスタッフを抜くと、素早く呪文を唱えてコンコンと男の体を叩いてみる。

「うーん……低位の解除じゃダメかあ……。アリス、浄化試してみ
てえー。多分あたしより治療系の白魔術はアリスの方が上手だと思
うからあー」

「わかりました」

アリスは白いスタッフを腰から抜くと、男の額の上に掲げる。そ
して、持ってきていたカバンから小さな水晶玉を取り出す。

「水のファミリアよ、我に僅かばかりの力を貸したまえ」

水晶玉から煙が浮かび上がり、魚の形をした精霊が現れる。ファ
ミリアとは、術者が従えた精霊の一種であり、使い魔に近い存在で
あると言える。彼らの力を借りれば精霊の力のない場所でも精霊魔
術を行使用することが可能であり、精霊魔術師ならずとも、精霊魔術
を行使用できる魔術師の多くが所持している。

「浄化の水。穢れなき水。癒しの水。ここに呪いを祓い、魔を遠ざ
けよ」

スタッフの先から泡がこぼれ落ち、男の体を包み込む。

「ダメですね……。これは相当高位の呪いによるものだと思います」

「うーん……。どうも黒魔術っぽくないんだよなあ……」

マリスはうんうんと唸りながら男を見つめる。

「ただの石化の呪いなら浄化ほどの高位の回復魔術で治るのにい
……。これは別の魔術の可能性を考えて当たって見た方がいいねえ……
……。アリスは石化解除の回復薬の調査を、イリス姉さまは……情報
収集を頼んでもいいかなあ？」

「はい、わかりました」

「わかったわ」

「あたしは被害者達が倒れた場所を回って魔術の痕跡がないか調べ
てみるよあー」

患者の妻が不安そうに前に出る。

「あの……夫は治りますでしょうか……？」

「心配しないでいいよおー。何せあたしはこの辺り一帯でも有名な大魔術師だからねえー」

「どーんと任せちゃってくださいね」

三人は一度患者の家を後にする。

アリスは薬の調査のために自宅へ、マリスは被害者の倒れた場所へ、イリスは別の被害者宅へと向かうことになった。

イリスは一人街の中を歩く。

マリスに送られた町長からの手紙を見る限りでは、被害者が住んでいる場所に統一性は無く、街のあちこちで石化した患者が出ている。た。

イリスはそれらの被害者の家を一軒一軒訪ねて回る。

どの家でも被害者は皆、最初の家の被害者同様、体は堅く硬直しており、顔からは生氣を感じられない。

被害者がその硬直した日に出かけた先もそれぞれで、特に共通する事項はない。

「なんにもわかんなかったなあー……」

イリスは一度休憩するためにオーブン型のカフェに入る。街中を歩き回ったために足がパンパンに腫れていた。

今日歩いた場所を調べてみようかと、彼女は街の地図を広げた。そして筆ペンとインクを取り出すと、歩いた道をなぞってみる。

「あれ、そういえばここ何度も歩いたな……」

そうやって道を辿ってみると、彼女はとある共通点があることに気付いた。

被害者の家へと向かうときに何度も通る場所がある。幾度となく歩いた通りで、記憶に色濃く残っていた。

「もしかして……！」

イリスは被害者と被害者が石化した当日に歩いた足跡を地図に記

してみる。彼女は全ての被害者宅で聞いた話を細かにメモを取っていた。

「やっぱり……！」

全ての被害者が通った道筋上に一つの通りが浮かび上がってくる。街のメインストリートの一つである、バロック通りだった。

「あれ……この通りって……」

彼女は数日前の記憶を辿ってみる。どこかでこの通りに関する話を聞いたような気がした。妹達がこのことで騒いでいたような気がする、ということだけは覚えていた。

「とりあえず行ってみるしかないわね」

彼女は地図を畳むと、カバンへとしまつて立ち上がる。

勘定を済ませた彼女はバロック通りへとまっすぐに向かった。

イリスは背中を悪寒が駆けめぐっているのを感じていた。直感的なもので、彼女が母から受け継いだ魔女としての素質の一つである。こういうときの直感が必ず的中する。以前にマリスがアリスをフラスコに閉じ込めた事件でも、直前に悪い予感がしていたのだ。

彼女がバロック通りに到着すると人だかりができている。

「何かしら……？」

イリスは人をかき分け、無理やり進んでいく。頭の中に最悪の予想が浮かび上がっていたが、彼女はそれを考えまいとしていた。

だが、それも無駄な抵抗だったようだ。

「!？」

イリスがようやく開けた場所に出ると、そこには最悪の予想が転がっていた。

マリスが通りの真ん中に倒れている。その周りには観衆の一人が通報したのか、警邏の男が何人が立っていた。

「通して！」

イリスは強引に観衆の中から抜け出ると、マリスの元へ走った。

「こら、君！勝手に入ってきてはダメだろう！」

「この子は……この子は私の妹なの！」

彼女はマリスの傍にしゃがみこむと、必死に肩を叩いて呼び掛けた。

「マリス！ マリス！」

彼女は肩に触れてそのひんやりとした感覚に、氷の棒を背中に突っ込まれたようなショックを受ける。彼女もまた、石化した街の住人と同じ状態だった。

「ッ！ 誰よッ！ こんなことをしたのは誰なの！？」

揺り動かしても無駄だということはわかっていた。けれども、彼女はそうせずにはいられなかった。

ごとり、という重い音がして彼女の顔が上を向く。その顔にははつきりと驚愕のようなものが刻まれていた。

「マリス……どうしてマリスが……」

トリリスの娘の中の一番の実力者がこうも簡単にやられたのだ。相手は相当強力な魔術の使い手であることは間違いない。

そこでイリスはマリスの手に何かが握られていることに気付く。ぎゅっと握られていたが、イリスは強引に引っ張り出す。途中で紙は破れてしまったが、なんとか引きずり出すことに成功する。

「エー、エス、ティー、アール……？」

何かの頭文字だろうか。真相は破れて彼女の手の中に残った紙にあるかもしれないが、手はしっかりと握られていて、開くことはできなかった。

「君は彼女の家族の人かな？」

警邏の男の一人が優しく問い掛ける。イリスはゆっくりと頷いた。「話を聞かせてもらっていいかい？」

「ええ……」

イリスは短く告げる。マリスは警邏の男達の組んだ担架に乗せられた。

マリスの住居が森の奥深くであることを告げると、そこまで搬送

することはできないため、一時的に街の病院へと収容されることになった。

イリスは物言わぬマリスの傍にずっと付き添いながら、警邏の男に事情と彼女が今までわかった石化事件に関する話を話し続けた。

14 イリスと石化（後書き）

どうもこんばんは、人によっては六度目の挨拶ですね、ほーらいです。

あのマリスがついに倒れるときがやってきました。

マリスは確かに天才ではありますが、無敵ではないというエピソードですね。

完璧な人間でも、一つくらい欠点があつたっていいじゃない、人間だもの。

まあ、彼女は魔女ですが……。

というわけで、前話にはあまり出てきませんでしたが、サブタイにもなっている通りこの一連のエピソードではイリスが主人公となっております。

この先、マリスがいなくてもこの石化事件を解決できるのか……！それは彼女の双肩にかかっています。

そして、この石化事件はただの大きなうねりの序曲でしかありません。

いかにして、トリリスの娘達は事件の奥に潜む大きな禍々しい凶事に立ち向かっていくのか！

それはこの作品を読み続けてくださる皆様だけがわかります。では、次回予告です。

すっかり憔悴しきった様子でイリスは帰宅した。

だが、すでに夜も遅いというのに小屋には明かりがついていない。彼女の脳裏に最悪の予想が通り過ぎる。

次話、 15 イリスと運命

15 イリスと運命

第十五話

イリスは傷悴した様子で森の小屋にたどり着いた。

この家には……マリスがない。

いつも場を明るくしてくれた、あの元気な妹がない。それだけでイリスは目の前が真っ暗になりそうだった。

アリスに伝えることは辛かったが、伝えなければならぬだろう。イリスは小屋の扉に手をかける。

「ただいま、アリス」

ぎいっと音をきしませて扉が開く。小屋の中は真っ暗だった。

「アリス？」

イリスはぱちんと指を鳴らす。ランプに火が灯り、部屋の中が明るく照らし出される。

イリスは懐中時計を取り出した。時間は既に十九時半。アリスならば食事の準備を始めてる時間だ。

薬の調合に没頭しているのかもしれない、という考えは浮かんだ。だが、彼女の胸中をあの日間と同じ不安感と焦りをごちゃ混ぜにしたようなモノが満たしていた。

「アリス！」

イリスはためらうことなくアリスの部屋を開いた。アリスは椅子に座って作業台に向かっていた。

「なんだ……アリス、居たなら明かりくらいつけなさいよ」

そう言う自分の声が乾いているのをイリスは感じた。そう、アリスは作業台に向かって薬を作っているだけなのだ。

イリスは一步一步前へと進み、アリスの肩に手をかける。

その瞬間、指先から氷のような感触が伝わってきた。

「ッ！」

アリスの頬を触れる。それと同時に一筋の涙が頬を伝った。
「嘘……でしょ？」

堅い。まるで石のように。冷たい。まるで雪のように。
イリスはがくりと膝をついた。後から後から止め処なく溢れてくる涙。頬を流れる温かいそれが止まらない。

「ねえ、嘘って言うてよ……。アリス……アリス……ッ！」

イリスはアリスの肩を握った。ゆっくり振り向いて、冗談ですよ、と言って彼女が笑ってくれるのを期待した。けれどもそれは儂い幻想で、夢で、虚構で。

彼女はアリスの座る椅子の裏で小さく膝を抱えて座り込んだ。

「誰だか知らないけど……上等決め込んでくれるじゃない」

イリスはゆっくりと立ち上がる。

「私達をトリリスの娘だと知っての狼藉？ 冗談じゃないわ」

彼女はアリスの向かっていた作業台へと視線を向ける。

ぱちんと指を弾いて部屋の明かりを灯す。

そして、アリスが並べていた本を同時に何冊も開く。

それらは石化に関する本や、白魔術、錬金術に関する本だった。

イリスはこれらの本を同時に紐解く。この何冊もの本の中にアリス達を襲った魔術に関するヒントが載っているかもしれない。そう思うと、イリスは難しい高級魔術に関する書物も難なく読み解くことができた。

「マリスは言っていた。これは黒魔術じゃない、と。そして手に残されたAstrorの文字。アリスの並べている本から答えを導き出せ。Astrorの綴りのある単語を全て抜き出せば答えは自ずと見えてくる」

イリスは何冊もの本を同時に目を通す。それでいて確実に単語を拾っていった。

「またがってAstride, Astral(星のような), Astray(道に迷って)……Astrology(占星術)！」

数日前に妹達は言っていたではないか。占星術で占ってもらった。

そして場所はバロック通りだった、と。

「バロック通りで占いをしている少女がいる。そして、被害者全員がバロック通りを通っている！　そして、占いをしている少女は相応の使い手ってマリスが言ってたわ！」

可能性に過ぎないかもしれない。ただの偶然かもしれない。けれども、十分可能性としてありえる。

証拠はない。動機もわからない。だが、何の光明もなかった今までに比べれば大きな前進だ。

イリスは腰に差したスタッフの感触を確かめると小屋を飛び出した。一分一秒でも早く妹達を元に戻してやりたかったのだ。

鬱蒼と生い茂る草を踏みしめながら、イリスは急いで街へと向かった。

マリス達から占い師の少女の特徴は聞いていた。濃紺のローブに黒のカールしたセミロングの髪。それだけわかればどんな人物か想像はつく。

街に到着したイリスはまっすぐバロック通りへと向かった。

夜遅くだったが、相変わらずメインストリートのバロック通りは人通りが多く、人を探すのは困難なように思えた。

イリスは舌打ちを打つと、一度アトリエ商店へと向かうことにした。

アトリエ商店はバロック通りに店を出している商店だ。すぐに店に入るとガストを呼んだ。

「あれ、イリスさん。どうしたんすか？」

「カールした黒髪、濃紺のローブの少女。探してくれる？」

「え、あ、まあ、いいっすけど……」

ガストは父親に少女の様相を伝える。懇意にしている魔法の姉の頼みということもあって、店の若い衆が何人が駆り出されることになった。

イリスは一度報告を待とう、ということになってアトリエ商店で待つことになった。

その間、イリスは少女のことをガストに説明する。

「つーと、街で頻発してる石化事件の犯人がその占い師の女って可能性があるつつうことっすか？」

「あくまでも可能性ね。会って確認してみないとわからないけど……」

イリスは出された紅茶のカップを傾ける。ガストも対面に座ってお茶菓子をぼりぼりと食べる。

「アリスまでやったってのは許せないっすね……。でも、イリスさん勝算はあるんすか？」

「なくてもやるわよ。トリリスを舐めた報いは受けてもらうわ」

そう、イリスだって立派なトリリスの娘なのだ。妹達の仇を取る資格は十分にある。

「ガストさん。本人ではないですが、その少女の家を知っている、という人を見つけました！」

一人の若い男がやってくる。

「一人で行くんすか……？」

「ええ。もしものときのために……二十四時間経っても私が戻ってこなかったら憲兵隊に連絡してくれる？」

「了解っす！」

イリスは深紅のスタッフを腰から抜いた。今はマリスが作ってくれたこの杖と、アリスが調整してくれた神髄がとてつもなく頼もしく感じる。

彼女は男が連れてきた女から少女の住んでいる場所を聞き出すと、まっすぐに向かった。

その場所は街の裏通りのヘルズ通りにあった。

街の中でも特に治安の悪いその場所にその少女は住んでいるとい

う。

だが、そんなことはイリスを阻む要因にならなかった。時折いやらしい目つきの男がイリスを舐めるように見たが、彼女から放たれる殺気に身を縮ませる。

目的の場所はすぐだった。イリスはスタッツフで扉を叩く。

「いるかしら？ スタリア・アステリクスさん」

「いますです」

ちよつと間延びした声が聞こえてくる。ぱたぱたという足音が響き、扉が開いた。

扉の向こうには背の低い、カールした黒髪の濃紺のローブを着た少女が立っていた。

「どちらさまです？」

「私はイリス・トリリス。あなたが占ったアリス・トリリスとマリ
ス・トリリスの姉よ」

「トリリス……ああ、この前の人です！」

黒髪の少女 スタリアは思い出したようで、ぼんと手を叩く。

「そのお姉さまが何の御用です？」

「石化事件のことで話があるの。少しいいかしら？」

それを聞いて少女の表情が変わった。

「……少し散らかっていますが、上がってほしいです」

スタリアはイリスを居間に通す。部屋の片隅には星占いの雑誌が山のように積みあがっていた。

「散らかっていてごめんなさいです。星占いが趣味なんです」

「あなたの趣味のことは聞いてないわ。今すぐ石化した人々を……」

妹達を元に戻しなさい」

「お話には手順というものがあります。少し落ち着いてほしいです
少女はいそいそと台所へと向かい、お茶を用意する。

「はい、どうぞなのです」

「いらないわ。私がここに来た用事はただ一つ。石化した人々を元
に戻すためよ」

スタリアはそつと椅子に座る。

「あなたがやっつたんでしよう？」

「その質問には……はい、と言うしかないです」

イリスは腰の深紅のスタッフを抜き放った。

「今すぐ戻しなさい！ でないと……私は今にもあなたを攻撃して……」

「話を聞いてほしいです！」

スタリアは大きな声でイリスの言葉を遮る。

その迫力に圧されてイリスは一度口を閉じる。

「どこから説明しましょうです……。えつと、私の扱う魔術が占星術であることは知っています？」

「ええ。妹達が騒いでいたわ。あなたが相当の使い手だってこともね」

「私の占星術は完璧です。それは確信を持って言い切れるです。だからこそ、私は視てしまったんです。とんでもない未来を……」

「とんでもない未来……？」

スタリアはこくこくと頷く。

「この街は……いえ、この世界は近いうちに戦乱に飲み込まれるです」

「各国の力が均衡しているこのご時世に戦乱？ ありえないわ」

「けれども、私には視えてしまったんです……」

「そんなの、王宮に言えば回避できるんじゃない……？」

「言いましたです！ 私は元々王宮魔術師だったです！ 王宮が……世界が戦乱に飲み込まれる未来を視て、王宮にその旨を説明したです！ けれども、王宮はそんな未来はありえないと突っぱねたです。私は王宮魔術師の資格を剥奪されたです……」

「それと石化にどんな関係が……？」

スタリアは欠けたカップを手に、ゆつくりと吐き出すように話す。

「私は二種類の魔術が使えるです。一つは星から人の未来を視る占星術。そしてもう一つはその逆、すなわち星によって定められた運

命を書き換え、人の未来を変える星操術です」

「な……そんな馬鹿な魔術があるわけ……！」

そんな魔術が存在すれば、それはもはや魔法と呼べる領域だ。その魔術をもつてすれば全てを自由自在に操ることができる。

「星操術は……まだ不完全です。私には人の運命を書き換える力はないです。けれども、人の運勢の運行を止めることはできます。

それが私の唯一使える星操術……“サブレスター 星天停止”です」

「つまり、あの石化はあなたの魔術で運勢の運行を止められた結果発生したってこと……？」

「その通りなのです」

スタリアはカップを傾ける。

「でも、なんでそんなことをしたのよ」

「それは……この先起こる戦乱によって、私が占った人が死んでしまつのを防ぐためです……」

「死ぬ……ですって……？」

「運勢の運行を止めれば死ぬことはないです。戦乱が終わるまで運勢の運行を止めておけば死なないです。私は……一人でも多くの人を救いたいです！けれども、星操術を使えるのは生年月日を知っている人だけなのです……。だから、私の力だけじゃ少しの人しか救えないです……」

アリスが、マリスが死んでしまう運命にある、ということがイリスは信じられなかった。

「冗談でしょ……？ そんな……あの子達が死ぬなんて……？」

「私が占った人にはことごとく死相が出たです。この戦乱は多くの人々を巻き込んで、多くの人々が死ぬです。変えられない……未来なのです」

スタリアの言葉は重みのあるものだった。イリスにはとても彼女が嘘を言っているように思えない。これはきつと、彼女が見た真実、というモノなのだろう。

「……だったら、その視えた未来、というヤツを変えてやればいい

のよ」

「……え？」

「私の生年月日は1825年8月7日。占いなさい」

「あ、はい、わかったです」

スタリアは懐から水晶玉を取り出す。

「何が見えたかしら？」

「私から話を聞き終わって、傷悴しきつた姿が見えます。まっすぐアトリ工商店に向かい、この事件は解決できない、と男の子に言います。そして、私によって石化させられるです」

「そう。あなたの魔術の発動体はその水晶？」

「そうです」

イリスはスタッフをまっすぐ水晶へと向ける。

頭の中で呪文をイメージし、唱える。

「!？」

イリスのスタッフの先から稲妻が飛び出し、水晶を粉々に砕いてしまった。

「な、何をするです！」

「これでどうやって私を石化させるのかしら？ あなたが魔術を発動するにはその水晶が必要なよね。けれども、私がそれを壊してしまったから、あなたは魔術を発動することができない。よって、私を石化させることもできない。どう、未来なんて簡単に変えられるでしょう？」

スタリアはしばらくの間ぼかんとしていたが、やがてくすくすと笑い出す。

「あなたは強引な人です。こんな方法で……未来を変えた人は初めて見ただす」

「あいにく、私、定められた運命だとか天命って言葉、大嫌いなもの。運命ってのは金魚すくいの網よりも薄いもの、って誰かが言っていたけどまさにその通りなのよ」

イリスはスタッフを肩に担ぐ。そう、彼女はたった今運命を打ち

破ったのだ。

「戦乱、つてのが何なのか知らないけど、そんなものは私が阻止してやるわ」

「あなたを……信じてもいいのです？」

「任せなさい！ 私はあのトリリスの娘よ！ 私達三姉妹が力を合わせればできないことなんてないんだから！」

しばらくスタリアは黙っていたが、やがて意を決したのか、強い決意の表情を浮かべて彼女は頷いた。

「……わかったです。あなたを信じます」

少女は口早に呪文を唱える。

「今のが運命の運行を止めていたキーを解除するワードです。これで皆、元通りです」

「あら、そっちは水晶がなくてもどうにかできるのね」

「つつかえ棒を外すのは簡単なのです」

高級魔術はスタッツや水晶などの発動体が必須だが、強力な魔術師であれば簡単な魔術を発動体なしに発動させることができる。星操術を解く、という魔術はそういう簡単な魔術の一つだった。

「私の占い、初めて外れたです。今のあなたには傷悴しきった様子なんて欠片もないです」

「私は元気だけが取り柄だからね。私が落ち込むときは世界が滅ぶときよ」

スタリアはその言葉を聞いて笑った。

「世界の行方、イリスに任せただす」

「どーんと任せなさい！」

こうして、街を騒がせた石化事件は幕を閉じた。

それは一人の少女が世界を守るためと思っただけで唱えた、運命に抗うための必死の魔術だった。

だが、イリスは目の前で運命をぶち破ってみせることで彼女の意思を変える。

彼女はこの目の前の少女に全てを任せてみようという気になった。
この世界が混沌に包まれるか否かは トリリスの娘達の双肩に
かかっている。

15 イリスと運命（後書き）

・・・こんにちは、ほーらいです。

やっと更新できました。本当にお待ちいただいた皆様、申し訳ありませんでした・・・。

言い訳をすると、とんでもなく長い話になるのであまりしませんが、一つ言うなら忙しかった、ということです。詳しいことは活動報告にて。

このお話から物語は大きく進展していきます。今までストーリー性が乏しかったこの作品に初めてストーリーが生まれてきます。

この先、お話は王都に移ります。

そこで三姉妹を待ち受けているものは何か。戦乱はどうなるのか。

またしばらく更新できませんが、楽しみにしててください。

では、次回予告を。

一行は王都のリースドールの元を訪れていた。

彼女ならば何か王都周りの話に詳しいと思ったからだ。

だが、リースドールも何もわからないと言う。

しかし、彼女は知り合いが何か知っているかもしれないと言う。

「王宮歴史研究家の資格も持つて、頼れる人だよ。しかもカッコよくて優しくて、背も高いんだよね！」

彼女がそう言うと、三人は身を乗り出して言った。

「今すぐ会わせて！」

次話 16 アリスと迷子

16 アリスと迷子

第十六話

「と、言うわけなのよ」

イリスの話聞いていたアリスとマリスは言葉を失って茫然とする。

イリスはスタリアから聞いた話を二人に語って聞かせた。この世が戦乱のある混沌とした世界へと向かおうとしているということ、そしてそれが多くの人間に死をもたらすこと、そしてその中に三姉妹の名が含まれていること……。

「概要はわかったよおー。でも、どうしてそんな戦乱の世になるのかなあー？」

「それはわからないらしいわ。占星術つてもものはあくまでも“人”の運勢を視るものらしくて、未来起こる事件を直接視ることはできないらしいの」

「これといって戦争の火種になるような事件はありませんし……どういうことなのでしょうか？」

「それは戦争を起こす人間を直接視ないとわからないらしいわ。ともかく、それがいつ、どこで、どのように、どうして起こるかわからないと対策しようもないわね……」

「にははー、姉さまもしかして、大変なことを背負い込んだんじゃったんじゃないかじゃー？」

「うう、我ながらちょっと失敗かもと思ってる……」

ぼんぽん、とマリスとアリスが背中を叩く。

「あ、それなら国の動向にもっと近い人に聞いてみればいいんですよー！」

「動向にもっと近い人……？」

「そうです！ たえば……」

「なるほどね、それでアタシのトコまでわざわざ来たのね」

王宮からそれほど離れていない都心部の一角、王宮に仕える者だけが住まうことを許される一等地、そこに住まいを構えるリースドール・プラネタリアの元を三人は訪れていた。

「あの森からここまで来るのは骨だったわ……」

「朝に出発して、途中行商人の馬車に乗せてもらって半日、この街に到着してから更に数時間だからねえ……」

「この街は広すぎます……」

「あはは、これで少しはアタシの苦勞もわかったかしら？」

リースドールはぱちんと指を鳴らす。その途端、台所の方がやや騒がしくなる。

「およ、リースは式神なんか扱えるようになったのお？」

「あれから色々練習してね。とりあえず、生活に便利そうな魔術から身に付けることにしたわけよ」

式神とは東洋の島国で発生した魔術の一つで、自分だけの使い魔を作り出す魔術である。マリスの雛女とは違い、自分の意思を持たないため、術者に逆らったりすることはないが、学習することもない。ただひたすらに術者に忠実な使い魔である。

「まあそれはさておき、戦乱の世ねえ……。今の王は民にも慕われて名君だと言われているし、周辺各国もずっと昔に和平条約が結ばれてからは平和に貿易を行っているだけだし……。とてもそんなことが起こるとは思えないわ。でも、スタリア・アステリスクといえば元王宮一の占星術師。そのスタリアが視たというなら間違っていないとアタシは思うんだけどねえ……」

四人は唸りながら考える。そうしている間に台所からひよこひよこことお盆が飛んでくる。

「お、お盆が飛んでる!？」

「姉さまよくお盆の下を見なよお……」

イリスは飛んでいるお盆の下をちらつと見てみる。そこには人型に切り抜かれた小さな白い紙がせつせとお盆を運んでいた。

「これが……式神？」

「低級だけど、雑用をこなすには十分だねえ……。もっと高位の式神使いにもなると、動物に式を重ねて使い魔にしたりできるんだよおー。ま、あれは式神というより降霊のが近いかもだけだねえー」

お盆がテーブルの上に乗せられる。そして、また別の式神がアイステイーの入ったグラスを四人に配る。

イリスはグラスに差されたストローに口をつける。

「甘あツ!? 何これ! シロツプの原液!？」

「え、美味しくない？」

「ずずずーとリースドールは紅茶のようなものを戸惑うことなく飲む。

「アタシってたくさん勉強するから、甘いものをたくさん取らないと脳がエネルギー不足になるのよ。だから砂糖をいっぱい入れるの」

「入れすぎよ! 糖尿病になるわよ!？」

「うーん……確かにコレは入れすぎだねえ……」

「そう言いながらマリスはためらうことなく飲む。

「ちよつと甘すぎるような気もしますが……」

やはり同様アリスも紅茶を飲む。

「なんで二人とも飲めるのよ……」

「ちよつと甘いだけじゃないですか。イリスお姉さまの好きなコークだって角砂糖何個入ってるか知ってますか？」

「アレは炭酸が適度に甘さを消してるから……!!」

「じゃあ、姉さまには今度から炭酸の抜けたコークを飲んでもらおうかねえー」

「ししし、とマリスは笑いながら言った。

「更に適度にぬるいと地獄のような甘さを堪能できるよおー?」

「そんなん飲めるわけじゃないじゃない!」

「アタシ、たまに飲むわよ? グラスに入れたまま飲むの忘れて次

の日になったヤツ。捨てるのもつたないから飲んでるけど……」
「んなもん飲むなァッ！」

四人は楽しく談笑する。最初の頃にあつた重苦しい空気など完全に吹き飛んでしまつていた。

「まあ、ともかく！ スタリアの予言はどうするの？」

「アタシの知り合いに社会情勢について詳しいフォード・ブリュッセルってヤツがいるから聞いておくよ。歴史研究家で、専攻は神学で神話研究。だけど、色々な国の神話を集めて各国を回っているうちに社会情勢についても詳しくなつたんだってさ」

「ほえー……。神話研究とはまた粋な研究してるねえー」

「王宮歴史研究家の資格も持つてて、頼れる人だよ。しかもカツコよくて優しくて、背も高いんだよね！」

「ほおー……。それはいい話を聞いたなあー」

「カツコよくて優しくて背も高い……」

「どんな人なんでしょう」

三人はそれぞれ思い思いのイメージを抱く。

「今すぐ会わせて！」

そして三人同時に身を乗り出す。

「え、あ、まあ、いいけど……なんか邪な思いを抱いてない？」

三人はリースとは視線を合わせずに辺りを見回す。

「まさかあー。神話っていうと魔術の源泉だからねえー。興味があるのは当たり前なんだよあー」

「神話と精霊って近いところがあるしね！ ぜひともお話を窺いたいわ！」

「更に歴史といえば錬金術です！ 遥か古代から存在する錬金術についていいお話が聞けるかもしれません！」

リースドールは首を傾げていたが、やがて頷く。

「わかつたわ。じゃあ会いに行きましょうか」

四人は混雑した王都を歩く。街は人でひしめきあっていて、広い通りも人であふれていた。

「らっしゅらっしゅい！今日は野菜が大安売り！買うなら今がチャンスだよ！」

「魚あー！魚あー！鮮魚はいかが！今朝獲ったばかりの新鮮素材！これはお買い得だ！」

食料品を売る店からは大きな声で宣伝文句が飛び交う。夕方ということもあって、仕事を終えて帰路につく主婦達がそんな狭い店頭にぎっしりと並んで品物を吟味している様子がよく見えた。

「わあー！さすが王都は凄いですね！」

アリスは目を輝かせて辺りを見回しながら歩く。

「アリス、それじゃあ田舎者丸出しよ？」

と、イリスも言いながら時折ショーウィンドウの方へと駆け寄りたりしている。

「はあ……困った姉妹だよー……」

王都を幾度も訪れているマリスは慣れた様子で通りを歩いていた。

「ま、今のうちに王都をたっぷり堪能するといいわ」

なぜか偉そうに威張るリースドル。

そうして通りを抜けていく。

「彼の家は大通りの向こう側にあるの」

市街地の中心を貫く通りに商店街が集中し、その周囲に扇状に居住区が広がっている。その中でも王宮に近い場所に彼女達のように王宮資格を持っている人間が住んでいるのだ。

その中でも、リースドルは市街地の西側に住んでいる。そして目指す家は通りの東側。そういうわけで、どうしても彼の家に行くためには大通りを抜ける必要があった。

「ともかく、この街は広いから迷子になったら大変よ」

「そういうわけで姉さま、アリス、ちゃんとついてくるようにい…

…って……」

「あれ……アリスは？」

ふと気付くと、彼女らの周りにアリスがいない。イリスははぐれないように注意しながらマリスの後を追いかけていたのだが、アリスはどうやら物珍しさ故にどこかへ行ってしまったようだった。

「ああ！ だから言ったのにッ！」

リースドールはギリギリと歯ぎしりをしながらダンダンと地面を踏み鳴らす。

「仕方ないねえ……。探しに行こっかあ……」

「この広い街をどうやって探すのよッ！ ああもう油断したッ！ 田舎者だとわかってたのに！」

「どうする？ 手分けして探しても、私達が逆に迷子になりそうよ？」

「アンタらは先に彼の家を送り届けてそこで待っててもらおうわ！ あのウストラトンカチは私が探して小一時間説教してやるから！ ともかく行くわよ！」

「ああ……困りました……」

アリスはすっかり困り果てていた。

珍しい秘薬の材料を見かけてその店へと立ち寄り、その材料を購入したはいいが、完全に姉達を見失ってしまったのだ。

「リースさんの家に戻りましょうか……。でも……」

いつリースや姉達が戻ってくるかわからない。下手をすると夜遅くまで戻ってこないとも限らない。それにリースドールの話していた男に興味があることも確かだった。こんな遠くの街までやってきて、何の成果も得られずに帰るのも馬鹿馬鹿しい。

何より、男性とまったく接点のなかった今までの生活を思うと、年頃の少女である彼女としてはイケメ ではなく、博識な男性に会える数少ない機会を逃すわけにはいかなかった。

「せめて場所だけでも聞いておけばよかったです……」

気付くと、彼女は街の東側の住宅街へと迷いこんでいた。確かに

正解ではあるが、この街の居住区は迷路のように入り組んでいる。仮に地図があつたとしても、街に詳しい者や案内でもなければ目的地へとたどり着くことは難しい。ましてや地図もなし、目的地もわからなければたどり着くことは不可能だ。

アリスはすっかり途方に暮れて、とぼとぼと日の落ちかけた街を歩く。黄昏に染まりつつある居住区はやや不気味だった。

「どうかしましたか？」

「え……？」

周囲に誰もいないことを確かめてから、その声が自分へとかけられたものであるということにアリスは気付く。

彼女はゆっくりと振り返り、そして思わず見惚れてしまった。

アリスの前には大理石のように透き通るような白い肌、そして短い金髪の男が立っていた。歳はまだ若そうである。二十代前半、といったところだろうか。

「この辺りでは見かけない方ですね。何かお困りですか？」

きらりと白く輝く歯。にやかな笑顔。その美しさにアリスは思わず胸が高鳴るのを感じた。

「あ、えつと……とある人の家へ向かう途中で姉達や友人とはぐれてしまいました……」

「なるほど……。その尋ねる人の名前はわかりますか？」

「王宮歴史研究家のフォード・ブリュッセルさんです」

男はしばらく唸るようにして考えていたが、やがて思うところがあつたのか、ぽんと手を叩く。

「ああ、僕は彼の家を知っていますよ」

「ホントですか！」

「ええ、ご案内しましょう」

男は導くようにアリスの前を歩く。その歩幅は早すぎず、そして遅すぎず。アリスも無理なくついていくことができた。

「ここは広い街でしょう。住んでいながら僕も時々自分がどこにいるのかわからなくなることがありますよ」

「私なんてもう全然わからなくて……」

「ははは、この街は迷路みたいですよね」

そんな談笑を続けながら二人は歩く。

迷宮のような作りの街を男は難なく歩いていく。そんな男を見て、アリスは彼のことを頼もしいと思っていた。

「もうすぐ着きますよ」

そうして幾度となく角を曲がっていく。

すると、マリスとイリス、そしてリースドールが立っているのが見えてきた。

「あ！ お姉さま！ リースちゃん！」

「アリス！？ アンタどうしてここが！？」

アリスは三人の元へと駆け寄る。マリスはやれやれ、というような表情を浮かべ、イリスはほっとしたようだった。

「この人が案内してくれたんです」

男は三人にっこり微笑む。

「ったく……どうしてアンタはそう運がいいのかしらね……」

リースドールが小さくため息をつく。

「そいつが件の王宮研究家、フォード・ブリュッセルよ。性格悪いんだかいいんだか……」

「え、ええ！？ あなたがフォード・ブリュッセルさん！？」

男は微笑みを崩さずに頷いた。

「はじめまして、皆さん。僕が王宮歴史研究家のフォード・ブリュッセルです。今日はどういったご用件で？」

フォードは家の扉に手をかけて、そしてにっこり笑う。

「外でお話、というのも皆さんに悪いでしょうからどうぞ上がってください。少々散らかっていますが、ゆっくりくつろいでください」

そう言うと、フォードは家の扉を開いた。

16 アリスと迷子（後書き）

どうもこんにちは、超久しぶりの更新になりますね。
部品が完結したので、こっちの更新を続けていこうと思います。

さて、トリリスも新章へ突入しました。

舞台は王都へと移り、そしていくつかの登場人物を置き去りにして
物語りは進展していきます、ガスト君とか雛女とか（

ゲフンゲフン、まあ作者に忘れ去られた（というか出番を作れなかつた）キャラはまあ置いてお話を進めー ちょ雛女さんやめて痛い痛い死ぬちょ、おま魔術ぶっ放すなコラグアバラ！！

ちよつと一回雛女に殺されたところで今回のお話の解説を。

はい、新登場フォード・ブリュッセルさん。名前がしつかりと決まっているキャラの中で二番目に登場の男性キャラで今回の章のキーパーソンです。

これからのお話で重要な存在となってきましたが、まあそれはお話を
読み進めてからのお楽しみ。

では、次回予告と参りましょうか。

少々散らかっているとは誰の言葉だろうか。

フォード・ブリュッセル邸は見事なまでに綺麗に掃除が行き届いていた。

広いテーブルには何も物はなく、壁に備え付けられた暖炉には煤一つない。白い革張りのソファもシミも見当たらず、床には埃の一片も落ちていない。

「あら、お客様ですか？」

そう言っって現れたのは、この世のものとは思えない、美しい女性だ

った。

次話、
17
マリスと宝具

17 マリスと宝具

第十七話

フォードの家はとても綺麗に片付けられていた。

リビングに通されると、広いテーブルには何も物はなく、壁に備え付けられた暖炉には煤一つない。白い革張りのソファもシミも見当たらず、床には埃の一片も落ちていない。

「綺麗な部屋……」

「これはすっかり掃除が行き届いてる証拠だねえ」

「ソファもフカフカです！」

三人は思い思いのことを言いながら、広いソファに腰かける。三人が横に並んでも、そのソファは十分に余裕があった。

リースドールはフォードの隣に腰かける。

「あら、お客様ですか？」

そのとき、鈴のように美しい声が室内に響いた。

三人はそれに驚き振り返る。長い輝くような金髪、そして豊満な体、そしてモデルのように背の高い女性がリビングの入り口に立っていた。

「え、もしかして……奥さん!？」

それを聞いて女性は頬を赤らめる。

「そそそ、そんな奥さんだなんてそんな!？ わ、私なんてただの使い魔です！」

「え……人間が使い魔!？」

マリスはやれやれとため息をつつきながらイリスの肩を叩く。

「姉さまは感じ取れないのお？ あれは聖霊の類だよー。それも超一級のねえー」

「ただの魔術師や魔女にあそこまで強力な力は出せません。しかも、それを自然状態で放っているのですから……本気を出せばどうなる

か……」

アリスは畏怖と尊敬の念を抱いて女性を見上げる。

「紹介が遅れたね。彼女は僕の使い魔であり、天使の最高位に立つ熾天使、メルシー・セラフだよ」

「はじめまして、メルシーと申します。以後、お見知りおきを」

メルシーはゆっくりと頭を下げる。

「て、天使!? 今天使って言った!？」

「姉さま興奮しすぎだよ……。まあでも天使、それも熾天使を使役するなんて人間業じゃないねえ……。君って実はすごい魔術師なんだねえ……」

マリスはフォードをまじまじと見つめる。目の前の優男からはそこまでのオーラ感じ取れなかったが、能ある鷹は爪を隠す、というヤツだろう。

「凄い魔術師だなんてそんなことないですよ。まだまだ僕も見習いです」

「それでいてそのことを鼻にかけないナチュラルさ。リースちゃんがベタ褒めするだけはあるわね」

「ははは、と笑いながらフォードは頭を掻く。

「ともかく、お茶にしますね。皆様は何がよろしいでしょうか?」

「アタシ、オレンジジュース」

「私はアイスティーをお願いしようかしら」

「私もアイスティーをお願いします」

「あたし、ネクタールって一度飲んでみたいんだよねえー。出せる?」

メルシーはにっこりと笑い

「お任せください」

そう言っけてキッチンへと消えていった。

「おお、言ってみるもんだねえー」

「マリス、ネクタールって何?」

「神々の飲む霊酒だねえ。天使っていったら、一番神様に近いとこ

るにいるからもしやと思ったけど、ホントに出してくれるとはねえ
ー」

「アンタらここに来た理由忘れてない？」

そこでリースドールが冷静にツツコむ。

「そういえばそうだったわね」

「すっかり忘れてました……」

「いやもう十分イイモノ見せてもらったから満足してたよー」

リースドールは小さくため息をつく。

「ま、とりあえず話をしましょうか」

「と、言うわけなんだよー」

三人はスタリアの予言についてフォードに話して聞かせた。

「ふむ……アステリスクさんの占星術については僕もよく聞いています。彼女の占いが外れるとは考え辛いですね……。ですが、僕もここ最近海外を旅したときにはそのような不穏な様子はありませんでしたか……」

フォードはしばらくの間考え込む。

「少し探ってみましょう。皆さんには僕の名前で王宮の宿泊施設を用意しておきます。しばらく待つていただいてもよろしいでしょうか？」

「全然おっけえーだよー」

マリスは二つ返事でOKを出す。

「で、一つ頼みたいことがあるんだけどいいかなあー？」

「と、言いますと？」

マリスはにししと笑みを浮かべ

「天使なんか使役してるぐらいだし、歴史研究もしてるんだからあー……神具の一つや二つ、持つてるんじゃない？」

「そうですね……、いくつかメルシーから預かっている道具がありますし、僕が集めた宝具の類がいくつもあります」

「蒐集家の血が騒ぐねえ。見せてもらってもいいかなあ？」

彼はにこやかな笑みを浮かべる。

「ええ、構いませんよ」

ちようどそのとき、グラスをのせたお盆を持ったメルシーがやってくる。

「お待ちせしました。オレンジジュースとアイステイー、ネクタールです」

ことり、とグラスが並べられる。きちんと主の分まで用意している辺りが抜け目ない。

「おお！？　これがネクタールかあー！」

マリスは桃色の液体を見て興奮した様子で言った。

「そんなに凄いものなの？」

「市場にやボトル数本出回るか出回らないかのレベルの貴重品だよおー？　飲むのがもつたいたいねえー」

そう言ってマリスは舐めるように一口、口に含む。

「抜けるような甘味……。そして心が洗われるような爽やかさ……。これが神々の美酒と呼ばれた代物かあ……」

「何よ、そんなに凄いの？」

イリスも一口飲んでみる。

「わあ……。！　これは美味しいわ！」

「あ！　姉さまずるいです！」

続いてアリスも飲んでみた。

「こんなに美味しいものは初めて飲みました……」

「あの……。よかったら一本持って帰られますか？」

メルシーがそう提案してくる。三人は即座に首を縦に振った。

「すっごおーい！　これがエリクシールかあ！　こっちはレヴァンティン！？　それからこれがアヴァロンに消えたあの聖剣のオリジンナル……。！　わ！　ドラゴンハートまであるなんてえー！」

マリスはめまぐるしい速度で首を動かしながら宝物庫の中を駆けめぐっていた。

その後をフォードはついて歩く。イリス達は結局メルシーにネクターを頼み、リビングでちびちびとやっているのだろう。

そういうわけで、ここにいるのはフォードとマリスの二人だけだった。

「量より質、つてのはまさにこのことだねえー。あたしなんかレプリカや贋作ばかりだから、これだけモノホンやオリジナルが揃っていると感じすら覚えるねえ」

「そんな、大したことないですよ」

マリスは記憶や記録の中にだけしか存在しなかった魔具や聖遺物、宝具の数々を見て自らの知識欲が満たされるのを感じた。

「こ、これはあー!？」

マリスは一つのシヨーケースの前に張り付く。

小さな小瓶に入っている二粒の赤い結晶。とてもわずかな量ではあったが、それからはとてつもなく強力な魔力が感じられる。

「まさか……そんな……」

マリスは驚きと同時に恐怖すら覚えていた。それは……まさしく、賢者の石であった。

「これは入手するのに特に苦労しました」

フォードはマリスの隣に並ぶ。そして、ポケットから鍵を取り出すと、シヨーケースを開いてその真つ赤な小石をつまみあげた。

「遙か昔、とある国の王が極秘裏に魔術師数百人を動員して作り出したものようです。王は完成前に逝去したようですが、魔術師達は王の亡くなった後に完成させ、そして王を蘇らせることに成功した、という話が伝わっています」

「こ、これをどこで手に入れたのかにやあ……?」

「その王国の跡地ですよ。賢者の石とは呪わしい物質のようで、やはりその地も後に滅びたようです」

フォードに差し出されたので、マリスはおそおそと指を差し出す。

触れるだけで、抗いがたい魅力と強力な魔力を感じる。蒐集癖のある彼女は思った。この石が欲しい、と。

「にはやは……。やはりモノホンは凄い魔力を感じるねえ……」
思わず額から冷や汗が流れ出る。伝承通りならば、卑金属を金に変え、無限の命を与える霊薬を作り出す物質だ。これ一つで歴史すら変わるだろう。

「ですが、私はこれを壊そうと思っています」
フォードは呟くように言った。きつと彼も惜しいのだろう。

「この物質にまつわる伝承は私も知っています。この使い方を誤れば命を失う可能性すらありますからね」

そう言うと、フォードは賢者の石をマリスから受け取って、ショーケースにしまった。ここならば安全だろう。マリスはショーケースのガラスに触れるだけで、強力なロックの魔術をかけてあるのがわかった。そして、さっきの鍵は魔術のかけられた錠だ。そう簡単には破ることはできない。

「君も伝承を知る人間なんだにやー」

強力な魅力を感じる物質ではあるが、マリスも間違いなく同じ選択をするだろう。これはこの世界にあるべき物質ではない。

「さて、夕食にしましょう。今夜は我が家で食べてみてください」
「お、気が効いてるねえー。それじゃ、天上の世界の晚餐に舌鼓を打つことにするかなあー」

「メルシーの作る夕食は最高ですよ。楽しんでみてください」
マリスとしては、あと何時間ここにいるも飽きないだろうが、妹や姉達が文句を言うだろう。後ろ髪を引かれる思いで部屋を後にした。

17 マリスと宝具（後書き）

こんにちは、ほーらいです。

今回は妄想大炸裂の回です。

色々マジックアイテムの名前が大登場です。

一個ずつ解説していきましょつか。

まず、ネクタール。

これは神々の霊酒と呼ばれるお酒で、Wikipediaによれば『語源は古代ギリシア神話におけるネクタル（ネクタール、神々が常食とする生命の酒・不老不死の霊薬である薬酒・滋養のある飲み物）とされる。』というものです。

ギリシア神話に登場する神様がいつも飲んでるお酒はコレです。さて、そろそろ次に進みましょうか。

続いてエリクシール。これは某四角社が出してる究極の幻想RPGに登場するエリクサーと同義です。

飲むことであらゆる病を治すという万能薬です。

歴史的には賢者の石とも同義と言われていますが、このお話では別のモノとして扱っています。

そしてレヴァンティン。

カタカナ表記では正確にはレーヴァティンと読むらしいです。綴り的にンの音が入るのはおかしいですからね。

色々なフィクション作品に登場する剣ですが、オリジナルは北欧神話に登場する武器で、その名は『害なす魔の枝』などと訳されています。

剣、とするフィクション作品が多いですが、実際の神話ではどんな

武器かの記述が少なく、実は剣ではなく杖なのではないかなどという説もあります。

色々な逸話の多い武器ですが、いろいろとWikipediaなどにお話が載っているの、読んでみてください。ここで説明してもいいのですが、キリがないので……。

そして、アヴァロンに消えた聖剣のオリジナルとは、まあこれは超有名ですね。伝説の剣の中でもっとも有名といっても過言ではないあの聖剣エクスカリバーです。

アーサー王伝説に登場する剣で、PCゲームのFateにも登場するヒロインの必殺技でもあります。やべえよセイバーマジ可愛い。桜も可愛い。イリヤはもつと可愛い。

さてお次はドラゴンハート。

これは某四角社のゲームに登場した武器の素材です。

伝説がどうかってことは……ない、ハズ。

ちなみに映画は関係ないです。

竜の心臓を結晶化した存在で、ゲーム中では生命力を強化する効果があり、そしてドラゴンの対となるアンデットモンスターに有効という設定があつた素材です（後者は設定のみで実際に効果はないです）。

そしてラストは7 アリスと虚脱でも登場した賢者の石です。

これはもう有名ですけど、錬金術の結晶といわれ、前述のエリクシールや仙丹と同義と言われた不老不死と無限の黄金を生み出す結晶です。

某錬金術漫画にも登場したことでその知名度はとても高いと思いますが、一応解説を。

不老不死やら金を作り出す物体といわれていますが、これって結局

錬金術の目的の過程の一つなんですよね。

錬金術の最終目的は完全なる理想の存在となること。その過程として不老不死を生み出す賢者の石の精製があるんですよね。

そもそも、賢者の石というのは不完全な状態のモノを完全な状態に治し、完全なモノへと昇華させるという効能があります。

あくまでも、金を作るといのは『卑金属の病を治し、完全なる金属である貴金属を作り出す』という方法で金を作り出すわけであり
ます。

結局のところ、賢者の石という物体は不完全を完全へと治す霊薬と
いうだけであって、錬金術の目的ではなく手段でしかないわけです。
こここのところを誤解している人が多いですが。

さて、あんまり詳しく語りすぎるとドン引きされるかもしれないの
でここいらで次回予告行きましようか。

突然の来訪にもかかわらず、最高の夕食を提供されてすっかり満足
した三姉妹達はすっかりフォード邸に居着いてしまっていた。

特にマリスとリースドルは酒の飲み比べを始め、大騒ぎとなつて
いた。

「はぁ……。まったく私達、何しにここに来たのかしら」

そんな中、イリスは特大のため息をつく。この街へとやってきた目
的を見失った姉妹に呆れてしまっていた。

ふと、そこへフォードがやってくる。

「楽しんでいただけっていますか？」

イリスはフォードと話を始める。そして、酒の勢いもあってか、自
分の悩みを打ち明けていた。

次話、 18 イリスと悩み

18 イリスと悩み

第十八話

突然の来訪にもかかわらず、最高の夕食を提供されてすっかり満足したトリリスの娘達はすっかりフォード邸に居着いてしまっていた。

「メルシー！ ネクタールぷりいーず！」

すっかり出来上がってしまったマリすと、しこたま酒を飲まされてソファで横になっているアリスを見ながらイリスは特大のため息をつく。

「はあ……。まったく私達、何しにここに来たのかしら」

リースドールとマリスはすっかり飲み比べを始める。こんなところでもリースドールは敵対意識を燃やしているようだ。まだ幼いというのに、本当によくお酒を飲む子だとイリスは思った。

「楽しんでいただけいますか？」

すると、グラスを持ったフォードがイリスの元へとやってくる。フォードは右手に持っているボトルを差し出した。イリスは遠慮しがちにグラスを差し出す。

とくとくと、と桃色の液体がグラスへと注がれていく。

「ごめんなさいね、突然押しかけてしまって、こんなに騒いで……」

「ははは、構いませんよ。こんなに楽しいのは久しぶりです」

やがてはメルシーすらも巻き込んで大騒ぎが始まる。そんな様子を見て、イリスはますます頭が痛くなるのを感じた。

「メルシー、大丈夫かしら？ 相当飲まされているようだけど……」

「彼女は自分の管理はしっかりできますから、大丈夫です」

と、彼が言った瞬間メルシーはぶっ倒れる。

「ほら、飲めなくなったら瞬間すぐ倒れて寝ちゃいました」

「それは管理してる、とは言わないんじゃないかしら……」

フォードは洒落つ気のある笑みを浮かべる。

「こんな天使ですが、頼りになるときは本当に頼りになる天使なんです」

「熾天使というくらいだからね。でも、天使のトップがこんなだと考えると、死後の世界も少し楽しみだわ」

「はは、でもあなたはまだ若いのですから、そんな死後の世界のことなどまだ考えるのは早いですよ？」

それにほら、お美しい、とフォードは付け加える。イリスの白い頬が少し赤く染まった。

「あなたもお酒が入っているのね」

「本音ですよ？ あなたの輝くような銀髪はとても美しいですから、そう言っただけでフォードはイリスの長い銀髪を撫でる。悪い気はしなかった。イリスはなされるがままにしていた。

「妹 マリスにも同じことを言われたわ。あの子、茶髪でしょ？ 私の髪が羨しいって……」

「そうですね。もし私が茶髪だったら同じことを言ったかもしれない。けれども、マリスさんの髪も十分素晴らしいと思いますわ」

「何よりあの子は魔術の才能があるわ。私なんて……比喩物にならないほどにね」

「トリリス家と言えば有名な魔術の名門。何を謙遜することがあるでしょうか？」

イリスはうつむいた。そして、ぼんやりと呟くように言った。

「私、低級の精霊魔術しか使えないわ。謙遜するも何も、私は魔力の量だけが取り柄の……。魔術の才能は平凡……いえ、平凡以下だわ」

「ふむ……それならば、あなたにいいものを差し上げましょう。少し待っていてください」

そう言っただけでフォードは部屋を立ち去っていく。

イリスは自分の実力を思い返す。マリスが熱心に教えてくれるおかげで、なんとか低級魔術をしつかりマスターすることはできた。

だが、所詮それまでだ。低級魔術など、魔女の血を引くものであれば呼吸をするように使えて当たり前前の魔術なのだ。

マリスは低級魔術はあらゆる魔術の基礎となるものだから、完璧にマスターするべきだと言う。普通の魔女ならば、かなり荒いのが当然なのだが、そこをあえてイリスはマスターするほどまでに訓練した。だが、イリスとしてはもつと高級の魔術を使いたいというのが本心だ。

だが、イリスはマリスの言葉を思い出す。魔力量“だけ”は一流だ、と。そう、所詮彼女は魔力の量が凄まじいだけで、魔術の才能の欠片ほどもないダメな魔女なのだ。

「バカね……。いくら妹達がフォローしてくれても、私は所詮そんな魔女なのよ」

そう考えると、諦観にも近い感情を感じる。

「お待たせしました」

気付くと、フォードが戻ってきていた。彼が差し出してきたのは、綺麗な緑色に輝くオーブ。

「これは……？」

クイックローダー

「記憶の魔術書と呼ばれる魔具です」

「記憶の……魔術書？」

「このオーブには魔術を記録することができます。術者はその魔術の名称を一言唱えるだけで、使用者の魔力を使って、瞬間的に魔術を発動させることができるのです。本当はよく使う魔術の詠唱をスキップするために使うものなのですが……これに高級魔術を込めることによって、実力以上の魔術を使用することもできます。もちろん、その分魔力を消費しますが、トリリス家の人間の魔力ならば、その問題はクリアできるでしょう」

「ってことは……マリスに魔術を込めてもらえば、私は一時的にマリスの魔術を使うことができる、ってこと？」

フォードはにっこりと笑って頷いた。

「登録できる魔術は二十六個までです。色々施行錯誤をして、お好

みの魔術を登録してください」

「わかったわ。ありがとう」

イリスはそのオーブを大切にしまつ。これがあれば　もう魔力だけの魔女ではない。

マリスやアリス、リースドールに頼めば、彼女らの得意とする強力な魔術や、便利な魔術が自分のものになるのだ。

本当にこれでいいのだろうか。

今まで楽に進むことばかり、彼女は考えてきた。そして、その結果いつも失敗した。

やり方が間違っていたのか、それともその考えが間違っていたのか　ともかくどれもこれも上手くいかなかった。

そして、マリスは努力することを教えてくれた。アリスは努力をする手助けをしてくれた。

誰もが努力もなしに天才や秀才になつたわけではない。マリスやアリスも血のにじむような努力を積み重ねてきたからこそ、今の彼女があるのだ。

イリスはフォードの元を離れてマリスの元へと歩み寄る。

「ひゃっほおーい！　あたしの勝ちいー！」

目を回してはたりと倒れ込むリースドール。それを誇らしげにマリスは見下ろす。

「あの、マリス。ちょっといいかしら？」

「んん〜？　姉さまも飲むうー？」

「あの……これ、なんだか知ってる？」

イリスは記憶の魔術書を取り出した。それは彼女の手の中でキラキラと輝いている。

「ああ、記憶の魔術書かあー。随分イイモノ持つてるじゃーん」

「さつきフォードさんからもらったんだけど……これを使えば、私にも高級魔術が使えるんでしょ？」

「そうだねえー。なんか使いたい魔術あるうー？　あたしが登録し上げるよおー？」

そこでイリスは首を横に振る。

「うっん、そうじゃなくて……。これを使えば、私は一時的にマリス並の実力を得ることになるんでしょ？」

「そうだねえー」

マリスはとろんとした目をしながら首を縦に振る。

「でも、それって早い話がズルよね……。？ 何の努力もしないで、そんな高級魔術を使えるようになるなんて……」

「んー、姉さまはなんか勘違いしてなあーい？」

「え……？」

「努力をすることは確かに大事なんだけどあー、その努力の結果が黒コゲ料理だったら意味ないわけじゃーん？」

「まあ、そうね……」

「ほら、姉さまって“壊滅的に”料理がヘタクソでしょあー？ でも、それは頑張つてないからじゃなくて、頑張りの仕方を間違えているからなんだよあー」

「か、壊滅的……。た、確かに私の料理は全部黒コゲになるけど……」

「過程も大事だけどあー、結果も重要つてことだよあー」

イリスは話がどの方向へと進んでいるのかわからず、首を傾げる。

「え、えつと……？」

「姉さまは早く魔術が使いたくてウズウズしてるんでしょあー？ なら使つていいんでない？」

「え、いいの……？」

「た・だ・しいー！」

そう言つてマリスはびしりとイリスの眼前に指を突き付ける。

「普通の魔術の勉強も怠つたらメツだよ？ これから中級魔術にも入っていくわけだしー、魔術の勉強はこれからは楽しいんだよあー？」

マリスはイリスの手からオーブをかつさらう。そして超高速で呪文を唱えた。緑のオーブが一瞬赤く発光する。

「ま、知識の蓄積も大事だけど実際に使って覚えるのも大事さあー。今、“大エリクシルの結晶”を入れといたよあー。精霊魔術の奥義の一つを実際に使うことで、魔力のコントロールの仕方とかも学べるはずだからさあー。広いところでやるといいよあー。さつてと、あたしはもうちょい飲むかなあー。おーい、フォードあー！ そんなとこつつ立ってないでおいでこつちおいでよあー」

フォードはくすりと笑ってマリスの隣に腰を下した。

イリスはごくりと喉を鳴らして唾を飲み込む。あのリースドールとの戦いで見せたあの高級魔術、それを今の彼女は自由に使えるというのだろうか。

イリスはこつそり外へ出た。幸い、家の裏は少し広い庭が広がっている。その中央に彼女は陣取ると、オーブを手に持って高らかに宣言する。

「大エリクシルの結晶”！」

オーブが明るく、そして強く輝く。

その瞬間、たくさんの魔力が吸い取られるような感覚を彼女は感じた。

「これは……！」

彼女の周囲に四大種を司る四色の柱が浮かび上がる。それは数日前にマリスが見せたあの魔術とまったく同じものだった。

「で、できた……！」

それと同時に、ぐんぐん魔力を術に吸われていくのを彼女は感じた。この魔術は、術を維持するために莫大な魔力が必要なのだろう。だが、魔力の源泉ともいえるような彼女にとって、その吸収されていく魔力の量は大したことないように思えた。

「ふう……」

イリスは魔力の供給を止める。すると、自然に術は消えていった。

「これで私、もう足手まといじゃないかな……？」

イリスにはマリスのような魔術のバリエーションも、アリスのよくな細かな魔術の出力の調整もできない。ならば自分にできること

はなんだろうか。

それは、せめて足手まといにならないようにすることだ。この先、恐らく戦いが待っているだろう。そのとき、マリスやアリスのように戦えるようにする必要がある。

彼女らにできないことは何か。それは持久戦となったとき、長い時間魔力を温存させることだ。

トリリス家に生まれた時点で、トリリスの娘達は魔力の量が人並み外れていることは確かだ。だが、それでも魔力の倉庫番のように大量の魔力を用いる魔術や魔具を使う必要があるとき、それを長い間維持させることができるのはイリスだけだ。

さきほどの大エリクシルの結晶も魔力の消費量は普通の魔術よりも遙かに多い。マリスはあするときリースドールの魔術を全て吸い込んだが、あれだけの時間維持するとなると、マリスの魔力の大部分を食うのではないだろうか。

そう考えると、リースドールが諦めることなく更なる攻めを繰り返していたり、あるいは“王の伊吹”を使った際にマリスがもっと魔力を消費する方法で切り返しをしていたならば　マリスは負けたかもしれない。

「まさか……ね」

マリスに限ってありえない。そう思ってイリスはその考えを打ち消す。

あのマリスがただの魔女に負けるはずがない。何らかの方法できっとどうにかしただろう。

「後でリースちゃんにもお願いしよう。色々な魔術を使うことによつて、それぞれの魔術の弱点や長所が見えてくるかもしれないわ」
「イリスは記憶の魔術書を懐にしまいこむ。手のひらで包み込むことができるほど小さなそれはポケットにも十分入る大きさだった。」

「まだ……まだよ。皆から魔術をもらっても、それを使いこなせるようにならなきゃいけないわ。練習を積まないと……！」

彼女はぐつと手を握りしめた。そして空を見上げる。

王都の夜は思っていた以上に肌寒いとイリスは思った。澄んだ空には美しい星々が宝石箱をひっくり返したように散りばめられている。

「戻りましょう」

酒で火照った体も冷えてきていた。イリスは肌をさすりながら家の中へと入っていった。

18 イリスと悩み（後書き）

こんにちは、ほーらいです。

さて、今作新しく登場したマジックアイテム、記憶の魔術書。

早い話が魔術を登録していつでも呼び出すことができるオーブです。もちろん、発動に魔力が必要となりますし、制御することも必要なので、実力がなければ扱うことができません。

だから、イリスも自覚はしていませんが、彼女も十分魔女としての素質はあるのです。

これから先、低級魔術しか使えなかった彼女が一気にパワーアップします。

イリスの活躍、期待しててくださいね。

では、次回予告を。

「強盗殺人事件……かぁー」

マリスは王立新聞社の発行する新聞を広げて見ていた。

盗んだモノを道のど真ん中に放り出して犯人の消えた事件に、マリスは疑問を感じていた。

この事件のせいで、王都の出入りが厳しくなったという。

まあ、まだこつち問題は解決できてないから別にいいんだけどねえ

ー

マリスは新聞を丸めてテーブルの上に放り投げた。

「メルシーー！ 朝ご飯はぁー？」

次話、19 アリスと平和

19 アリスと平和

第十九話

「強盗殺人事件……かぁー」

マリスは王立新聞社の発行する新聞を広げて見ていた。

結局トリリスの娘とリースドール達はフォード邸に一晩泊まっていた。アリスとリースドールはまだ二日酔いが残っているのか、調子悪そうにしながら寝込んでいる。

一方、あんなに簡単にぶっ倒れてしまったメルシーはというと昨日のことなどなかったかのように早朝から元気に動き回って家事をしていた。

「しかも、その犯人盗んだものを通りのど真ん中に残して姿を消しちゃったんでしょ？」

「そこが腑に落ちないんだよねえー。人を殺してまで物を盗んだのに、それをほっ放って逃げるってのがどうもおかしい気がするんだよなぁー」

新聞によると、街全体に非常線を張って目下捜索中だという。街の入り口で検問をしており、特別な事情と身体検査がなければ街から出られないようなので、トリリスの娘達もしばらく王都から出る事ができなさそうである。

「まあ、まだこつち問題は解決できてないから別にいいんだけどねえー」

マリスは新聞を丸めてテーブルの上に放り投げた。

「メルシーー！ 朝ご飯はぁー？」

「はい！ ただいまお持ちします！」

アリスとリースドールを無理やり叩き起こして朝食を終えた一行

は、ようやく後片づけを始めていた。

「うう……頭痛いです……」

「アタシも……」

アリスとリースドールは辛そうな表情を浮かべながら昨晚散らかした残骸の片付けをする。

「そんなんで大丈夫？ 図書館へは私とマリスだけで行こうか？」

「そうしていただいてもよろしいでしょうか……」

アリスはどつかりとソファに座る。

「メルシー、アリスさんをホテルまで送ってもらってもいいかな？」

そんなアリスの様子を見てフォードがメルシーに言った。メルシ

ーはすぐに笑って

「はい、承りました！」

と言った。

「ごめんなさい、メルシーさん……」

「いいですよ。お客様をお送りするのも私の仕事ですから」

「それに、アリスだったら地図渡しても迷いそうだしねえー」

にしし、とマリスは笑いながら言う。

「お姉さま……酷すぎます……」

一同は明るい声で笑いあった。

フォード邸を出た一同はマリス達図書館へ行くグループと、自宅に帰るリースドール、そしてホテルへと向かうアリスとメルシーのグループに分かれた。

アリスはメルシーに体を支えられながらゆっくりと歩く。

「なんだかすみません……」

「別に構いませんよ。人と散歩するのはとても楽しいことですからね」

メルシーは笑顔でそう答える。その笑顔の輝かしさにアリスは目が眩むようにさえ感じた。

「メルシーさんは……人間は好きですか？」

「いきなりどうしたんですか？」

アリスは気付くと、そんなことを尋ねていた。

「あ、いえ……。メルシーさんは天使ですよ？ 人間なんかとは次元の違う、全く高等な生き物……。いえ、生き物を超越した存在ですよ。そんな方が……。私達に頭を下げたり、ましてや酔っている人間を介抱したりだなんて、屈辱じゃないんですか？」

その質問にメルシーはくいつと首を傾げる。

「そんな……。とんでもないですよ！」

なんでそんなことをアリスが尋ねたのかわからない、という様子でメルシーは言った。

「私達天使は人間を愛しています。いえ、人間だけではありません。人間を含めたこの世に存在するありとあらゆる存在……。それらを全てを愛しています。それに、私達の方が人間よりも次元が上だなんてことはありませんよ。確かに私達は死後の世界で死した者達の魂を世話する役目を仰せつかっています。だからといって人間よりも立場が上だなんてことがあるでしょうか。あなた達人間は体が自由に動かせない老人を介護するとき、立場が上だと思っただけで介護しますか？ 優越感に浸りながら介護しますか？」

「そ、それは……」

メルシーは目を閉じて胸に手をあてる。

「それと同じことなのです。確かに能力は天使よりも劣っているかもしれませんが。でも、だからといって私達は人間を見下すようなこととはしません。むしろ、そんな不完全な人間だからこそ手助けをしたいのです」

彼女はにっこりとアリスに微笑みかけた。

「だから、あなたが気に病む必要はありませんよ」

「メルシーさん……」

メルシーはアリスの眼前に指を持つてくる。

「少し我慢してくださいね」

彼女はゆっくりと目を閉じると、ちよんとアリスの額をつつく。その瞬間、アリスは突然体が軽くなるのを感じた。

「え、ええ……!?!」

「簡単な魔法をかけました。二日酔いも楽になりませんか？」

「え、あ、はい。すっかり楽になりました」

アリスは驚いていた。二日酔いの症状の遮断や無効ではなく、彼女は二日酔いという状態そのものを“消去”したのだ。言うなれば現象の消去。アリスの体から、二日酔いという現象を消去したのである。質量保存の法則と同じ原理である“概念保存の法則”が存在する限り、そんなことは理論上できない。

だが、そこでアリスはメルシーの言葉を思い出す。彼女は言ったではないか。魔法だ、と。

あらゆる法則を無視し、奇跡を引き起こすのが魔法だ。ましてや彼女は魔法をそのまま生き物にしたかのような存在である天使だ。魔法を行使するくらいことなど造作もないのだろう。

「少し街を歩きますか？ アリスさんからは面白いお話が聞けそうですね」

メルシーはにっこりと微笑んだ。

「メルシーさん、お時間は大丈夫ですか……？」

「家事は皆様がお休みになっっている間に片付けておきましたし、そもそもフォード様はしっかりしたお方です。私がいなくとも大抵のことは一人でなさりますから大丈夫ですよ」

「それじゃあ……お言葉に甘えて……」

アリスは遠慮しがちにメルシーの隣に並んだ。

「では、行きましょうか！」

メルシーはアリスの手を取ると、少し早足で歩き始めた。

「お、メルシーちゃん。妹かい？」

「メルシーちゃん、可愛い子連れてるなあ」

「こうして見ると姉妹みたいだな！」

「お嬢ちゃん、山向こうの街から来たのかい？ 大変だったろう」
やはり金髪の美女と美少女が並んで歩いていると目立つようで、次から次へと声がかかる。食べ歩きのできそうな商品をサービスする店主すらいた。

「はふはふ……美味しいですね」

アリスは熱い肉まんを頬張りながら街を歩く。そんなアリスの隣にメルシーも肉まんを食べながら並んでいた。

「あのお店の肉まんは王都一ですからね」

大通りをしばらく進んでいくと、やがて広場へと出た。

外周には露店が立ち並び、そして家族連れで賑わっている。

メルシーとアリスは一度近くのベンチに腰を下した。

「向こうの街でも人が多いと思ったのに、この街はそんなの比べものにならないくらい人が多いですね」

「この国一番の大都市ですからね」

彼女らの前を元気そうに子供たちが駆け抜けていく。そんな子供の様子を見て、アリスは思わず頬が緩んだ。

「平和ですね……。こんな風景を見ていると、スタリアさんの予言が嘘のように思えてきます」

そつとアリスは目を細める。自らの死すらも含むそんな大規模な戦乱など、本当に起こるのだろうか。とてもではないが、そんなことなど信じるのができなかった。

「そうですね……。私もそんなことが起こると思えません」

メルシーもそう言い切った。それを聞いてアリスは少し安心する。確かに高級占星術ならば、見通すことのできない未来はないでしょう。ですが、それも完璧ではありません。どんなに完璧に構築されたものでも、必ずほころびはあるのですから」

アリスはその言葉を信じたかった。だが、メルシーは表情を曇らせる。

「けれども……どうせ起こらないだろうと思って何もせずに過ごし

てしまえば、もし本当にそれが起こったときに大変なことになりま
す。だから、私達はそれに備えて対策をするのです。天使はこ
の世に生きる存在を助け、護り、救済するために存在するのですか
ら」

メルシーはそう言って空を見上げる。

「私達でさえ、確実な未来を見通すことはできません。私達は
確かに人間に比べれば強大な力を持っていますが、万能の存在では
ないのです。それは人間と同じなのですよ」

白い肌の腕を高く掲げ、太陽の光へとかざす。

「だから、できることは全てやります。もし、何も起こらなければ
それでいいのです。そのときはただ安心すればいいのですから」

そして、彼女はにっこりと微笑む。

「私はもちろん、フォード様もきつとお手伝いしていただけますよ。
共に……この世界を守りましょう」

「はい！」

アリスはメルシーの手をぎゅっと握る。陶磁器のように美しいそ
の肌は、しかし驚くほど柔らかかった。

けれども、確かに強い力を秘めている。そんなメルシーがアリス
はただただ頼もしいと思った。

19 アリスと平和（後書き）

さて、ついに出ました魔法。

魔法と魔術、この違いはなんでしようか。それを説明したいと思
います。

まずは魔術から。

これはこの世界でいうところの科学にあたります。

その原理が全て解明されており、精神的技術としての存在が魔術で
す。

人間が使う科学はほとんどがその原理が解明されておりますよね。

それとほぼ同義だと考えていただければOKです。

物質世界の進化の果てが科学、精神世界の進化の果てが魔術、と僕
は定義しています。

一方、魔法とはなんでしようか。

それは、人間に原理が解明できていない魔力を用いる術を指します。
人間の既知の法則を超える原理によって発生する異常現象、それら
が魔法といえます。

この世界でいうと、タイムマシンやテレポート技術などが魔法に属
します。

この作品では明確にこの二つを分けて書いていますので、くれぐれ
も間違えないように注意してくださいね。

それでは次回予告です。

王立図書館へとやってきたマリスとイリス。

ここでは様々な分野における書籍が数多く取り揃えられていた。

「で、マリス。一応図書館には来たけど何から調べるの？」

「んー、この本を片っ端から読めたら幸せなんだけどねえ……」。

でも、今はそんなことしてる暇ないのが現実なんだよなあ」
二人は手分けして、占星術にて見通された戦乱について、手がかりとなるものを探し始めた。

次話、20 マリスと事件

20 マリスと事件

第二十話

マリスとイリスは王立図書館を訪れていた。

国内最大規模を誇るその図書館の蔵書は星の数に等しいとすらも言われており、短い人間の一生で読むには数が多すぎた。

といつても、一般向けに公開されている蔵書はその内の一割にも満たない。中には神代の神々が遺したといわれる貴重な書物も存在し、それらは一部の王宮資格を持つ者のみに開放されているという。で、マリス。一応図書館には来たけど何から調べるの？」

イリスは遙か向こうを見通すことのできないほど広大なそのスペースを見てわくわくしながらマリスに尋ねる。

「んー、この本を片っ端から読めたら幸せなんだけどねえ〜……。でも、今はそんなことしてる暇ないのが現実なんだよなあ〜」

マリスもこれほど大量の本を前にするとやはり好奇心がうずくようになったが、ぶんぶんと首を横に振る。

「んー……外交記録、とか読めないかなあ……。さすがに無理かなあ……」

「とりあえず聞いてみましょう」

二人は受付へと向かう。

「どういったご用件でしょうか？」

マリスは国の外交記録を読みたい旨を伝えた。だが、予想通り司書は渋い表情を浮かべる。

「一部ならば読めますが……そのほとんどの内容は王立新聞社発行の新聞に書かれている内容ですよ？」

「だよねえ……」

マリスはそつとイリスの耳元に口を寄せる。

「戦争になるくらいなんだから、とても大々的に公開できるもんじ

やないよねえ……」

「でしようね……」

それどころか、王宮内のどれだけの人間が知っているか怪しいくらいである。

「じゃあ、新聞のバックナンバー貸してもらっていいかしら？」

「そうだねえ。とりあえず、最近十年分？」

「じゅ、十年分……ですか……？」

司書は冷や汗を浮かべて尋ねた。おおまかに計算しても三五〇〇日分以上だ。

「ああ、ごめんごめん。そんなにたくさん運べないよねえ……。じやあ、とりあえず一年分でいいかなあー」

「う、承りました……。それでは、二階資料室にてお待ちください……」

司書はいそいそと奥へと引っ込んでいく。そんな様子を見て、イリスはやれやれとため息をついた。

「マリス、無茶言いきすぎよ……。一年分って簡単に言うけど、どれだけの量があると思ってるのよ」

「んー？ いや、姉さまならそれくらいあつという間に読み終わるでしょ？」

「え……私なら、ってマリスは？」

「にははは、私はちよつと別の探しモノしてくるよあー」

そう言っつてマリスはそそくさと書架の方へと向かう。

「ちよつとマリス！ まさか抜け駆けするんじゃないでしょうね！」

「ダイジョブダイジョブ、姉さまに全部任せて一人だけ読書なんてことは考えてないからねえー」

本気なのか冗談なのかわからない口調でマリスは走り去っていく。後に残されたイリスは小さなため息をついた。

「膨大な情報を高速で読み取る、なんてスキルは姉さま向けだから

にゃ〜。あたしは……ピンポイントで必要な情報だけを仕入れさせてもらおうかにゃ〜」

マリスが向かったのは重要蔵書が収められた一般人立ち入り禁止の書庫。事務所の奥にあるが、消音灯と隠れマントを使って難なく扉まで進んだ。だが扉には嚴重に鍵がかけられている。

「物理的な錠前が七つ、それから魔術的な錠前が五つ、それから強固な結界魔術かあ……。物理錠と魔法錠を同時解除しないとダメ、しかも解除した際には警報発令機能付きとはやるねえ〜」

マリスはしばらく扉の構造を調べていたが、やがて小さなため息をつく。

「これは専用の装備が必要だねえ……」

今この扉を開けることは諦めたのか、彼女はくるりと背を向ける。事務所の外へ出ると、今度は歴史資料のコーナーへと向かう。

歴史書には過去に起きた事件などについての記述が残されている。もしかすると、似たような事件が過去にあったかもしれない。

マリスはできるだけ近代の歴史から辿っていく。時代が古くなればなるほど歴史は正確性を欠く。時には神話や伝説が本物の歴史として語られることすらある。彼女は史実を調べているのであって、神話や伝説を調べているのではない。人間の考え出した妄想という名の魔法に付き合っている暇はないのである。

「王歴1744年、神獣討伐……。最近ので一番大きな事件はこれかにゃあ〜」

神獣、それは文字通り神代の獣である高い知能を持った生命体だ。神獣は世界各地に封印されている。古代、人と神がまだこの世界で共存していた時代に神が生んだ、世界の秩序を守るための守護者、それが神獣だ。

人間では抗うことのできない強大な力を持ち、秩序を乱す者を殲滅する知性ある獣は、神がこの世界を去ったとき、この世界が混沌に包まれた際、正しい秩序を取り戻すためにこの世界へと遣した統制者だ。

長い間、神獣は神々によって封印されたままこの世界の各地で眠っていた。だが、その封印された状態の神獣を発見した人間はその強力な力をなんとか利用できないかと考えた。

その詮索の結果が軍事力への転用だった。

王都から比較的近い山奥にある炎の洞窟の奥深くで眠っていた炎の神獣、テラノの封印を人間は解除することに成功した。

だが、眠りから醒めた神獣は理性を失っていた。

というのも、この炎の洞窟の近くに鉱山が存在したのだが、人間はこの鉱山から炎の魔力を持つ鉱石を掘り出していた。それらは強力なエネルギー源となり、人間の生活に役立てられていた。

だが、同時にその鉱石を採掘する際に人間が使った魔術から漏れる魔力は確実に辺りを魔力で汚染していた。

そして、最悪なことにこの鉱山の下を通る魔脈はテラノの眠る炎の洞窟へと繋がっていた。汚染された魔力はテラノの元へと流れ込み、そしてテラノの理性を破壊してしまったのである。

結果として炎の洞窟を半壊させて世界へと飛び出したテラノは、本来守るべき世界を破壊する魔獣と成り果てた。

各国はテラノを討伐するために協力体制を敷く。そして、各国の優秀な戦士と魔術師、魔女を集結させてテラノを討伐することに成功した。

その戦いは一年にも及び、特に王都周辺へと残された爪痕は恐ろしいものだった。

以来、各国は神獣を他の技術に転用することはもちろん、封印を解除したり、発掘することすらも禁止する条約を締結するに至ったのである。

そして、この時の協力体制が今日まで生き残った結果が現在の平和だった。

「まさか神獣の復活……？ まさか……ねえ……」

神獣を復活させた際、何百人もの魔術師と魔女が数年がかりで封印を解除させたという。神獣が危険な存在だという認識が世界的に

存在する現在で神獣を復活させよう、などと考える魔術師や魔女がこれほどまでに集合できるだろうか、いや不可能だろう。

「けれども、世界を巻き込むほどの大事件ってこれくらいしかないからにやあ……」

マリスは続いて歴史書のページをめくる。そんな中目に飛び込んできたのが1442年の世界的赤死病の流行だった。

その原因には諸説あるが、その中で最も有力な候補の一つとして挙げられているのが禁書の“発動”である。

禁書とは以前にマリスの元へと雑女の依頼をしてきた魔術師に渡した魔具のオリジナルである。禁書のオリジナルならば、世界を滅ぼす戦乱を起こすことができるだろう。

禁“書”という名を持つ魔具であるが、その実態は願望機である。ただし、その力を発揮させるためには数万人の人間相当の魂を生贄に捧げることが必要だ。

禁書の効果を発揮させるにはいくつかのステップを踏む必要がある。

その第一段階が“発動”である。

禁書が発動することによって、禁書は世界に一つの“災厄の種類”を落とす。それがどういう形であるかはそのときによって違うが、ともかくその災厄によって数多くの魂が生きていた頃の体を離れていく。1442年の場合は世界的な伝染病の大流行だった。

第二段階が“吸収”だ。

“発動”によって世界に満ちた魂は死後の世界へと赴く前に禁書へと吸収される。

そして最終段階の“創造”で初めて願いが叶う。

しかし、このときもただ願いが叶うわけではない。“吸収”によって禁書に蓄えられた魂は魔力へと変換され、それは使用者の体へと流れ込む。使用者はその魔力を用いて魔法を使い、願いを叶えるわけだが、なにしろ数万人もの人間の魂を変換して作られた魔力だ。一人の人間のキャパシティを遥かに超えている量の魔力が流れ込む

ことになるわけである。

その魔力の暴走とも言える状態を耐え抜き、そして精神を狂わせることなく魔法を使って願いを叶えなければならぬのだ。

ほとんどの場合、使用者の人間の体や魂、精神が耐え切れずに破壊され、あるいは異形の化け物へと成り果ててしまうこととなる。

もともと、禁書の“発動”が確認されたこと自体が人類の歴史が始まって以来、片手の指でも数えられるほどの回数しかない。そして、実際に願いを叶えた例は一度もない。

今では禁書のオリジナルは行方不明となっている。海に沈んだという説も存在するし、どこかの国家が人知れず嚴重に管理しているという説も存在し、あるいは既に破壊されたという説も存在する。

「これも……可能性は低そうだなあ……」

そこまで思い至ってマリスは小さな声で呟く。確かに禁書が現在どこに存在するかは不明だが、なにより歴史が人間のキャパシティで扱うことのできない、人の身に余る魔具であることを証明している。この事実を知っていながら実行しようとする人間は皆無だろう。マリスは続けて歴史書のページをめくった。

「1082年、訪問者事件……。これがまだ可能性ありそうだなやあ……」

この事件についての記述はとも少ない。だが、この事件は確実に起こったといわれている。それは何故か。

それは　この事件に関して、わかっていることがあまりにも少ないからだ。だが、この事件によって現れた“訪問者”は確かな災禍を残していった。

1082年前後、その“訪問者”達は突如として現れた。

人の形をしていながら、しかし体は金属で覆われているその機兵は感情を持たずに人々を虐殺した。

当時には存在しなかった、そして現在でも再現不可能なほど高性能な銃器を持ち、さらには魔術を用いずに空を飛ぶ。そんな化け物が一体だけでなく、数百体という数が世界各地に突如として現れた

のである。

人に対して怨みを持っていてるかのように人を殺し続ける機兵に対し、人間はなす術もなかった。

だが、それから数年して別の“訪問者”が現れた。

最初に現れた機兵と同様、その機兵は突然世界に現れたが、今度の機兵は人間には目もくれず、最初の“訪問者”達を破壊し続けた。それからしばらくして、“訪問者”達の来訪はぱったりと途絶えてしまった。残っていた機兵もお互いに数を減らしていき、最終的には後に現れた機兵が勝ち残り、そして機能を停止した。

やがて動かなくなつた機兵の調査が行われたが、原理不明の高等技術が使われており、またその動力源やシステムに魔力が使われていない、ということだけしかわからなかった。

今ではその動かない機兵を各国が保存しているという。

現在、この事件は並行して存在する別世界の戦争の余波ではないかと考えられている。

もう少し詳しく解説すると、世界というものは幾つもの異なる世界が同時に横並びに存在していることが魔術的な調査で判明している。

それらは繋がりを持っていることもあるが、まったく繋がりのないこともある。

今回の事件はその繋がりのない世界が何らかの偶然で繋がりに、別の世界に存在するモノがこの世界に流出してきたのではないかと考えられているのである。

過去にもそういった現象は発生しており、これらは“世界設定のクロス・オーバー・フェノメノン
共通現象”と呼ばれている。

マリスは続けて歴史書をめくってみるが、これより以前には世界的に発生した明確な歴史は存在しなかった。

もつとも、明確でない歴史は存在する。

それがいわゆる神話や伝説の類であった。

神と魔王の抗争、世界的大洪水、天地の炎上……数を挙げればキ

リがない。

だが、もしそんな事件が実際に起こっていればこの世界が平和な状態で存在することがおかしい。人間はもちろん、この世界など既に滅んでいくはずである。

マリスはぱたんと歴史書を閉じた。

過去の事件と同じような事件が発生して戦乱が起こるのならば、先ほど挙げられた三つの事件が有力だろうと彼女は思った。

だが、本当にそうだろうか。

マリスは本を書架に戻すと、腕を組んで歩き始める。

禁書は確かに数度発動しているものの、他の事件　神獣の封印解除や、“訪問者”の訪問のような事件は過去に一度しか発生していない。

つまり、この先再び同じような事件が発生するとは考えにくい。

これらのことを統合すると、禁書　あるいは他の強力な魔具の暴走、というのが最も可能性のあるものだろうか。

世界の存亡を揺るがしかねない魔具は禁書をはじめとしてこの世界にいくつが存在する。所持者に栄光と滅びを与える聖槍、世界の運行を定めると言われている十二星座を象った魔石、聖人の血を受けたとされる聖杯……。どれもこれも伝説上の存在ではあるが、だがか中には現存していることがはっきりと確認されている魔具も存在する。先に挙げた聖杯は実際に国立博物館に保管されており、一般に公開されている。

目の前に見える最強の魔具である聖杯は確かに有力な候補の一つかもしれない。となると、この聖杯が奪われて使用される、というのがスタリアの視た未来だろうか。

マリスは別の書架に移動して聖杯に関する文献を漁ってみた。

聖杯、それは文字通り聖人の血を受けたとされる聖なる杯である。

聖人というものは存在そのものが人間としてのカテゴリーを超えている人間のことだ。触れただけで傷病者の傷や病を治し、貧しい

者に無限の施しを与え、そして死すら考える者に魂の救済を与える。
。そのいくつが事実かは不明だが、彼らは人々に救いを与え、奇跡を起こしたからこそ、現在に至っても絶大な信仰を得ているのである。

そんな者の血ともなれば、それが常軌を逸した物体であることは自明の理である。

まさに、人間の遺した絶対的な奇跡の顕現、象徴、具現。存在そのものが魔法なのである。

そんな聖遺物を悪用すれば、世界など簡単に滅んでしまう。

マリスは聖杯の持つ力について記述された本を見つけ出した。彼女はぱらぱらとページをめくってみる。

その本によると、聖杯は確かに莫大な魔力を持つ聖遺物ではあるが、その使用法などはいまいちわかっていないようである。

過去に聖杯を水で満たし、それを飲んだ者がいたようだが、まったく効果はなかったようだ。

聖杯から魔力を取り出そうという実験も行われたが、強固な結界が聖杯自体を取り囲んでおり、それも不可能だった。

他にも数多くの調査と実験が行われたが、結局聖杯を使って何かをすることはできなかったのである。

「だから博物館で公開してるんだにやあ〜」

強力な力を持つ聖遺物ではあるが、万が一盗まれてもそれを悪用することはできない。だから、王国は安心して公開することができるのだ。

「これは……手掛かりにならなかったにやあ……」

マリスは聖杯に関する本を書架に戻した。

「はあ……。最初からやり直した方が早いかもねえ……」

彼女は小さくため息をつく、ふらふらと書架の立ち並ぶ中へと消えていった。

20 マリスと事件（後書き）

さて、なんかいろいろ出てきましたね。

その中でも今回は“世界設定の共通現象”について説明しましょうか。

その名の通り、これはクロスオーバーという意味です。

同じ作者が別作品のキャラクターを登場させたりすることを指します。

実はトリリスでは第二部以降ではこのクロスオーバーが結構出てきます。

地味に物語にかかわったりといろいろ重要ですが、別にその作品を読んでいないと話が理解できない、というようなものではないのでご安心を。

まあ、読んでいるに越したことはないですが。

登場するのは主に部品とユジューからです。

懐かしいですねユジューティオナ。

ユジューからはキャラクターが、部品からは設定が出ます。

どんなふうに登場するかは楽しみにしていってくださいね。

では、次回予告！

一方、イリスはたくさん新聞を斜め読みしていた。

そして幾度となく目に飛び込んでくる『通り魔連続殺人事件』。

「姉さま、はかどってるう〜？」

マリスの問いかけにイリスは首を振る。

そのまま何時間も調べるも、ほかに手がかりは見つからない。

イリスはとりあえず、得られた手掛かりから連続通り魔殺人事件について考察することにした。

次話 21 イリスと魔女

他にも連続行方不明事件だとか、スラム街での強盗殺人放火、規則破りの魔術研究など、事件に暇がない。イリスはこんなに恐ろしい街によく住んでいられるな、と思った。

「ふう……」

そこで一度イリスは顔を上げる。マリスが現れたからである。

「姉さま、はかどつてるう？」

イリスは首を横に振った。それを見てマリスはため息をつく。

「だよねえ……。あたし達が少し調べたくらいで何かわかれば、とつくの昔に国が対策してるよねえ……」

「一応、半年分の新聞を見たけど、気になったのは連続通り魔殺人事件くらいかな……」

「お、どんな事件なのー？」

イリスは事件の概要を語って聞かせる。それを聞いてマリスはしばらくうん、うんと頷いていたが、話を聞き終わって渋い顔を浮かべる。

「んー……。個人じゃ限界あるよねえ……。怪しいっちゃ怪しいけどさあー……」

「そうよね……。もし戦乱なんてモノを引き起こせる力を持った化け物がこの事件を起こしているなら、こんな数人ずつ殺してないで王都そのものを一気に滅ぼせるわけだろうし」

「ただの快樂殺人者なんじゃなあい？ おお、王都は怖いトコだねえ……」

マリスはけらけらと笑いながらそう言った。

「もう……。マリスったら不謹慎よ？」

「ごめんごめえくん」

イリスは小さくため息をついた。

「じゃ、あたしはちよつと聞き込み行って来るよお。姉さまは新聞十年分お願いしてもいい？」

「私は構わないけど……。この前みたいに、危ないことにならないでね？」

イリスは真面目な表情を浮かべてマリスに言った。それを見て、マリスは少し視線をズラし、頬を朱色に染める。

「わ、わかっているよあ。もう不用意に生年月日を他人に教えたりしないからさあ」

「生年月日に限らず、危ないことをしてほしくないのよ。あなたが石化させられたとき、どれだけショックだったと思ってるの？もう、あんな思いはしたくないわ」

マリスはぼりぼりと頭を掻く。

「うん……わかったよあ……」

それを聞いて、イリスはぱつと笑顔を浮かべる。

「じゃあ、私はしばらくここににいるから」

「あ、姉さまホテルの場所わかるう？」

イリスは首を横に振る。

「じゃあ、閉館時間の頃に迎えに来るよあ」

「そうしてちょうだい」

マリスはくるりと背を向ける。それをイリスは見送ると、再び新聞へと視線を落とす。

「さて……他にどんな事件が起こってるのかしらね」

彼女は再び目まぐるしい速度で目を動かしながら、新聞を読み始めた。

それから数時間が経過した。

「ない……ないわ……」

四年分の新聞を読み終えたが、他に怪しい事件はない。

イリスはとりあえず、得られた手掛かりから連続通り魔殺人事件について考察することにする。

「つと、今何時かしら……」

図書館に掲げられた大時計を見る。時刻はおおよそ正午少し過ぎくらいの時間だった。

「どつりでお腹が空くわけだわ」

イリスは一度新聞から顔を上げると、ハンドバッグを手に立ち上がる。

図書館の隣には簡易食堂が設けられていた。イリスはそこで昼食を取ることにする。

さすがにほとんど正午ということもあって、店の中はかなり混雑している。そんな中、なんとか席を取るとイリスはランチセットを注文した。

イリスは手を組んで考える。四年分の新聞を読んでわかったことそれは連続通り魔殺人事件がおよそ一年ほど前から続いているということだった。

犠牲者の数は五百人以上。ギルド単位で壊滅させられた事件で一度に百人以上が殺害された事件による死者が全体の九割以上を占めていた。

「それにしても……これほどまでの人数を殺せるなんてどんな化け物なのかしら……」

中には王都内有数の強力な傭兵ギルドも含まれている。たとえ犯人が剣の達人といえど、戦争を生業としている者達を虐殺するなど、通常は不可能だ。

ならば、犯人は人間ではないのだろうか。ただの魔獣ならば知性などないに等しい。一年もの間、人間の住む街の中で姿を隠したまま過ごすなど不可能だ。

ならば考えられる可能性は何か。イリスは頭を絞って考えてみる。挙げられるものは……たとえば精霊や妖怪などの高い知能を持つ人外の類だ。精霊ならば姿を見つけれずに長い間人間の世界に隠れ住むことができるし、妖怪の中でも外見が人に近い個体の中には人間の社会の中で生活している者すら存在する。

精霊はその強力な魔力を使えば人を殺すことなど造作もない。諭えるならば、魔力の塊に意思を与えたのが精霊である。人間の力ではとても使いこなすことのできない魔術や魔法を操ることもできる

のである。ちなみに、精霊魔術とは彼らの力を借りることによって、発動する魔術だ。

さて妖怪についてだが、人間が自然界へと侵略していく中、自然界の住まう動植物が人間に狩られないようにする一番簡単な方法は何か。それは人間に擬態することである。

動植物が進化して人間に近い姿を得て、更に知能を得たのが妖怪だ。

もちろん、動植物が進化して人間の姿をとっているのだから、進化する前の生物の形質も持っている。猫の妖怪ならば素早く動くことができたり、象の妖怪ならばとてつもなく強い力を持っていたり、などである。

だが、とそこでイリスは考える。

精霊や妖怪が人間を殺すメリットはなんだろうか。

精霊は確かに意思を持つてはいるが、その思考回路は人間とは異なる。命を育む存在である彼らは他の命を奪う、という概念がそもそも存在しない。彼らはただそこに存在し、静かに世界を見守るのが存在意義であるのだ。

そして、妖怪はもつとメリットが見つからない。彼らは元々は動植物がベースだ。動植物達は無益な殺生を行わない。自らに利益のある殺生、すなわち自らのテリトリーが侵された場合や、食糧を確保するため、あるいは自衛のためなどだ。

「ランチセットAです」

ことり、と彼女の前に湯気を立てる食事が置かれた。だが、イリスはそれに手を付けることもなく考え続ける。

ならば犯人は人間なのだろうか。たとえば、強力な魔術師……いや、魔法使い。

そこまで考えてイリスはぶんぶんと首を振る。

魔術の発展したこの時代、本物の魔法などまずありえない。以前に騙されてからイリスはそうマリスに教え込まれてきた。

現在、あらゆる現象とその因果関係はほぼ解明されている。そし

て、そんな法則をぶち破るような奇跡、それが魔法だ。

つまり、ありえてはいけない現象を任意に引き起こせる者が魔法使いなのである。それは 考えようによっては神と同義だ。

そう、もはや魔法を使える者は人間としてのカテゴリーを超えている。

イリスはうなつて頭を抱え込み、テーブルにうつ伏せになる。

じゃあ、犯人は誰だ。誰がこんな事件を起こしているのか。

「……あ」

そこで、イリスは自分の考えた内容を少しだけ思い返してみる。

魔法を使える者は人間のカテゴリーを超えている。じゃあ、人間の力カテゴリーを超えた人間が事件を引き起こしている、と考えれば可能性があるのではないだろうか。

妖怪、という言葉は基本的に動植物が進化し、高等知能を身に付けた者のことを指す。ならば、人間も進化する可能性があるのではないだろうか。

魔術師の中には自らに魔術的な措置を施して人間以上の更なる上位の存在に昇華しようと試みた者も存在する。その多くは失敗に終わり、まともに生活できない体になった者がほとんどだが。

「もし、成功した人がいたら？」

人間の魔術的進化による妖怪化。ありえない話ではない。

いや、いくらなんでも突拍子過ぎるだろうか。

「リースちゃん、何か知らないかしら……」

あんなちんちくりんでも王宮魔術師だ。何か手掛かりくらいあるかもしれない。

イリスはランチセットをかつこむと、水で一気に流し込む。

一瞬で平らげると、伝票を手にとってレジへと走った。

「なるほどね……。それで……アタシのトコまでわざわざ来たのね

……」

リースドールはかなり不機嫌そうな表情を浮かべていた。顔は真っ青で、いかにも体調が悪そうだ。

「ったく……アタシは二日酔いでぶっ倒れてるってのに……」

「あはは……ごめんね、リースちゃん」

リースドールは舌打ちを打つと、指を鳴らした。

隣の部屋からぱたぱたと本が飛んでくる。イリスがその下を覗きこむと、小さな紙片が張り付いていた。

「はい、人間の妖怪化に成功した人間の情報」

そう言っつてリースドールは一冊の本を差し出す。

「え、ホントにいたの!？」

イリスは慌ててその本を受け取り、ぱらぱらとページをめくる。

「ヴィオレッタ・オクテット。精霊魔術の第一人者で、それを発展させた魔法、自然魔法の祖よ」

「自然魔法……?」

「精霊魔術がその場に満ちる精霊の力を借りて発動する魔術なら、自然魔法はその逆。術者から干渉して、場の精霊の情報、すなわち魔力の属性を書き換え、強制的に場に満ちる属性を変化させる魔法、それが自然魔法よ」

「ちよつと待つてよ! 精霊の情報を書き換えるってどういうこと!？」

「そのままの意味よ」

リースドールは小さくため息をつく。

「ヴィオレッタは精霊すらも使役……いえ、支配できる化け物みたいな式神使い。それもただの使役じゃない。存在そのものを変化させるっていう、属性保持の法則を完全にぶち破ってる魔法使い。それがヴィオレッタよ」

この世界に存在する絶対の理をねじ曲げる奇跡の業、それが魔法。そんなことができる化け物ならば、人知れず殺人を行うことも、戦乱を引き起こすことも容易いだろう。

「教えてくれてありがとう。そのヴィオレッタさんっていうのはど

「ここに住んでるの?」

その言葉を聞いて、リースドールは啞然とする。

「あんた馬鹿? あんな化け物に会ってどうするのよ。下手すれば殺されるわよ?」

「確かめたいことがあるのよ」

それほどの実力者ならば、通り魔事件どころか戦乱を起こすことくらい容易いだろう。もしかすると、ヴィオレッタが戦乱の元凶かもしれないと思うと、いてもたってもいられなかった。

「……つたく。でもあんた一人で行くのはやめなさい。億が一も勝ち目がないわよ」

「妹達を連れていったらどう?」

「あいつらもだけど、メルシーを連れていけば少しはマシよ。フォードにはアタシから話してあげるわ」

リースドールはもう一度指を鳴らした。すると、一枚の便箋と封筒を運ぶ式神が飛んでくる。

「場所はメルシーに教えておくから。あんた一人で行って犬死にされたら面倒なもの。で、他に用事は?」

「えっと……これ、何だか知ってる?」

そう言っただけでイリスは記憶の魔術書を取り出した。

「ああ、記憶の魔術書ね。何、なんか欲しいの?」

「もしかすると……殺されるかもしれないでしょ? リースちゃんのを貸してもらえないかな……?」

「やれやれ、というような表情を浮かべてリースドールは記憶の魔術書をひったくると、口語の呪文を唱える。

「はい、“王の伊吹”入れといたわよ」

そして、ぽんとオーブを放り投げた。それをイリスはキャッチする。

「ありがとね」

イリスはにつこりと笑った。

「じゃ、アタシは手紙書いたら寝るから」

「うん、おやすみリースちゃん」

イリスはぱたぱたと手を振って部屋を後にする。

ここに来てようやく手掛かりが掴めた。もしかすると無駄足に終わるかもしれない。だが、初めての手掛かりだ。イリスは少しワクワクする。

「図書館に行って、ヴィオレッタさんって人のことを少し調べてきましょう」

イリスはそう決めると、再び図書館へと向かっていった。

21 イリスと魔女（後書き）

えー・・・マジでごめんなさい。

仕事が忙しすぎて先週更新を忘れてました。

地震のせいで仕事がやばいきつくなってもうてんやわんやで・・・
なんとか仕事が終わり、こうして更新できるようになりました。

というわけで今週は二話連続更新です。

イリスが魔法使い、という手がかりを得るお話となっております。
果たして、このヴィオレッタという魔法使いは敵か、あるいは味方
か、それとも・・・気になるでしょうがお楽しみに！

では解説を。

今回は属性保持の法則についてお話しましょう。

属性保持の法則、とはその名の通り属性を保持する法則です。

なんのこっちゃ、とおっしゃる方がほとんどだと思つのもつとつ
つこんで解説しましょう。

たとえば、火の属性。これは魔力が火の属性を持っているというわけ
です。

例えるなら、化学によく登場する原子でしょうか。

たとえば、水素という原子はいかなる方法を用いても（核融合などの
例外はありますが）、水素以外の原子にすることはできません。

もちろん、化学反応させて酸素と結合し、水にすることはできます
が、限界まで細かく分けると、結局は水素となってしまうわけです。
同様に、水の魔力は水という属性以外を持つことはなく、風の魔力
も土の魔力も同様です。

ですが、ヴィオレッタの用いる魔法はこの法則を根本から破壊する
ものなのです。

水の魔力を火の魔力に変換したり、その逆も可能です。

これのどこが凄いかというと、水素を酸素にしてしまうくらいの凄さがあります。

魔法という奇跡を用いて魔力の性質を書き換える、それがこの魔法というわけなのです。

これ、一見どこが凄いのかよくわかりません。
では、具体例を一つ説明しましょう。

まず、Aさんが火の精霊魔術を使うとします。

爆発の精霊魔術を使うためには、その場に満ちる火と風の精霊の手助けが必要です。

火と風の精霊から火と風の魔力を引き出し、それを術者が持つ変換回路に組み込んで魔術へと組み換え、魔術という形で顕現させます。これが普通の魔術の使い方です。

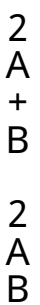
化学にたとえるならば、水素と酸素（火と風の魔力）を化学式（変換回路）を用いて化学反応（組み換え）させ、爆発という現象（魔術）を起こすわけです。

基本的なところは魔術も化学も同じです。

ただ、物理的な変換式を用いるか、精神的な変換式を用いるか、という違いなのです。

さて、お気付きの方も多いでしょうが、これは化学式である以上式に用いられた要素以外の要素を式に入れてはいけません。

つまり、



である必要があるのです。

しかし、ヴィオレッタの魔術は

という、右辺と左辺が繋がらない式を作り出すことも可能なのです。ただし、ヴィオレッタの能力はあくまでも属性変換のみなので、1の魔力からは1の魔力しか生み出すことができません。

それだけがヴィオレッタの弱点ですが、まあこの点が弱点となりうることはほとんどないでしょう。

なぜなら、魔力を枯渇させるということは、その場に満ちる精霊全てを消滅させることに他ならないのですから。

では、そろそろ次回予告と参りましょう。

三姉妹は今日一日歩いて得られた情報を整理する。

ヴィオレッタ、神獣、謎の連続殺人事件・・・

どれもが怪しく、そして疑うことができる。

しかし、この日はもう遅い。三人は眠りにつくことにする。

二人の妹達が寝静まった頃、長女は窓の外に黒い影を見た。

次話、22 アリスと一夜

22 アリスと一夜

第二十二話

「ヴィオレッタ・オクテット……ねえ……」

フォードの紹介で泊まっているホテルの一室で、三姉妹は向かい合って喋っていた。

まず、今日の報告を始めたのはイリスだった。連続通り魔殺人事件について、それほどの事件が起こせるのは人外が存在ではないだろうかということ、そして身近なところにいる人外にヴィオレッタがいること……。

「まあ、可能性としてはありえないよお？ ヴィオレッタならそりゃ戦乱を起こすことくらいわけないからさあ。でも、ヴィオレッタは静かに暮らす魔法使いの妖怪。そんなことをするとは思えないけどなあ……」

「でも、ヴィオレッタさんを味方にできれば、この先大きな戦乱が起こっても、助けてもらえませんか？ つまり、ヴィオレッタさんが戦乱を引き起こす犯人でも、そうでなくても収穫があると思うんです」

アリスが身を乗り出して言った。それを聞いてマリスが腕を組んで考えこむ。

「まあ……確かにそうだけどお……」

「行ってみましようよ。取って食われるわけじゃないんだしね」

「うーん……ヴィオレッタの場合、下手すると殺されかねないからなあ……」

マリスはひたすら渋る。そんな煮え切らない様子のマリスにイリスは立ち上がって言った。

「いいわよ。マリスが行かないなら私とメルシーさんだけでも行くから」

「わ、私も行きますよ!」

アリスは慌てて言った。やはりアリスは渋い顔をしていたが、やがてゆつくりと頷く。

「わかったよお……姉さま達だけ行かせて、殺されでもしたら後味悪いしねえ……」

「何よそれ。まるでヴィオレッタさんが凶悪人物みたいじゃない」
アリスはふるふると首を振った。

「姉さまはわかってないなあ……。妖怪がまともな人間と同じ思考回路してると思っのお？ もし、姉さまの周りをうっとおしい八工が飛んでたら殺すでしょ？ 姉さまがヴィオレッタにそう思われたら、同じ目に遭うかもしれないんだよお？」

「八工って……私は人間よ？」

「わかってない！ 姉さまはぜんぜんわかってない！ 妖怪と人間は形が似てても全く別物！ 平気な顔して食べていい？ とか聞いてくる妖怪もいるんだからねえ！」

「う……わかったわよ……」

イリスはアリスの剣幕に押されてどかりと椅子に座る。

「じゃあ、ヴィオレッタのトコには明日行くとして……あたしが今日わかったことを報告しようかなあ」

アリスはメモ帳を取り出す。

「軽うーくこの国と街の成り立ちを調べてきたよおー」

メモ帳を開いてテーブルの上に置く。そこにはおおまかな王都の地図が書き込まれてあった。

王宮は街の中心にあり、その周囲に街が広がっている。街の南側は市街地、東側は兵舎及び訓練場、西側には研究区画、北側は立ち入り禁止の王宮管理施設が存在する。

「まず、王都の街は五角形。そして、この街の各頂点には王宮管理の高い塔が建っている。これの意味がわかるかなあ？」

「どういうこと？」

「えっと……五角形は円に近い形ですよ。つまり、魔術的な意味

があるということですか？　そして、その塔ってというのが頂点なら……魔法陣？」

「ぱちん、とマリスは指を弾く。」

「アリス正解。王宮から各頂点に放射状に通りがあられるけれど、それとは別にこんな感じの裏通りもあってねえ……」

「そう言っつて、マリスは道を書き込んでいく。」

「これっつて……五芒星じゃない！」

「そ。この街は構造自体に魔術的な意味があるんだよおー」

「更に、マリスは街の外周部に円を書き込む。」

「この街、さりげなく城壁で囲われてるでしょおー？　あたしの推測だけども……その城壁の上、もしくは中に魔法陣の呪文が書き込まれてるんじゃないかなあ？」

「それっつて……どういう……？」

「この街っつてさ、実はとある古代遺跡の上に建ってるんだよねえー」

「古代遺跡……ですか……？」

「そ。神代の頃に造られた遺跡で、神獣が眠ってる」

「イリスは驚きのあまり立ち上がった。」

「ええ！？　ちよつと、それっつてどういうことよー！」

「姉さま、声大きいよおー……」

「マリスは呆れたような表情を浮かべて言った。」

「神獣っつて、眠っている間でもエネルギーを得るために、魔脈の集中する場所で眠ってるんだよおー。この街はまさに何本もの魔脈の交差する地点の直上。魔術を使う者にとっても都合がいいんだよねえー。でも、神獣が復活するのは怖いから、街で魔法陣を作って封印してるんじゃないかなあー？」

「だって、神獣を利用することは禁止されているハズじゃ……」

「姉さま、よく考えてみなよおー……。使ってるのは神獣じゃなくて、その直下にある魔脈の方。法的にはアウトじゃないんだよねえー」

「じゃあ……戦乱はその神獣が大暴れする結果起きる……っつて可能

性もあるんですか？」

アリスの言葉にマリスが頷く。

「あたしが考えたストーリーは、神獣を誰かが復活させて制御失敗、粉碎、災害、大惨事いーってヤツかねえー」

マリスの言葉も説得力のあるものだった。何より、過去に同じような事件が起きているのだ。至極わかりやすい。

「ま、あたしの調べたのはそんな感じかなあー。アリスは……そういえばホテルに直行したんだったよねえ……」

その言葉を聞いて、アリスはふるふると首を横に振る。

「いえ、メルシーさんの魔法で二日酔いを治してもらって、一緒に街を歩きました」

「魔法！？メルシーって魔法が使えるの!？」

「姉さま何を驚いてんのさあ……。天使なんて魔法をそのまま生き物にしたような存在なんだから、魔法くらい使えても驚くことないでしょお……」

「そ、そういえばそうね……。で、何を話したの？」

イリスはぼりぼりと照れ隠しに頭を掻いて尋ねる。

「そうですね……。この街がとても平和だっということがわかりました。メルシーさんも、そんな戦乱が起こる理由がわからない。それでも、フォードさんと一緒に戦乱を止める協力してくださるそうです」

「それは心強いなあー」

マリスはうんうんと頷く。

「とりあえず、情報を整理しましょう」

イリスは大きな紙を取り出し、羽ペンにインクを浸す。

「現在可能性としてありえるのは人外の存在によるもの。それから神獣の復活によるもの、って感じかしら。そして、今現在街には何もそれらしい兆候がない……」

「まとめるとそうなるねえー」

「考えられる対策は……ヴィオレッタさんのところに行つて事実関係の把握、それから神獣の封印の再確認というところでしょうか？」

イリスは紙へ次々と情報を書き込んでいく。

「まず明日はヴィオレッタさんのところへ行きましょう。リースちゃんにメルシーに居場所を教えておいてくれるって言ってたわ」

「じゃ、朝一でメルシーのところにいくうかねえー」

そこで、アリスが大きなあくびをする。

「ふわあ……。眠くなってきました……」

マリスはちらりと時計へと視線を向ける。既に深夜だった。

「にはは、少し熱中しすぎたねえ……」

イリスはくるくると羊皮紙を巻き、紐で綴じる。

「じゃあ寝ましようか」

三人はそれぞれのベッドへと収まる。最後にアリスが手を叩いてランプの火を消した。

「それじゃあおやすみなさい……」

まず真つ先に眠りへと落ちていったのはアリスだった。

「姉さまも早く寝ないと明日に差支えるよおー」

そしてマリスも目を閉じる。

しかし、イリスはそう簡単には寝付けなかった。

ああは言ってしまったが、明日は人外存在との戦いが待っている……。かもしれない。少し不安だった。

ふと、彼女は窓から外を見る。

「……?」

そのとき、何かの気配を感じたような気がした。

ホテルの前の道路を挟んで向かいの建物の屋上に……。黒いロープをはためかせる誰かが立っている……。ような気がした。

「え……?」

イリスは一度目をこすってよく確かめようとする。

強い風にロープがなびき、その手には　小さな体には似合わないほど大きな処刑鎌。

「ッ!？」

イリスは思わず飛び起きていた。

鍵もかけずに部屋から飛び出し、ホテルから飛び出した。

彼女がホテルから出てきたとき、ちょうどロープをまとった人間が屋根伝いに飛んでいくところだった。

イリスは走る。明らかに黒ロープの方が走る速度は速かったが、それでもなんとか追いつこうと走った。

だが、相手は障害物のない屋根の上。途中建物に阻まれ、まっすぐに追いかけられないイリスは舌打ちを打つ。

「待ちなさい！」

思わず彼女はそう叫んでいた。

途端にそのロープは足を止める。そしてイリスの方を見下ろしてきた。

「貴女は誰？」

まるで鈴のように美しい清らかな声。その声が少女のものであることにイリスは驚いた。

「私はイリス。イリス・トリリス。突然で悪いけど、あなたは何をしているの？ こんな夜中に鎌を持って屋根の上を走ってるなんて普通じゃないと思うけど」

少女はしばらく何かを考えていたが、そつと呟くように言った。

「私は罪人を探してただけ」

「罪人……？」

「そう。貴女には……罪はない。私の前から消えることを推奨する」少女はそう言うと、頭を覆っていたフードを脱いだ。

月の光に照らされて、少女の顔が露になる。

腰まで届く白髪。それは老人のそれとは違い、艶やかで輝きを放っている。そして、肌も大理石のように白い。

顔は少女のものでありながら、どこか大人びた雰囲気が漂っていた。

そして、吸い込まれそうなほど真っ赤な瞳。

その美しさにイリスは思わず見惚れてしまっていた。

「私は……デイスース。デイスース・リーパー。覚えておく必要は

ない」

「じゃあ、なんで名乗ったのかしら？」

ディシースはしばらくイリスを見つめていたが、やがてそつと口を開く。

「貴女が名乗ったから」

彼女はそう答えると、フードを目深く被って再びどこかへと駆けていく。

イリスは追いかけてやろうとしたが、次の瞬間には姿が見えなくなっていた。イリスは追いかけることを諦めると、とぼとぼとホテルへと戻っていく。

「何者かしら……？」

ただ者ではないそのオーラはイリスでも感じ取ることができた。恐らく、戦うことになったら万が一にも勝ち目はないだろう。

あの少女ほどの力を持つていれば 連続通り魔事件を引き起こすことも容易いかもれない。

「私、何を考えているのかしら……。いきなり初対面の人を殺人犯だなんて考えるなんて……」

ペしペし、とイリスは頬を叩く。

「うう、寒いわ。戻りましょう……」

イリスはもう一度だけディシースが立っていた場所を振り返る。そして、ゆっくりとホテルへと向かっていった。

22 アリスと一夜（後書き）

現れるは漆黒の影。

シルクのように美しい白髪を揺らし、しかしその手には巨鎌。

瞳はルビーのように赤く、しかし肌は磨き上げられた大理石のように白い。

さて、出ました出ました白髪少女。

僕の好物の属性であります。

しかも背まで届く巨大な処刑鎌を持っているとかツボ過ぎてもうね。まあ、だから書いちゃったわけですけど。

今回は情報整理の巻ですな。

19〜21話で集めた情報+ をここでまとめています。

そんなわけで、今回初出の王都は実は魔方陣だった！ というお話を解説しましょう。

ありとあらゆる力の循環系において、もっとも強力な力を生み出す形は円です。

だから、魔方陣というものは全て円形をしているわけですよ。

また、様々な格闘技などにおいても円の動きというのはもっとも強力で、直線的な動きよりも遥かに強力な力を持っています。

さて、今回は魔術的な話なので格闘技は放置しますが、この魔方陣というものは（僕の作品においては）巨大であるほど強い力を持っています。それは、陣が大きければ大きいほど、陣の内側により多くの魔力を内包するからです。

もちろん、その分制御が難しくなりますけれどもね。

ましてや、街一つを覆うほどの巨大な魔方陣ともなれば、その力はとても強力なモノとなります。

その力を利用したのが神獣の封印ですね。

神獣はその名の通り神代の驚異的な力を持つ、神の権化ともいえる獣です。

これは20話の作中でも述べた通りであります。

その力はたった一体で大津波を引き起こしたり、大地震を引き起こしたり、大雪、大噴火、大嵐と『大』と付くような自然現象は大方なんでも引き起こせると考えてもいいでしょう（もちろん、神獣によつて起こせる現象は違います。水の神獣であれば津波、火の神獣であれば噴火などという具合にです）。

これほどまでに強力な力を持つ神獣を封じ込めるには、強力な封印が必要です。

それを施したのが神代の神々です。

神々は世界が破滅に向かうようなことが起きたとき、神獣を目覚めさせて破滅を食い止めるように命令し、この世界を去りました。

もちろん、これほどまでの力を持つバケモノを世に放てば、世界などあつという間に崩壊してしまいますから、そのようなことが起きないように有事の際以外は目覚めぬよう封印を施したというわけです。

もちろん、これほどまでに強力なバケモノを封印するのですから、封印の維持には膨大な魔力が必要です。そんな魔力を普通の地からくみ上げていてはその大地はあつという間に枯渇します。

そこで用いられたのが魔脈と呼ばれる星の血管のような力の流れです。

まあ、この世界でいうと風水における龍脈のようなものだと思うっていただいて結構です。

この力の流れの交差する地点、それがこの神獣を封印している地点であります。

いろいろな地域から力が流れ込むわけですから、大量の魔力をくみ上げてても魔力が枯渇することはありません。それを補って余りあるほどの魔力を魔脈は運んでくるのです。

もちろん、そのような莫大な魔力がその場には溜まるわけですから、その地域は魔術を用いる者にとっては聖地にも等しいわけです。たとえば20話に登場した炎の神獣の眠る鉱山では豊富な魔力を含む鉱石が採掘できましたし、神獣の直上に建造された王都は魔術的にとても栄えた地となりました。

神獣を封じる封印はちょっとやそつこのことでは解けないので、人間も安心して暮らすこともできません。

そんなわけで、魔脈の交差する場所はとても魔術的にいい土地だといえるわけです。

さてさて、今回の解説はそろそろ終わりです。
では、次回予告へいきましようか！

朝食を終えた三人はフォード邸へと向かっていた。
しかし、イリスは謎の少女に出会ったことを言い出すことができないでいた。

「大丈夫、ちょっと変な夢を見ただけだから！」

彼女は明るい表情を浮かべるように努力する。

三人はフォード邸へと到着し、そして今後の方針を練ることにした。

次話、23 マリスと寝顔

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7924j/>

トリリスの娘

2011年3月28日00時10分発行